山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 335 集

福部遺跡・田通遺跡

－ 新山梨環状道路東部区間Ⅱ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

２０２２．３

山　梨　県

福部遺跡・田通遺跡

－ 新山梨環状道路東部区間Ⅱ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

２０２２．３

山　梨　県

福部遺跡上空から事業範囲、甲府盆地南部を望む（令和２年 10 月 30 日撮影）

田通遺跡上空から事業範囲、甲府盆地北部を望む（令和２年 10 月 16 日撮影）

福部遺跡発掘調査のあらまし

１．はじめに

福部遺跡は、甲府市落合町にある中世後半頃の遺跡です。

この報告書は、約 1,050㎡を対象に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査結果をまとめたものです。ここでは、本書を利用する際の手引きとなるよう、発掘調査のあらましを記します。

２．調査に至るまで

福部遺跡の発掘調査が実施されることとなったのは、この場所に新山梨環状道路の建設が計画されたことを受け、事前に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財保護の必要性が認められる層が確認されたことによります。この試掘調査で見つかった遺跡は、字名から「福部遺跡」としました。この試掘調査結果を受けて、工事の事業課である県県土整備部と県観光文化部とで協議し、発掘調査を行う運びとなりました。詳細は第１章 第１～３節に記述してあります。

３．調査の方法

発掘調査では、試掘調査で得られた深さのデータを基に、保護を必要とする埋蔵文化財の直上まで重機を使って掘削しました。そのあとは、人力により遺構を検出できる層まで慎重に掘り下げて、遺構の掘削、遺物等の取り上げを行いました。発掘調査中、調査区内外からの出水、降雨により掘削面全体が水没することもあり、調査作業は困難を極めました。

検出した遺構は、土層断面の観察による埋没過程の記録を行いながら掘り下げ、完掘しました。各段階において、記録写真撮影を行いながら、調査・記録作業を進めました。出土遺物は、破片資料しかなく、出土量も少なかったため、原則、位置情報の記録に努め、必要に応じて出土状況写真の撮影を行いました。

発掘調査終了後は、現地で取得した記録データの図化、分析、出土遺物の洗浄、注記、分類、図化等の整理作業を進め、一連の成果をまとめた本書を作成しました。

４．福部遺跡で発見されたもの

福部遺跡の周辺環境は、第２章に記述しました。この場所では幾度もの洪水、河川氾濫の堆積が広範囲に厚く堆積している状況が発掘調査でも確認できました。こうした土砂の堆積が落ち着いた短期間の間に人の活動があったと考えられます。

厚く堆積した土砂（A 区南壁）

福部遺跡からは、中世後半頃の畑の可能性がある畝状の遺構や鍛冶で排出される鉄滓を多く含んだ炭溜まりなどが見つかっており、人が暮らした居住空間ではなく、生産、生業に関わる空間の可能性があります。詳細は３章に記述してあります。

鉄滓を多く含む炭溜まり（SX01）

５．福部遺跡の発掘調査からわかること

福部遺跡は周囲に中世の土豪屋敷が点在する場所であり、その経済基盤を支えるための土地利用が想定される場所です。今回調査では、明確な土豪との関わりは不明ですが、青磁が６点出土していることは、その関連を匂わせるものかもしれません。

以上、調査のあらましになります。詳しくは本書の中をのぞいてみてください。

田通遺跡のあらまし

南から（小瀬スポーツ公園方面を望む）（令和２年 11 月４日撮影）

田通遺跡は山梨県小瀬スポーツ公園の南側、笛吹川と濁川の合流地点の西側にあり、昔から川の氾濫が多い地域にあります。

平成２度の試掘調査により、地表下 1.7 m（第１面）、2.8 m（第２面）程で、中世以降の畝跡や遺物が確認され、新たに「田通遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に登録された遺跡です。

事前準備

事前準備として、発掘現場の土壌が軟弱なため、廃土の場内運搬路用の鉄板や 、砕石を敷設したり、また、安全管理のため、仮囲い等の設置を行いました。

また、水田地帯であることから、調査中の出水を想定した排水処理の対応の準備も行いました。

表土剥ぎ

田通遺跡は、農道などで分断されるため、Ａ・Ｂ・Ｃ区の三つに分け、作業工程の都合上、北側のＣ区から表土剥ぎを行いました。Ｂ・Ｃ区においては、２面の文化層が確認されているため、表土剥ぎも２回に分けて行いました。

発掘作業の経過

作業風景

重機による表土剥ぎの終了後、いよいよ作業員を動員して、人力による作業の開始です。

想定したとおり、湧水により遺構確認に手間取りましたが、１面目にはＢ・Ｃ区から畝状の遺構が確認されました。

しかし、２面目では湧水により遺構確認面が沼地化し、遺構確認作業に困難を極め、土層断面による遺構確認を行うことになりました。

空撮（記録の様子）

記録作業は、基準点や方眼杭に基づいた光波による測量や、空撮による測量等も行いました。

確認された遺構や遺物

確認された土師器や陶磁器

確認された畝状遺構（Ｃ区）

発掘調査の成果として、確認された遺構が水田や畑などに伴うため、遺物の出土は少量ではありましたが、中世の土師質土器や陶磁器片、古銭等が確認され、遺構は写真のような畝状の機構がＢ・Ｃ区で確認されました。

発掘調査で確認された遺構や遺物は、基礎的整理、本格的整理を行ったあと、令和４年３月に発掘調査報告書を刊行いたしました。

序　　文

本書は、新山梨環状道路東部区間Ⅱ期工事事業に伴い、2020年度（令和２年度）に実施した福部遺跡及び田通遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

福部遺跡及び田通遺跡は、甲府市落合町にある中世の遺跡です。落合町周辺は、中世以来この地域を支配していた落合氏、小曲氏などの土豪が数多く屋敷を構えた地域です。今回の福部遺跡及び田通遺跡の調査では畑の一部を発見し、土豪屋敷を取り巻く経済基盤の一端を見ることができました。

従来この地域は、笛吹川などに由来する河川氾濫原で遺跡分布が希薄と考えられてきました。本事業に伴う丹念な分布調査により遺跡が相次いで発見されたことは、甲府盆地低地部における遺跡の存在を考え直すきっかけとなりました。今後の地域の歴史を紐解く上で大きな一歩になることでしょう。

本書が、今後の福部遺跡及び田通遺跡の保護、地域における歴史学習や研究のために、多くの方に御活用いただければ幸いです。最後に、今回の発掘調査及び調査報告書に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2022年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　西 川 秀 之

例　　言

1．本書は山梨県甲府市落合町に所在する福部遺跡及び田通遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設工事に伴う事前調査であり、県県土整備部から県観光文化部が委託を受け、同部埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
3．発掘調査に当たった組織は次のとおりである。

調 査 主 体	山梨県観光文化部
調 査 機 関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	【福 部 遺 跡】御山亮済（主任・文化財主事）、内田祥一（文化財主事）
	【田 通 遺 跡】高野玄明（専門員）、高左右裕（会計年度任用職員）
整 理 作 業	【令和２年度】高野玄明
	【令和３年度】高野玄明、御山亮済、桐部夏帆（会計年度任用職員）

4．本書の執筆分担は次のとおりである。第１章～第３章 第１節は御山（第２章第２節を除く）、第２章第２節は桐部、第３章 第２節は高野、第４章は パリノ・サーヴェイ株式会社、第５章は御山が執筆し、御山が編集をおこなった。
5．遺構写真及び調査風景写真は、福部遺跡は御山・内田が撮影し、田通遺跡は高野・高左右が行った。報告書掲載遺物の写真はアオヤギ フォトスタジオに委託した。
6．発掘調査及び整理作業にかかった期間は以下のとおりである。

発 掘 調 査	【福 部 遺 跡】令和２年８月６日～令和２年 12 月４日
	【田 通 遺 跡】令和２年８月 17 日～令和２年 12 月２日
整 理 作 業	【令和２年度】令和３年１月 21 日～令和３年３月 26 日
	【令和３年度】令和３年９月１日～令和４年２月 25 日

7．整理作業は、山梨県埋蔵文化財センター整理室にて行った。
8．本報告に関わる記録図面及び写真、出土遺物等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
9．発掘調査に係る調整機関及び担当者は以下のとおりである。

調 整 機 関	山梨県観光文化部文化振興・文化財課　埋蔵文化財担当
調整担当者	保坂和博（課長補佐）、石神孝子（リーダー・文化財主事）、熊谷晋祐（文化財主事）

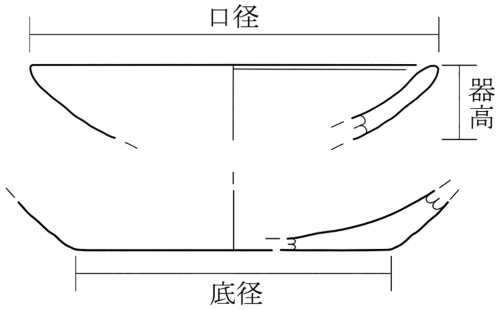
10．発掘調査に使用した機材は、光波測距儀はLN150(TOPCON)、遺跡測量システムは遺構くん(Cubic)、デジタル一眼レフカメラは D850（Nikon）を株式会社テクノプラニングから借り上げた。GPS による基準点設置及び写真測量、測量図化はシン技術コンサル株式会社、自然科学分析（珪藻分析、植物珪酸体分析、花粉分析）は株式会社パリノ・サーヴェイに委託して行った。
11．発掘調査および報告書の作成にあたって、以下の個人から御協力を賜った。ここに記して厚く感謝申し上げる（50 音順・敬称略）。

【発掘作業員】
＜福部遺跡＞青柳有紀、穴山公、榎原豊人、小野勇紀、久保田初夫、小林英樹、佐野克也、鈴木美和、田中隆之介、田丸進、直井光江、新田史男、萩原森詞、平井智規、穂坂はるみ、望月光、山本修二
＜田通遺跡＞赤尾力、穴山清、雨宮貞夫、雨宮信次、新谷博朋、有泉由利、石黒毅志、長田幸吉、長田舜、川住たまみ、小池幹子、小林進、齊藤幸雄、清水治重、田中英範、長島保次、七澤秀一、保坂秋蘭、宮城良男、望月晶、米山文徳
【整理作業員】
＜令和２年度＞小松千賀子
＜令和３年度＞石坂恵理

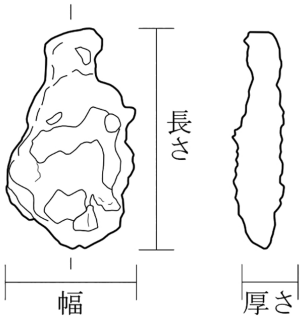
凡　　例

1．本報告書中の測量図面、実測図面の縮尺はそれぞれの挿図内に記した。
2．土層色調表記は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
3．第２図に使用した地形図は、国土地理院発行１／25,000 地形図「甲府」を使用している。
4．第４章自然科学分析の挿図番号、挿表番号、図版番号等は、同章内で完結しており、本文目次には記していない。
5．挿図中に使用したトーン、記号は以下のとおりである。なお、必要に応じて挿図中にも示した。
　・遺構図中のトーン・・・・炭化物範囲
　・遺物図中のトーン・・・・土　　器：煤付着範囲
　　木質遺物：炭化範囲
　　石 製 品：摩耗範囲
　・遺物図中（木質遺物）の矢印・・・・刃部の進行方向
6．土器類、石器類、木質遺物、金属遺物、古銭の寸法は、原則、以下のとおり計測した。

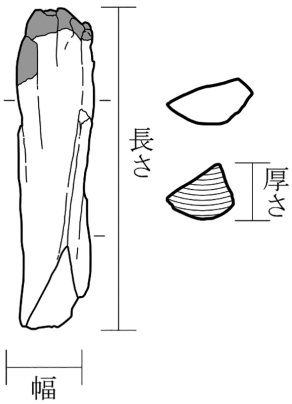
土器・陶磁器



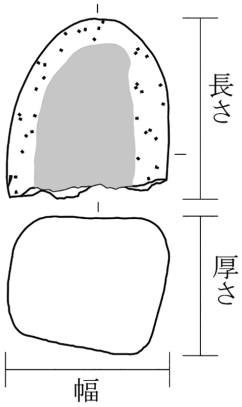
金属遺物



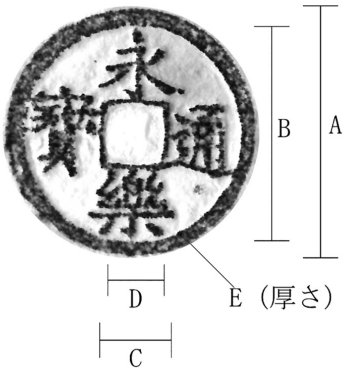
木質遺物



石製品



古銭



目　次

目　次

第１章　経過…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の目的と課題…… 3
　第３節　発掘作業の経過…… 3
　　第１項　福部遺跡発掘作業の経過…… 3
　　第２項　田通遺跡発掘作業の経過…… 4
　第４節　整理等作業の経過…… 4

第２章　遺跡の周辺環境…… 5
　第１節　地理的環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 6

第３章　調査の方法と成果…… 9
　第１節　福部遺跡…… 9
　　第１項　調査の方法…… 9
　　第２項　基本層序……11
　　第３項　発見した遺構……11
　　第４項　出土した遺物……19
　第２節　田通遺跡……23
　　第１項　調査の方法……23
　　第２項　基本層序……24
　　第３項　発見した遺構……27
　　第４項　出土した遺物……28

第４章　自然科学分析……36

第５章　総括……46

福部写真図版……47

田通写真図版……52

挿図目次

第１図　事業位置図…… 2
第２図　調査区周辺の地形分類…… 5
第３図　調査区周辺の近代村落分布…… 5
第４図　周辺の遺跡分布…… 7
第５図　発掘調査区の設定（福部遺跡）…… 9
第６図　基本土層図（福部遺跡）……10
第７図　調査区全体図（福部遺跡）…… 13 ～ 14
第８図　検出した遺構①（SD03,04,06）……15
第９図　検出した遺構②（SD05,SX01,02）……16
第10図　検出した遺構③（SX03,SP01 ～ 06）…17
第11図　検出した遺構④（SN01,02）……18
第12図　出土遺物①（福部遺跡）……20
第13図　出土遺物②（福部遺跡）……21
第14図　発掘調査区の設定（田通遺跡）……23
第15図　A・B・C区土層断面図（田通遺跡）… 25 ～ 26
第16図　遺構配置図（田通遺跡）…… 29 ～ 30
第17図　第１号畝状遺構平面図（田通遺跡）……31
第18図　第２号畝状遺構平面図（田通遺跡）……32
第19図　第３号畝状遺構平面図（田通遺跡）……33
第20図　出土遺物（田通遺跡）……34

表目次

第１表　発掘調査に係る届出等一覧…… 1
第２表　周辺の遺跡一覧…… 8
第３表　出土土器観察表（福部遺跡）……22
第４表　出土木質遺物観察表（福部遺跡）……22
第５表　出土鉄製品観察表（福部遺跡）……22
第６表　出土石製品観察表（福部遺跡）……22
第７表　出土古銭観察表（福部遺跡）……22
第８表　遺物観察表（田通遺跡）……35

第１章　経過

第１節　調査に至る経過

新山梨環状道路東部区間工事は、山梨県県土整備部道路整備課が所管し同部新環状道路建設事務所が実施する道路事業である。東部区間のうち、Ｉ期工事とされる甲府市西下條町から小曲町付近の区間については平成 25 年度に事業化されている。工事着手に当たっては、事業用地が広大に及ぶことから埋蔵文化財試掘調査を実施することとなり、調査ができる範囲の用地取得が進んだ段階で協議を行い、埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。試掘調査は、平成 29 年３月 13 日～ 24 日の間と平成 30 年３月２日～ 27 日の２回に分けて行った。Ｉ期工事に伴う試掘調査の結果、事業用地内の甲府市小曲町地内においては近世の陶磁器を含む畦畔が見つかり、近世以降と思われる水田が広がっていたことを確認したが、『山梨県埋蔵文化財事務取扱要綱』に基づき発掘調査不要と判断した。

Ⅱ期工事は甲府市落合町から同市向町付近までの区間であり、平成 26 年度に事業着手している。平成 31（令和元）年度には笛吹市石和町の事業用地内（落合東 IC- 東油川 IC 間）において、地表面下約４～５ｍの深さから古墳時代及び中世の文化層が見つかり、「北畑南遺跡」として遺跡台帳に新規登録された。発掘調査は同年度中に実施され、中世の溝状遺構群及び古墳時代前期～中期の竪穴建物群等が見つかっている。

令和２年度には、落合町地内（落合西 IC- 落合東 IC 間）において用地の取得が進んだことから試掘調査を実施することとなった。試掘調査では、橋脚工事における地耐力の保持のため橋脚の施工範囲外に試掘トレンチを設定することとした。

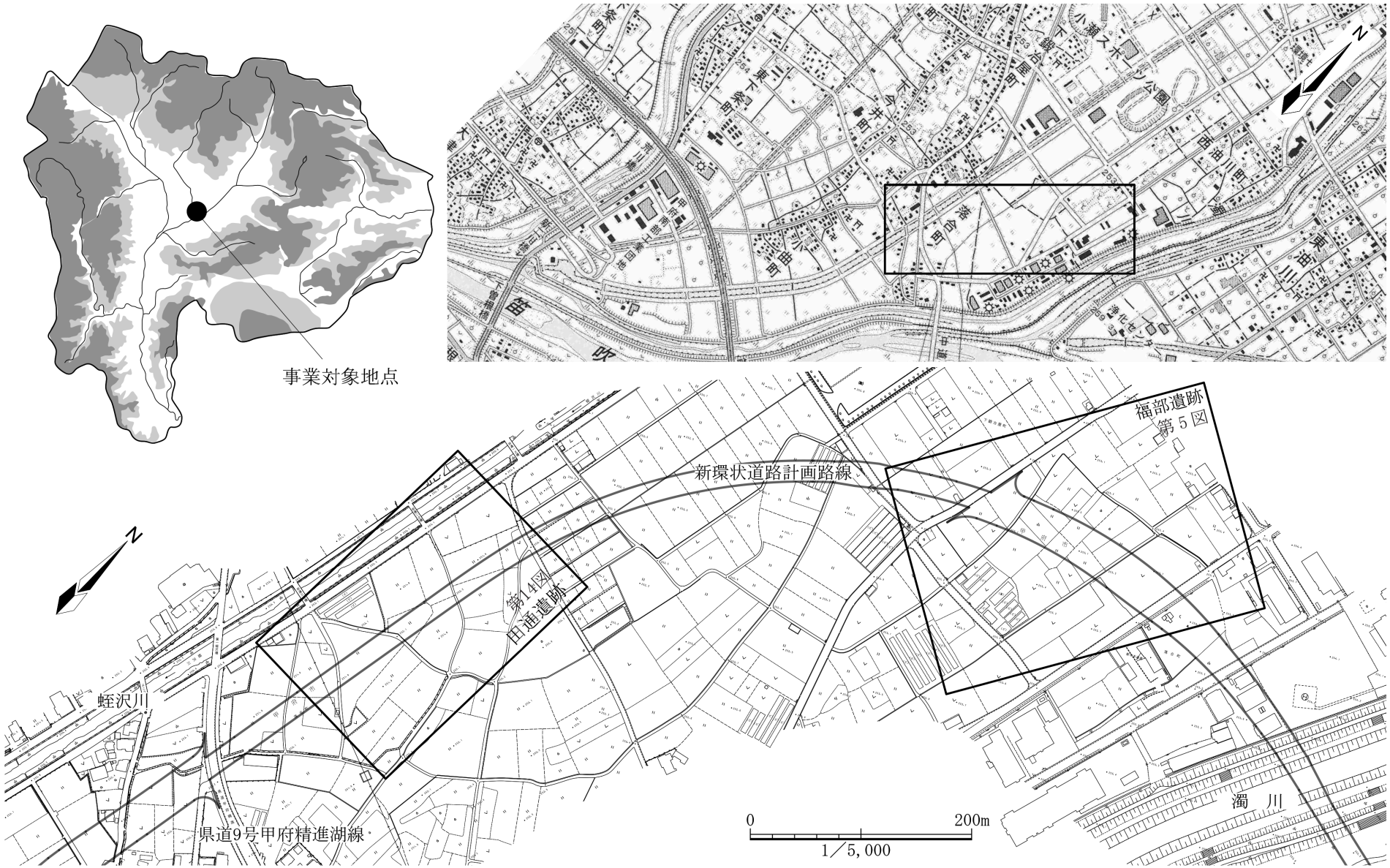
試掘調査は事業範囲内に５箇所のトレンチを設定して行い、保護範囲の確定のために部分的に補助トレンチを設定した。試掘調査の結果、事業範囲の南西部では水田に付属すると推定される用水路を伴う畦畔が地表面下約 1.7 ｍ地点において検出し、さらに下層の地表面下約 2.8 ｍ地点においても畦畔様の高まりを検出した。当該土層内には時期を特定する明確な遺物を含まなかったが、平安時代の灰釉陶器片が１片出土したことから保護措置を要する埋蔵文化財と判断し、周知の埋蔵文化財包蔵地「田通遺跡」として登録した。また、事業範囲の北東部では地表面下約 2.5 ～ 2.7 ｍ地点において、中世の土師質土器を含む炭化物集中を検出した。当該面からは中世に帰属する遺物が多く出土したことから、保護措置を要する周知の埋蔵文化財包蔵地「福部遺跡」として登録した。

福部遺跡及び田通遺跡における一連の発掘調査に当たって、令和２年７月１４日に道路整備課、新環状道路建設事務所、文化振興・文化財課の３者により、要保護範囲における橋脚間の取扱いの協議及び水田隣接地点に対する留意点等の確認を行った。この協議内容を踏まえて、同７月２２日には新環状道路建設事務所、文化振興・文化財課、埋蔵文化財センターの３者により橋脚間の取扱いについて協議を行った。この協議において、接地道路面該当部分に加えて発掘調査範囲は橋脚により遺跡が破壊されてしまう範囲もしくは橋脚の設置によりのちに発掘調査ができなくなってしまう範囲に限定することを相互確認して、調査範囲を確定した。したがって、福部遺跡では橋脚が密集しているＩＣ部分であることから、全面が発掘調査対象となり、田通遺跡では側道部分及び橋脚施工部分が発掘調査対象となった。

発掘調査に係る届出等は以下のとおりである。

第１表　発掘調査に係る届出等一覧

年度	対象	日　付	文書番号	文　書　名	発　信　者	受信者
Ｒ２	共通	令和2年7月1日		「道路改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」	道路整備課長	文化振興・文化財課長
		令和2年7月29日	環状第1298号	「埋蔵文化財発掘の通知について」	新環状道路建設事務所長	文化振興・文化財課長
		令和2年7月31日	文化第1646号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」	文化振興・文化財課長	新環状道路建設事務所長
		令和2年7月31日	文化第1646号	「埋蔵文化財の発掘調査の実施について」	文化振興・文化財課長	埋蔵文化財センター所長
	福部遺跡	令和2年8月24日	埋文第478号	「埋蔵文化財発掘調査の報告について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
		令和2年12月4日	埋文第821号	「埋蔵文化財の発見について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
		令和3年3月26日	埋文第1226号	「埋蔵文化財の発掘調査の結果について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
	田通遺跡	令和2年8月17日	埋文第606号	「埋蔵文化財発掘調査の報告について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
		令和2年12月4日	埋文第820号	「埋蔵文化財の発見について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
		令和3年1月8日	埋文第911号	「埋蔵文化財発掘調査の終了について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
Ｒ３	共通	令和3年6月15日		「道路改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」	道路整備課長	文化振興・文化財課長


事業対象地点
新環状道路計画路線
福部遺跡
第５図
第14図
甲通遺跡
蛭沢川
県道9号甲府精進湖線
濁　川
0
200m
1／5,000
N

第１図　事業位置図

第２節　調査の目的と課題

福部遺跡及び田通遺跡が所在する甲府市落合町周辺には、落合氏館跡をはじめとする中世土豪屋敷が点在している。試掘調査では中世の生産域と思われる遺構や遺物が見つかっていることから、周辺の中世土豪屋敷に関わる土地利用を明らかにするよう努めた。また、その土地利用の形態、遺構等の検出状況から、中世土豪屋敷を含む中世村落の形態が低湿地においてどのように展開するのかを課題として発掘調査を進めた。福部遺跡においては、遺構が希薄であり当初の調査課題の理解が困難であり、出土遺物には破片資料しかなかったことから、水成堆積中の遺跡の在り方を前後の土層堆積状況から検討することとし、出土遺物の位置情報の記録を実施した。一方、田通遺跡については試掘調査で想定されていた通り田畑跡を検出したことから、当初課題の理解に努めるとともに検出遺構（畝、畦畔等）の時期特定に努めた。

包括的な課題として、低湿地（遺構面から出水がある場合、深深度の法面保持等）についても、安全かつ適切な調査方法の検討を行いながら発掘調査を進めた。雨天時の作業段取りの模索、地盤が緩くなっている場合の足場の安全確保等、都度課題が噴出することが多く、発掘調査方法の課題が露呈した。

第３節　発掘作業の経過

第１項　福部遺跡発掘作業の経過

発掘に係る作業に先立ち、令和２年８月６日から作業ヤードの仮囲い設置、作業員休憩所、現場事務所等の施設設置、発電機等の機材搬入を行った。８月 17 日からは、排土場内運搬路の鉄板敷設作業を開始し、19 日から A 区の東側から表土の掘削を開始した。調査区の成形に当たっては、法面勾配を 35°未満に設定し、排水作業を並行して進めた。21 日には隣接する用水路から水がオーバーフローして調査区内に流れ込むトラブルが発生するなど、水の処理に悩まされながら掘削を進めた。8 月 24 日には発掘作業員 12 名の任用を開始し、周辺の環境整備を行った。25 日は A 区の重機による床付け掘削を開始し、GL-2,700 ～ 2,800mm において青磁片、土師質土器等の中世の遺物が検出した。床付け掘削が完了次第、調査区内に排水用の溝を人力掘削して、調査区内の環境整備に努めた。A 区の掘削が完了次第 B 区の表土掘削に着手した。当初掘削予定範囲の B 区東側幅約 10 mの範囲には大規模な既掘範囲が認められたため、新環状道路建設事務所及び文化振興・文化財課との協議の上、表土掘削の段階で調査対象範囲から除外した。表土の掘削は９月 15 日まで行い、翌 16 日までに敷鉄板を搬出して表土掘削の作業を終了した。

人力による掘削及び調査作業は A 区から着手し、遺構精査、遺構検出及び記録等作業を随時進めた。A 区では、調査区南東部において湧水点があり常に水が噴出していたことから、調査作業に転倒等の危険が生じること、地盤がぬかるんで地盤が攪乱されてしまったことから、遺構精査等の作業を断念せざるを得なかった。調査作業については同様に遺構精査、遺構検出を進めたが、遺構精査に当たっては人力により約 20cm の掘削を行った。B 区の南東隅には常に地下水が噴出する地点があり、A 区同様に調査作業を断念した部分がある（途中、10 月 12 日には降雨により調査区全域が水深 1m 程度水没し、調査が中断する事態となった）。遺構の調査、記録等作業は 10 月 29 日までに終了し、同 30 日には空中写真撮影を行った。その後、土壌サンプリング、追加掘削調査等を行い、11 月９日から埋め戻し作業を開始した。埋め戻しは A 区から行い、A 区の埋め戻し完了後、B 区の埋め戻しを行った。埋め戻し工は 11 月 28 日までに完了し、11 月 30 日までに仮囲いの撤去及び施設、機材等のリース物品の搬出を完了した。12 月４日までには現場の資材、物品等を完全に搬出して撤収を完了した。

雨天後の水没した調査区（10 月 12 日）

発掘調査にかかった人員は、のべ 571 人である。調査期間中の稼働可能日数 57 日間に対し、雨天等により実質稼働日は 46 日間であり、約 80％の稼働率で調査を実施した。本調査期間中及び調査前の荒天日が多く、十分な調査環境を保つことが困難な調査であった。

第２項　田通遺跡発掘作業の経過

本道路建設事業は橋梁の高架道路であることから、「山梨県埋蔵文化財取扱要項」第６条に基づき、橋脚及び側道部分について記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。発掘作業に先立ち、令和２年８月17日から、事前準備として作業ヤードの仮囲い設置、作業員休憩所、現場事務所の設置や、発電機等の機材搬入を行った。９月1日より、表土掘削を行ったが、調査区を農道が横断し分断されるため、南から北へA・B・C区と命名し、調査を実施した。また、試掘調査の結果により、C区・B区（北側半分）において、地表下1.7～2.8ｍの深度で、２面の畦上状の遺構が検出されており、１面の調査が終了し次第、両区において対応することとした。発掘調査の工程上、１面目は調査区北側のC区から実施し、B区、A区へと表土剥ぎを行った。調査区の成型に当たっては、法面成型35°未満に設定し、排水作業も並行して表土掘削作業を行った。表土掘削については、0.7㎥クラスの重機２台、10ｔダンプ等により、新環状道路事業予定地内への搬出を行った。測量杭など基準杭の打設や調査区内における５ｍ方眼の杭を測地成果2011に基づき国土座標系の方位・方向に沿って打設した。

９月４日から10月９日まで発掘作業員として任用された13名を雇用し、C区の１面から遺構の精査作業などを実施した。地表下1.7ｍ程で、２カ所の畝状遺構が確認され、遺物もわずかながら土師質土器が見られた。10月12日～10月23日まではA区の調査を実施したが、やはり湧水が激しく遺構確認面が沼地化し遺構精査が十分にできる状況ではなく、調査区壁面の土層観察に主体を置き調査を実施した。A区においては、畦や畝などの遺構の確認はされなかった。出土遺物については、土師質土器や陶磁器類が確認されている。B区の調査は、10月20日～10月30日まで実施し、調査区北側に畝状遺構が確認されている。遺物は古銭・土師質土器が検出されている。

２面目においては、10月26日～11月８日にC区～B区へと２面目の遺構確認面の掘削作業を行い、11月５日～20日まで、遺構精査作業を行ったが、湧水が激しく遺構確認面が沼地化するなど、発掘作業員の転倒などが危惧されたため、遺構精査を十分に行う事ができず、作業を断念する結果となった。

発掘作業中には、各区や各面毎に空中写真撮影やセクション図や遺物取り上げなど記録作業を行うと共に、空中写真撮影時には、デジタル図化に対応できるオルソ画像及び計測済み補備測量データからの図面作成に対応できる業務委託も行った。また、畝状遺構の土壌サンプル等も行い、11月20日には記録作業など発掘調査がすべて終了した。埋め戻しは、11月２日から調査が終了しているA区～B区～C区へと順次行い、11月27日には埋め戻しがすべて終了し、仮囲いや休憩所・事務所の撤去等、12月２日には、完全搬出し、撤収作業は終了した。

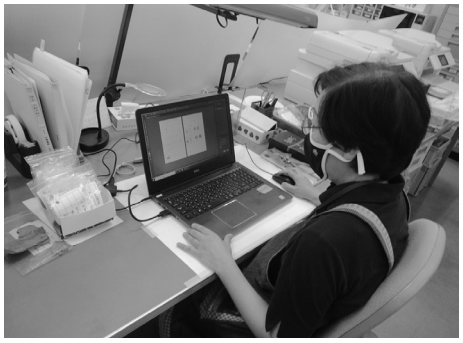
田通遺跡は、低湿地で出水期であることから、ある程度の出水は想定できた。しかし、想定以上の出水があるなど、壁面の崩落、地盤の沼地化等、安全面に苦慮した遺跡であった。

作業風景（C区一面）

第4節　整理等作業の経過

福部遺跡と田通遺跡の整理作業は、本調査終了後の年明け令和３年1月21日～３月26日まで、基礎的整理作業を行い、報告書刊行に伴う本格的整理作業は令和3年9月1日～令和４年２月25日まで、基礎的整理・本格的整理共に各1名の整理作業員を任用し、両遺跡の整理作業を行った。

基礎的整理は、出土品の洗浄を1月21日～28日、出土品の注記、接合を２月１日～24日、出土品の実測・拓本などを２月25日～３月26日まで実施した。本格的整理は、出土品の実測を含め、両遺跡の遺構や遺物のデジタルトレース作業を主に行い、田通遺跡のデジタル図化業務委託、両遺跡の土壌サンプル分析業務委託、また遺物写真撮影業務も委託し実施した。原稿の執筆や図版のレイアウトを行い、令和４年３月15日に、福部遺跡・田通遺跡として発掘調査報告書を刊行した。

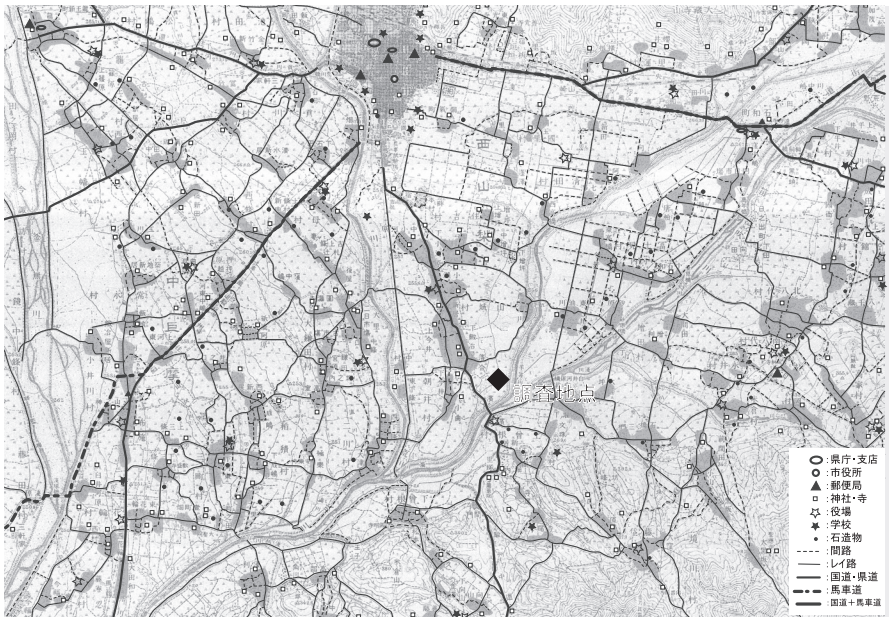


デジタルトレース風景

第２章　遺跡の周辺環境

第１節　地理的環境

第２図　調査区周辺の地形分類
（国土地理院『治水地形分類図』を再トレースして加工）



第３図　調査区周辺の近代村落分布（網掛け…市街範囲）
（明治 41 年測量地形図「甲府」を元図に作成）

山梨県は日本列島本州の中央よりやや南東に位置している。周囲を山地が囲繞し、北から時計回りに、関東山地、御坂・道志山地、赤石山脈が連なる。周囲を山々に囲まれた中央に甲府盆地を擁し、その中を笛吹川、日川、荒川、釜無川などの大河川が南西に向かって収束し、富士川となって駿河湾に流れ出していく。したがって、遺跡が所在する甲府盆地盆底部は、扇状地の集合体となり、河川由来の地形がその大半を占める地形形成となる。

甲府市は山梨県の県庁所在地である。その市域は、北は長野県境の金峰山、南は富士河口湖町までと南北に長く、甲府盆地を縦断する。福部遺跡及び田通遺跡が所在する甲府市落合町は甲府市域の南部に当たり、笛吹川の右岸に近い地域にある。標高は現地表面で 251.8 m～ 253.7 mほどの位置にある。広域に見れば釜無川から濁川、平等川に挟まれた地域の大半は扇状地地形であり、釜無川の旧流路は赤坂台地を起点に東に大きく孕み出すように変化し、北西から南東に向かって標高が下っていく。本県昭和町付近においては北から南に向かって流路を南北に変えて、甲府盆地南部を流れる笛吹川に合流していく。したがって、甲府盆地西部地域においては枝垂れ様に旧流路が展開している（第２図）。このことを念頭に、村落の分布を確認してみると、第３図のように旧流路と同様に枝垂れ様の村落分布が認められる。甲府盆地の盆底部地域においては、旧流路が形成した自然堤防（微高地）上を選定して村落が分布しており、それを繋ぐ交通路が自然堤防上に放射状に発達しているようすも看取できる。さらに、放射状の交通路を横方向に連絡する交通路も発達しており、蜘蛛の巣状に交通路が張り巡らされている。

調査地点は甲府市街から南流する濁川、平等川を東に望み、西側を小瀬スポーツ公園の中を流れる蛭沢川に挟まれた氾濫平野に当たる。福部遺跡が分布する落合村（甲府市落合町）は、この蜘蛛の巣状に展開した村落分布の東端部にある。この地域には北部に位置している中小河原地区まで一連となっている南北に長い自然堤防（微高地）が発達しており、この自然堤防上に落合氏館跡、小曲氏館跡、今井氏館跡といった中世土豪屋敷が点在している。

第２節　歴史的環境

福部遺跡及び田通遺跡周辺の遺跡分布図を第４図、第２表に示した。現時点では、遺跡は笛吹川左岸にある曽根丘陵上に集中している状況おり、笛吹川右岸に展開する低地部では遺跡分布は希薄である。しかしながら、白井河原橋橋脚工事において笛吹川河床から土器が出土した白井河原橋下遺跡（17）や、本遺跡と調査原因を同じくし地表面下約５ｍから古墳時代の土器が大量出土した北畑南遺跡（16）の発見から、人の活動が丘陵上に限定されていたのではないことが示唆されている。

本遺跡を中心とした第４図中においては、旧石器時代から近世に渡って 93 の遺跡が分布している。その内訳は、旧石器時代３件、縄文時代 23 件、弥生時代 26 件、古墳時代 70 件（うち古墳 32 件）、奈良・平安時代 21 件、中世 11 件（うち城館跡７件）、近世以降４件となっており、古墳時代の遺跡が優占している。以下で、時代毎に概観を記す。

旧石器時代　遺跡地図上では、東山北遺跡（63）、立石遺跡（80）、米倉山Ａ遺跡（88）の３件のみが登録されているが、このほか、甲府市中道町の宮の上遺跡、同町の下向山遺跡、米倉山Ｂ遺跡、小平沢遺跡（90）、前付遺跡（61）などにおいて旧石器の出土が認められ、曽根丘陵は旧石器時代における主な活動領域であったことが窺える。

縄文時代　縄文時代では、前付遺跡において草創期の槍先形尖頭器が遺構外から出土している。集落域との認識は出来ないが、当該期の人の活動域であったことが示唆される事例である。また、同遺跡では前期初頭の土器片が出土しているが、これも遺構に伴うものではなく集落としての土地利用は認められない。前付遺跡において縄文時代の集落が展開するようになるのは、中期中葉頃からと考えられている。曽根丘陵上においては、上の平遺跡（76）（前期末～中期中葉）、立石遺跡、下向山遺跡（中期初頭）などの事例を踏まえて前期末から中期中葉頃の集落跡が集中する傾向がみられることが指摘されている。

弥生時代　山梨県内の遺跡分布では弥生時代の遺跡は極端に少ないが、当該期の遺跡は笛吹川右岸の低地部でも分布が認められる。現状、低地部の弥生時代遺跡の発掘調査事例はないため実態は不明である。一方で、曽根丘陵上では特に 120 基を超える方形周溝墓が集落跡とともに見つかった上の平遺跡（後期後半）の存在は特異的であろう。その他、米倉山遺跡や女沢遺跡（89）など当該期の遺跡が集中しており、後の小平沢古墳から始まる中道古墳群形成の先駆けとなっている。

古墳時代　甲府市中道町地域においては、４世紀になると県下最古の小平沢古墳（84）（４世紀中頃・前方後方墳）から古墳築造ラッシュが始まる。４世紀後半には、東日本最大級の前方後円墳である甲斐銚子塚古墳（69）をはじめ、丸山塚古墳（68）、大丸山古墳（70）などの大規模古墳が築造される。このことから、当該期における中道町地域は甲斐国の中心地であったことは間違いなく、前方後円墳の築造から畿内王権とのつながりがある豪族であったと言える。一方で、笛吹川右岸の低地部において当該期の遺跡の発掘調査事例が出現する。外河原ヂクヤ遺跡（10）では地下約 1.7 ～ 2.2 ｍ地点において古墳時代初頭の方形周溝墓をはじめとした当該期の遺構、遺物が発見されている。また近年では、北畑南遺跡では前述のとおり地下５ｍ地点において前期の遺構群が見つかっている。いずれも深く埋没しており、今後の丹念な埋蔵文化財の捕捉が進むことが期待される。

奈良・平安時代　甲府盆地低地部の分布が多くなる時期である。調査事例は少なく実態は判然としないものの、外河原ヂクヤ遺跡、石橋条里制遺構（19）等にて竪穴建物跡や掘立柱建物跡等が見つかっており、低地部において明確に居住空間を形成し始める時期と言える。丘陵部においては瓦塔を出土した前付遺跡のような拠点的施設の立地が認められる。ただし広域的な土地の利用は当時の景観の復元を踏まえて検討する必要がある。

中世　中世になると、笛吹川右岸地域において、一層濃い活動痕跡がみられる。特に本遺跡が立地する甲府市落合町周辺では、落合氏屋敷跡（14）、小曲氏屋敷跡（15）、小瀬氏館跡（11）、今井氏屋敷跡（13）等の土豪屋敷が点在する。この低地地域への土豪の進出は、武家社会に転換する中で支配者層が物資確保のために耕地拡大を目指したことに起因するものと推測される。また、当町域は、古代以来同市中道町域を通過する「中道往還」のルート沿いにある。東海道方面から見ると笛吹川を渡河した先に当たり、交通または軍事の要衝と言え、土豪屋敷が集中する背景にはこうした立地要因があると考えられる。福部遺跡及び田通遺跡はこの中道往還のルートからやや外れた場所にあり土豪屋敷のような拠点施設からもやや距離があるが、中世村落の領域が判然としない現状では土豪屋敷との関わりを含めた検討が望まれる。

N
対象遺跡
新山梨環状道路東部区間計画路線
甲府市
小瀬スポーツ公園
増坪町
東高橋
今井
井戸
砂原
東油川
西油川町
下鍛冶屋町
上今井町
中町
下今井町
東下条町
西下条町
小瀬町
中小河原町
下小河原町
上曽根町
中村
白井町
大坪
坊ケ峯
下曽根町
下曽根
日向林
寺尾
0
1km
S=1／25,000

第４図　周辺の遺跡分布

第２表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	住吉天神遺跡	散布地	古墳 / 奈良 / 平安
2	小宮山土佐守屋敷跡	城館跡	中世
3	上ノ木遺跡	散布地	古墳 / 奈良 / 平安
4	宮田遺跡	散布地	弥生 / 古墳 / 奈良 / 平安
5	大土井遺跡	散布地	平安
6	土尻遺跡	散布地	中世
7	上町天神遺跡	散布地	古墳 / 奈良 / 平安
8	明石・西河原遺跡	散布地	平安
9	二又遺跡	包蔵地	弥生 / 古墳 / 奈良 / 平安
10	外河原ヂクヤ遺跡	散布地	古墳 / 奈良 / 平安
11	小瀬氏館跡	城館跡	中世
12	東耕地遺跡	散布地	平安 / 中世
13	今井氏屋敷跡	城館跡	中世
14	落合氏屋敷跡	城館跡	中世
15	小曲氏屋敷跡	城館跡	中世
16	北畑南遺跡	散布地	古墳 / 中世
17	白井河原橋下遺跡	散布地	弥生 / 古墳
18	扇田遺跡	散布地	古墳 / 平安
19	石橋条里制遺跡	条里	平安
20	八乙女塚古墳	古墳	古墳
21	口開遺跡	集落地	弥生
22	下向窯跡	窯跡	古墳 / 近世 / 近現代
23	後子の神遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
24	塚の越三号墳	古墳	古墳
25	塚の越二号墳	古墳	古墳
26	塚の越一号墳	古墳	古墳
27	八乙女遺跡	散布地	縄文 / 古墳
28	北の宮遺跡	集落跡	縄文 / 古墳 / 平安
29	原氏屋敷	城館跡	中世
30	諏訪前南遺跡	散布地	縄文 / 古墳
31	諏訪前遺跡	散布地	縄文 / 古墳 / 奈良 / 平安
32	諏訪前二号墳	古墳	古墳
33	諏訪前三号墳	古墳	古墳
34	諏訪前一号墳	古墳	古墳
35	諏訪尻遺跡	集落跡	縄文 / 弥生 / 古墳
36	藪ノ内遺跡	散布地	古墳
37	薮ノ内遺跡	散布地	古墳
38	勝山城跡	城跡	中世
39	天神山遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
40	飯潰遺跡	散布地	中世 / 近世
41	下原遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳 / 奈良 / 平安
42	飯潰一号墳	古墳	古墳
43	飯潰二号墳	古墳	古墳
44	天神前遺跡	散布地	縄文 / 古墳 / 奈良 / 平安
45	無名墳	古墳	古墳
46	無名墳	古墳	古墳
47	朝日遺跡	散布地・古墳	弥生 / 古墳

番号	遺跡名	種別	時代
48	無名墳	古墳	古墳
49	天神山塚古墳	古墳	古墳
50	無名墳	古墳	古墳
51	物見塚古墳	古墳	古墳
52	物見塚遺跡	集落跡	縄文 / 弥生 / 平安
53	北ノ山遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
54	天神遺跡	集落跡	縄文 / 弥生 / 平安
55	中寺尾経塚	経塚	中世
56	北原遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
57	上原遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 近世
58	白戸遺跡	散布地	縄文 / 平安
59	坂下遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
60	馬場遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
61	前付遺跡	散布地	縄文 / 弥生 / 古墳
62	東山北遺跡	集落跡	縄文 / 弥生 / 古墳
63	東山北遺跡	集落跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳
64	考古学博物館構内古墳	古墳	古墳
65	杯塚古墳	古墳	古墳
66	かんかん塚古墳（茶塚古墳）	古墳	古墳
67	岩清水遺跡	集落跡・古墳	弥生 / 古墳 / 平安
68	丸山塚古墳	古墳	古墳
69	銚子塚古墳	古墳	古墳
70	大丸山古墳	古墳	古墳
71	狐塚古墳	古墳	古墳
72	鍋弦塚古墳	古墳	中世
73	無名墳	古墳	古墳
74	無名墳	古墳	古墳
75	東山南遺跡	集落跡	弥生 / 古墳
76	上ノ平遺跡（佐久遺跡）	集落跡	縄文 / 弥生 / 古墳 / 平安
77	宮の上遺跡	集落跡	縄文
78	熊久保遺跡	散布地	弥生
79	馬乗窪遺跡	散布地	弥生 / 古墳
80	立石遺跡	集落跡	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳
81	女沢 A 遺跡	散布地	弥生 / 古墳
82	金塚古墳	古墳	古墳
83	女沢 B 遺跡	散布地	弥生 / 古墳
84	小平沢古墳	古墳	古墳
85	無名墳	古墳	古墳
86	無名墳	古墳	古墳
87	無名墳	古墳	古墳
88	米倉山 A 遺跡	散布地	旧石器 / 縄文 / 弥生 / 古墳
89	女沢 C 遺跡	散布地	弥生 / 古墳
90	小平沢遺跡	散布地	古墳 / 平安
91	無名墳	古墳	古墳
92	無名墳	古墳	古墳
93	無名墳	古墳	古墳

（番号は第４図の番号と一致）

第３章　調査の方法と成果

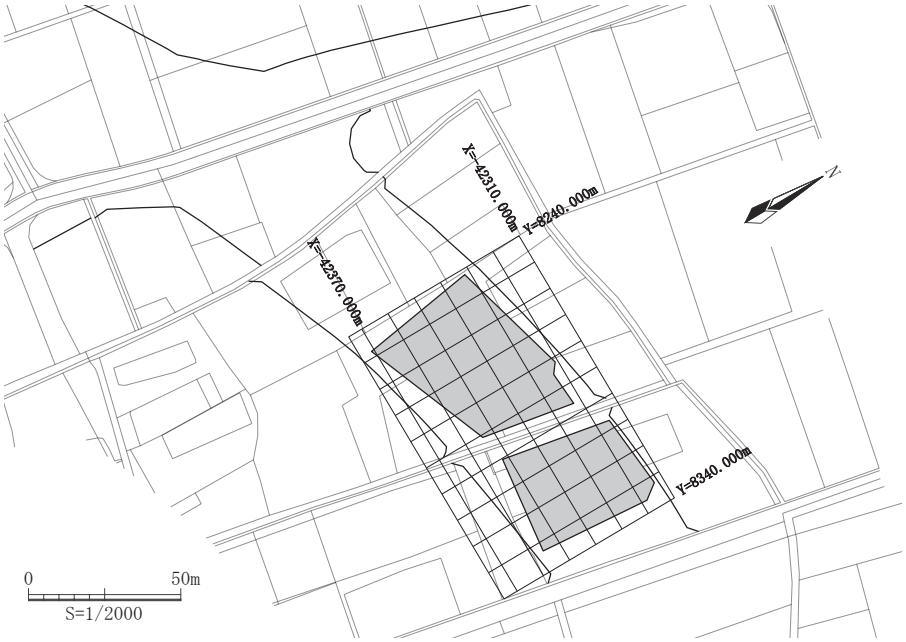
第１節　福部遺跡

第１項　調査の方法

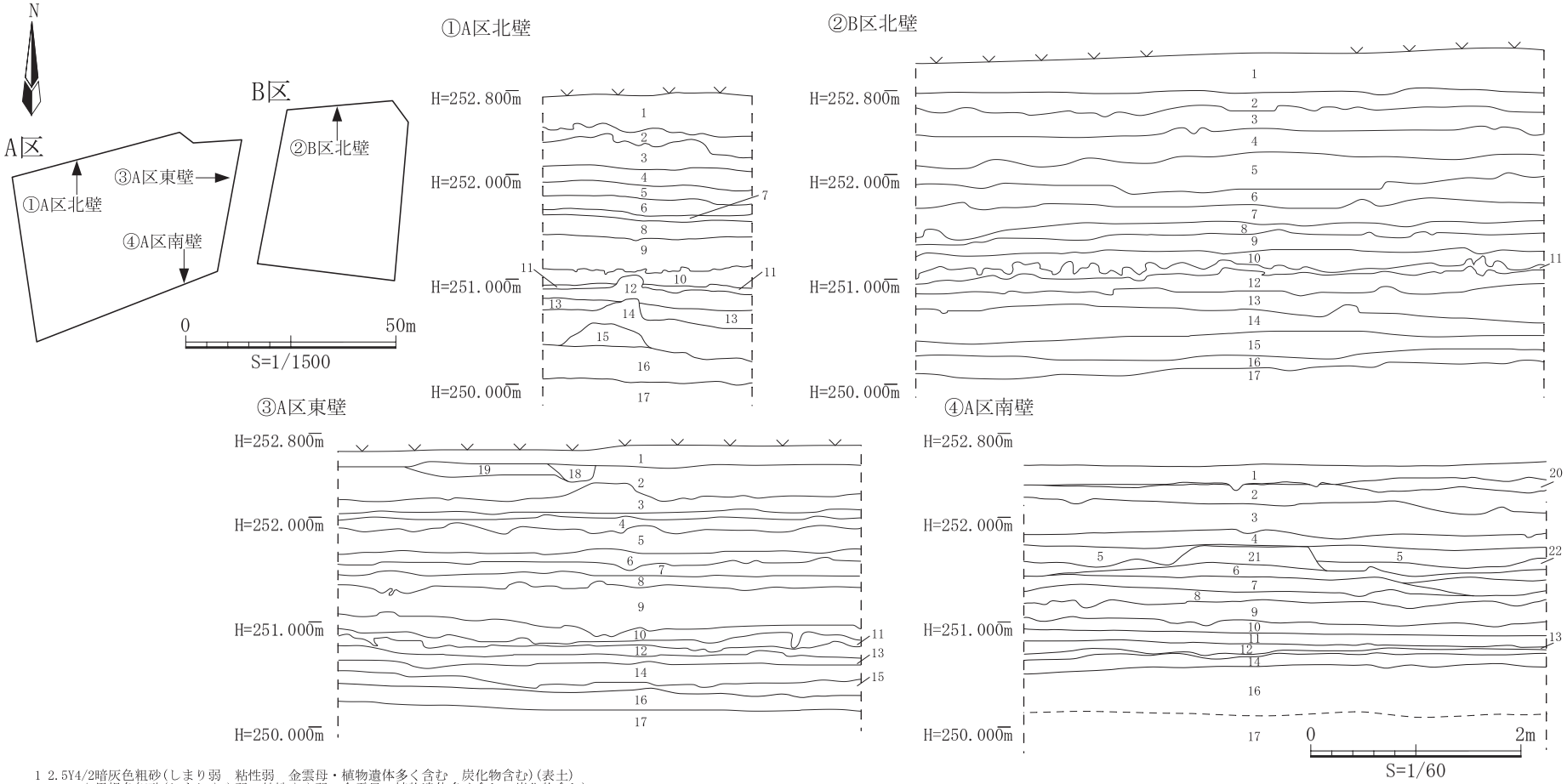
発掘区とグリッドの設定　調査は試掘調査にて得られたデータをもとに、表土を遺物包含層上面まで0.7㎥クラスバックホーにて掘削した。排出土は仮置き場までの通行路を敷き鉄板にて確保しながら10トンクラスのダンプカーで搬出して行った。遺構面が深いため、調査区の法面は35°未満の勾配を確保し、深さ約２ｍの地点において幅２ｍの平場を設けた。表土の掘削が完了した段階で、調査区内に一辺５ｍ間隔で方眼杭を設置し、グリッドを設定した。グリッドは世界測地系座標に即して設定し、グリッド名は、北西隅を原点として、X軸方向（南北方向）にアラビア数字、Y軸方向にアルファベットを付した。調査区域の東西の最大範囲を擁するグリッドの座標値は、Y=8240.000ｍ（西端）、Y=8340.000ｍ（東端）で、南北の最大範囲を擁するグリッドの座標値は、X=-42310.000ｍ（北端）、X=-42375.000ｍ（南端）である。遺構等の測量に使用する基準点は調査区外に６箇所、水準点は調査区内に４箇所それぞれ任意の位置に設置した。

発掘作業　発掘調査は重機を用いて表土掘削を行い、その後、人力にて遺物包含層を掘削して遺構の精査を行った。確認した遺構については、『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』（文化庁文化財部記念物課監修、奈良文化財研究所編集 2010 同成社）にならい、SD：溝、SN：水田・畑、SP：ピット、SX：その他といった遺構記号を用いて付番した。なお、付番後に調査を進めていく中で遺構ではないと判断したものもあり、一部通し番号に欠番がある（SD01、SD02）。確認した遺構は、半裁して土層の確認を行い、土層断面図の図化及び写真撮影等の記録を行ったのち完掘した。遺構平面図は、原則としてトータルステーションを用いた光波測量により行った。出土遺物は、光波測量により三次元位置情報を記録して取り上げたが、原位置を保てなかったものについてはグリッド毎に一括して取り上げた。

空中写真撮影　空中写真による全景写真撮影は、遺構がすべて掘りあがった状態で撮影を行ったが、一部、湧水による壁面崩落の恐れがある遺構についてはベルトを残したまま写真撮影を実施した。そのほか、地理的環境、歴史的景観における立地を表現することを目的として、周辺の俯瞰写真撮影も合わせて実施している。部分写真は、遺構の形成や埋没状況がよくわかる状態に掘り上げたうえで撮影した。また、発掘調査の記録として発掘調査風景の写真、降雨や地下水により水没した状況などの写真撮影も行っている。



第５図　発掘調査区の設定（福部遺跡）



1 2.5Y4/2暗灰色粗砂(しまり弱　粘性弱　金雲母・植物遺体多く含む　炭化物含む)(表土)
2 2.5Y3/1黒褐色細砂(しまりやや弱　粘性やや弱　金雲母・植物遺体多く含む　炭化物含む)
3 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂(しまり弱　粘性弱　金雲母多く含む　橙斑多く含む)
4 2.5Y6/2灰黄色粗砂(しまり弱　粘性弱　金雲母多く含む　炭化物やや含む　平行ラミナ)
5 5Y4/2灰オリーブ色シルト(しまりやや弱　粘性やや強　銀雲母多く含む　植物遺体やや含む)
6 2.5Y4/4オリーブ色シルト(しまりやや強　粘性やや強　金雲母多く含む　白色細砂・金雲母多く含む)
7 5Y4/2灰オリーブ色シルト(しまりやや弱　粘性やや強　銀雲母・橙斑多く含む　1cm程度の礫含む)
8 7.5Y4/1灰色細砂(しまりやや弱　粘性やや弱　平行ラミナ　銀雲母・橙斑・植物遺体多く含む)
9 7.5Y5/1灰色細砂(しまり弱　粘性弱　乱れたラミナ　銀雲母多く含む　植物遺体やや含む)
10 5Y4/2灰オリーブ色細砂(しまりやや弱　粘性やや弱　銀雲母多く含む)
11 5Y3/2オリーブ黒色シルト(しまりやや強　粘性やや強　植物遺体非常に多く含む　銀雲母わずかに含む)
12 5Y3/1オリーブ黒色シルト(しまりやや強　粘性やや強　橙斑含む　植物遺体非常に多く含む)
13 7.5Y4/1灰色シルト(しまりやや強　粘性やや弱　植物遺体・銀雲母わずかに含む)
14 7.5Y4/1灰色粗砂(しまりやや弱　粘性弱　炭化物・銀雲母・7mm程度の白色細砂やや含む)
15 5Y4/1灰色細砂(しまりやや弱　粘性弱　白色細砂やや含む)
16 7.5Y4/1灰色粗砂(しまり弱　粘性弱　白色細砂やや含む)
17 2.5Y4/1黄灰色粗砂(しまり弱　粘性弱　0.5mm程度の細砂含む)
18 2.5Y4/4オリーブ褐色細粒砂（しまりやや弱　粘性弱い　植物遺体含む）
19 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂（しまり弱　粘性弱　下部にやや乱れた平行ラミナ　橙斑非常に多い　炭化物多く含む）
20 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂（しまり弱　粘性弱　乱れたラミナ　上部に橙斑非常に多い）
21 5Y6/3オリーブ黄色中粒砂（しまり弱　粘性弱　平行ラミナ　植物遺体・炭化物含む）
22 5Y3/2オリーブ黒色細粒砂（しまりやや弱　粘性やや強　ラミナなし　植物遺体含む　3mm程度の細砂含む）

第６図　基本土層図（福部遺跡）

第２項　基本層序

福部遺跡は濁川、平等川の氾濫平野に位置しており、調査区内では基本的に安定的な水平方向の堆積土により土地が形成されている。調査前の建設工事に伴うボーリング調査の結果及び埋蔵文化財試掘調査による深掘りにおいても、洪水堆積と離水期の土壌化する細粒砂層の互層が延々と続くようすが看守でき、まさしく氾濫平野の土層堆積状況と言える。

発掘調査区における基本土層について観察所見を示す。表土直下では、遺構面との間に洪水堆積により少なくとも３度の洪水堆積から離水期に土壌化するプロセスが認められる。洪水堆積を繰り返す以前の土層からは、近世陶磁器が出土することから、近世以降に堆積したものであろう。洪水層直下には、４面の水田耕土が連続して堆積している（13 ～ 16 層）。A 区北壁において、水田畦畔がほぼ同位置に構築されていることから、時間的に連続する土地利用と考えられる。遺構が確認できる面は、水田耕土の直下の黒褐色～暗褐色シルト層である。同層上面は上層の水田土の耕作により削平されている可能性があり、層境界は不整合である。また、層厚約 15cm 程度と薄く、重機による表土掘削において下層の粗砂層との層境界で剥がれてしまうことがあり、さらに粗砂層からの出水により遺構確認面が水没することがしばしばあった。

調査区において出水する水は時間が経つにつれてオレンジ色の沈殿物及び油膜状の滞留物により着色される。このオレンジ色の沈殿物は鉄バクテリアによるものであり、本調査区が所在する甲府市落合町に近接する「油川」の地名は、この鉄バクテリアにより変質した河川の様子を表したものかもしれない。

第３項　発見した遺構

福部遺跡において発見した遺構は、溝状遺構（SD）４条、用途不明遺構（SX）３基、ピット（SP）６基、畑状遺構（SN）２基である。遺構内から明確に出土した遺物はほとんどないが、直情の遺物包含層中からは中世後半の遺物が散在していることから、当該期の遺構群であると判断した。

（１）溝状遺構

① SD01 ～ 02

遺構概要　遺構掘削とともに遺構番号を付したが、調査の進捗において遺構と判断できず欠番とした。

② SD03・SD06

位　　置　B 区 O ～ P-7 区において検出。

遺構概要　東西方向に軸を持つ SD03 と南北方向に軸を持つ SD06 がほぼ直角に交わる。遺構確認時において切り合いは認められないため、丁字形の溝状遺構であると判断した。SD03 は長さ 6.2 m以上、幅約 0.25 m、深さ約 0.1 mであり、西端は調査区外に延伸する。SD06 は長さ 4.5 m以上、幅約 0.2 m、深さ約 0.1 mであり、北端は排水溝の掘削により確認できず、南端は調査区外に延伸している。

出土遺物　小破片が数点出土したが、図化に耐えうるものは出土しなかった。

時　　代　中世後半か

③ SD04

位　　置　B 区 O-7 ～ 8 区において検出。

遺構概要　長さ 3.35 m以上、幅約 0.6 m、深さ約 0.1 m。SN02 の範囲内にある。SN02 の畝間の軸とほぼ同一であるが溝の幅が異なること、畝間の間隔が合わないことから別の遺構と判断した。切り合いが無いため、先後関係は不明。SD03 に直行する方向を向くが接しない。機能は不明である。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　代　不明

④ SD05

位　　置　B 区 O ～ P-6 区において検出。

遺構概要　長さ 6.0 m以上、幅約 0.9 m、深さ約 0.4 m。SN01 に切られて検出したため、SN01 以前に作られたものであり、西端は調査区外に延伸する。埋土は細粒砂を基本としており、下層から上層に向かって粒径が細かくなる様子が認められる。したがって、一連の水流による土砂堆積により徐々

に埋まっていったものと考えられ、機能時には少量の水流があったと推測される。断面形状はやや V 字状を呈するが、平面形状はいびつになっている。基盤層はしまりがない細粒砂層であるため、水流の影響により崩落した結果と考えられる。
出土遺物　遺物は出土しなかった。
時　　代　不明

（2）用途不明遺構

① SX01（炭化物集中）
位　　置　A 区 C-8 区において検出。
遺構概要　長さ 1.55 m以上、幅約 1.05 m。掘り込みはほとんど無く、遺構検出面上に高さ 15cm 程度の炭化物が集中する。試掘調査においても同様の炭化物が集中する箇所を検出しており、同遺構内から溶融土器が出土している。
出土遺物　炭化物層（1 層）中から、鉄滓（45 ～ 50）がまとまって出土している。48 ～ 50 は椀型の鍛冶滓であり、精錬鍛冶が付近で行われていたことを示している。底面に鍛冶炉のような遺構は認められなかったことから、SX01 は鍛冶遺構にたまった不要物を廃棄した痕跡と考えられる。その他、中世カワラケの小破片が少量出土したが、図化に耐えうるものは出土しなかった。
時　　代　中世後半

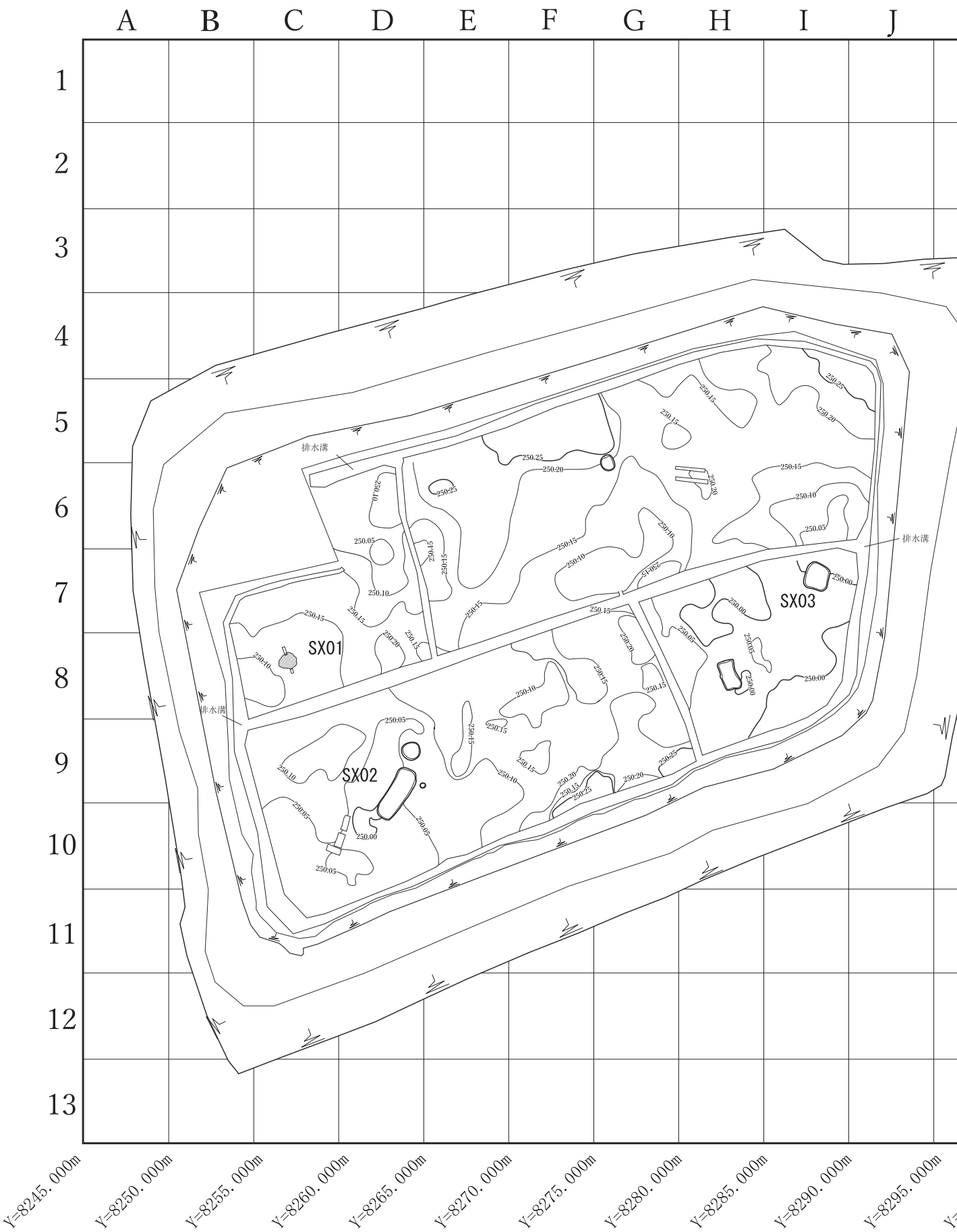
② SX02（不整形土坑）
位　　置　A 区 D-9 ～ 10 区において検出。
遺構概要　長さ 3.25 m以上、幅約 1.2 mの楕円形に近い隅丸方形を呈する。掘り込みは浅く 0.2 m 程度。底面は基盤層直下の粗砂層上面まで掘り込まれている。埋土は 2 層に分けられるが、2 層間の層境界は乱れがあるため、水流により堆積土がかき混ぜられながら堆積したものと思われる。用途・機能は不明である。
出土遺物　遺物は出土しなかった。
時　　代　不明

③ SX03（不整形土坑）
位　　置　A 区 I-7 区において検出。
遺構概要　長さ 1.5 m、幅 1.4 mの隅丸方形を呈する。掘り込みは 0.25 m程度。用途・機能は不明である。底面は基盤層直下の粗砂層上面まで掘り込まれている。
出土遺物　遺物は出土しなかった。
時　　代　不明

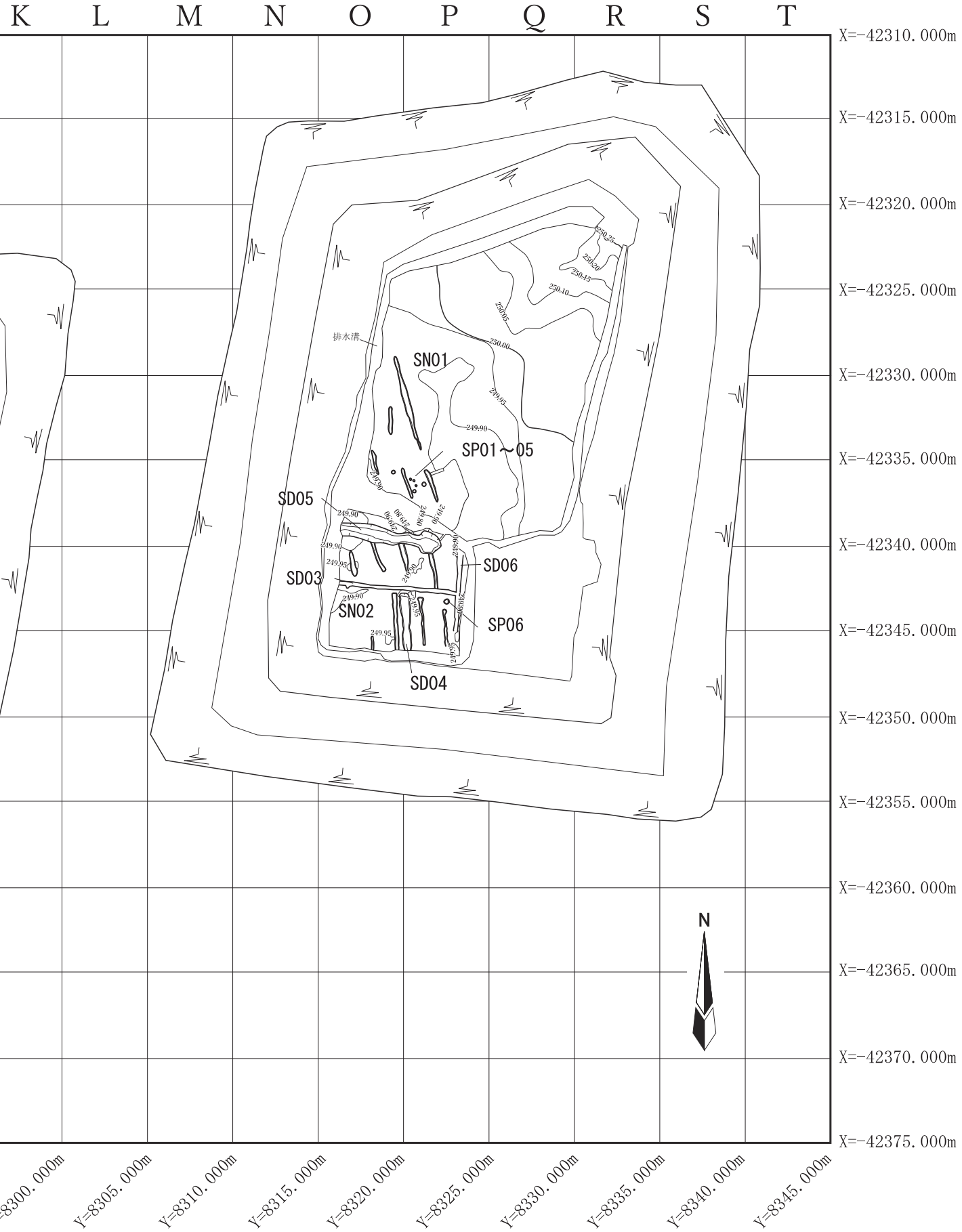
（3）ピット

① ピット群（SP01 ～ 05）
位　　置　B 区 O ～ P-6 区において検出。
遺構概要　SN01 の畝間 05 周辺に点在する、径 0.2 m程度のピットである。SP02 ～ 05 は弧を描くように位置しており、一連の遺構群であると推測したが、柱痕は認められないため柱を伴う遺構とは考えにくく、用途・機能は不明である。
出土遺物　遺物は出土しなかった。
時　　代　不明

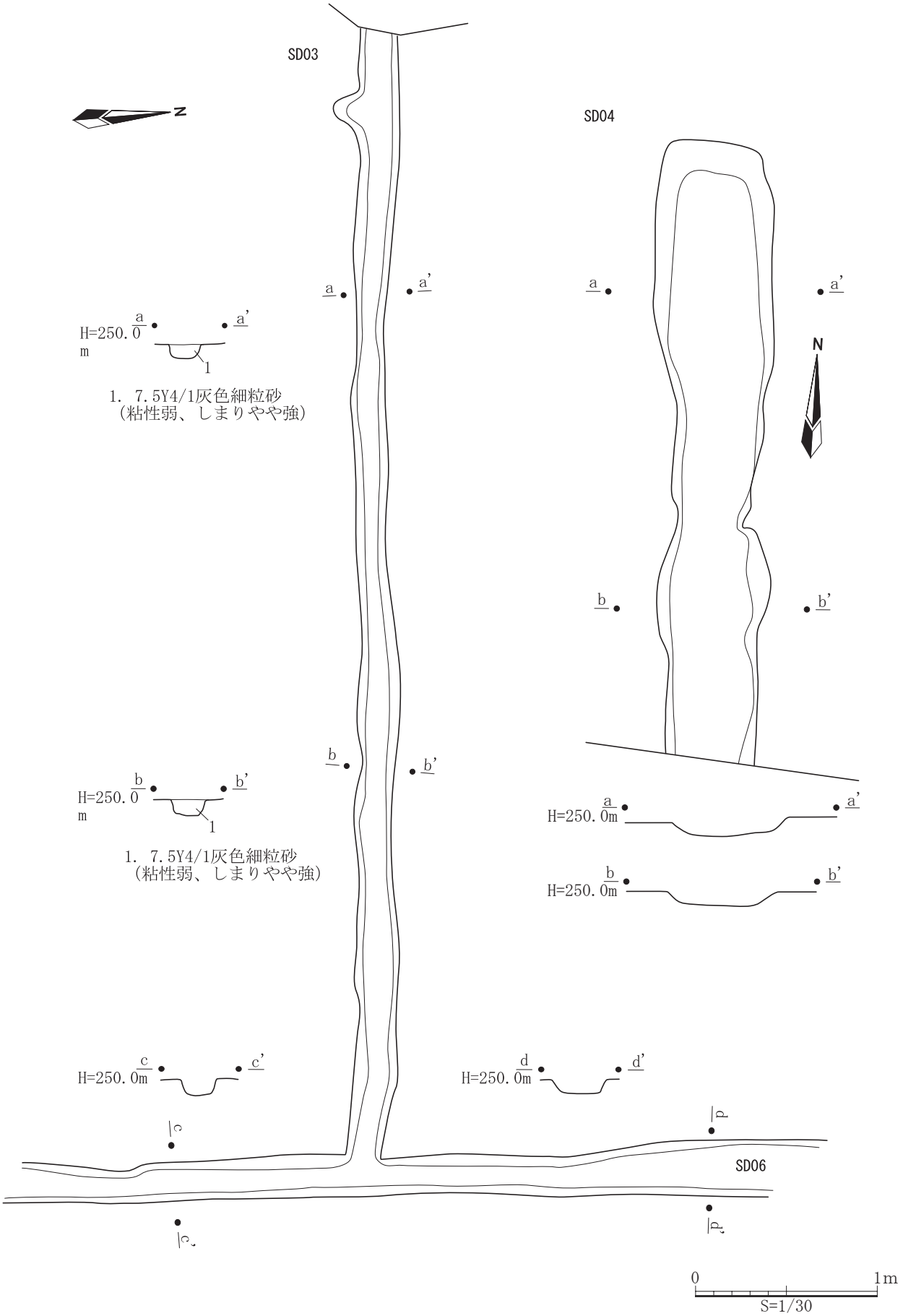
② SP06
位　　置　B 区 P-7 区において検出。
遺構概要　径 0.4 m、深さ 0.1 mの円形である。土層断面に柱痕は認められず、用途・機能は不明である。
出土遺物　遺物は出土しなかった。
時　　代　不明


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
排水溝
排水溝
排水溝
SX01
SX02
SX03
Y=8245.000m
Y=8250.000m
Y=8255.000m
Y=8260.000m
Y=8265.000m
Y=8270.000m
Y=8275.000m
Y=8280.000m
Y=8285.000m
Y=8290.000m
Y=8295.000m

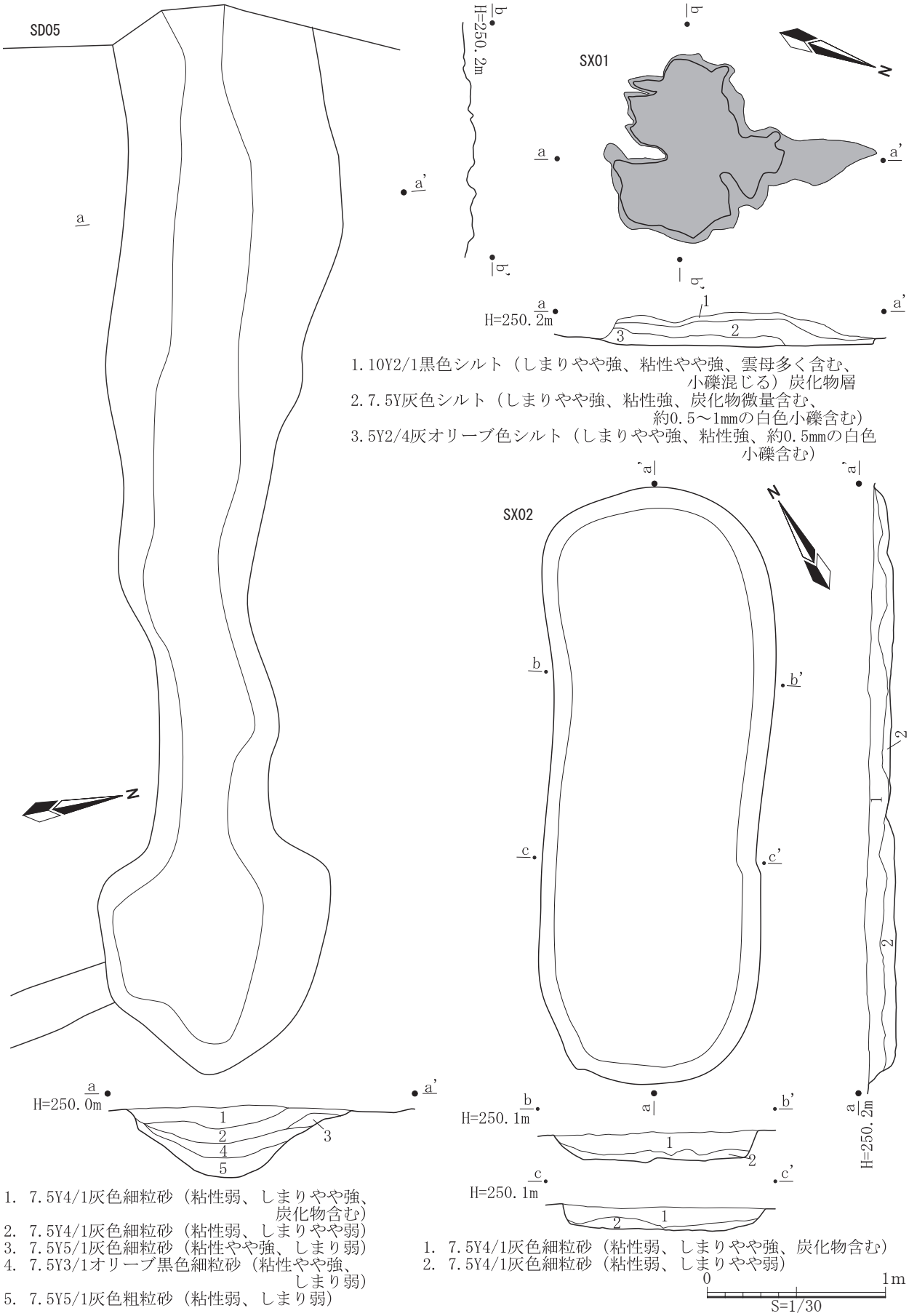
第７図　調査区全


K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
X=-42310.000m
X=-42315.000m
X=-42320.000m
X=-42325.000m
X=-42330.000m
X=-42335.000m
X=-42340.000m
X=-42345.000m
X=-42350.000m
X=-42355.000m
X=-42360.000m
X=-42365.000m
X=-42370.000m
X=-42375.000m
Y=8300.000m
Y=8305.000m
Y=8310.000m
Y=8315.000m
Y=8320.000m
Y=8325.000m
Y=8330.000m
Y=8335.000m
Y=8340.000m
Y=8345.000m
排水溝
SN01
SP01～05
SD05
SD03
SN02
SD06
SP06
SD04
N

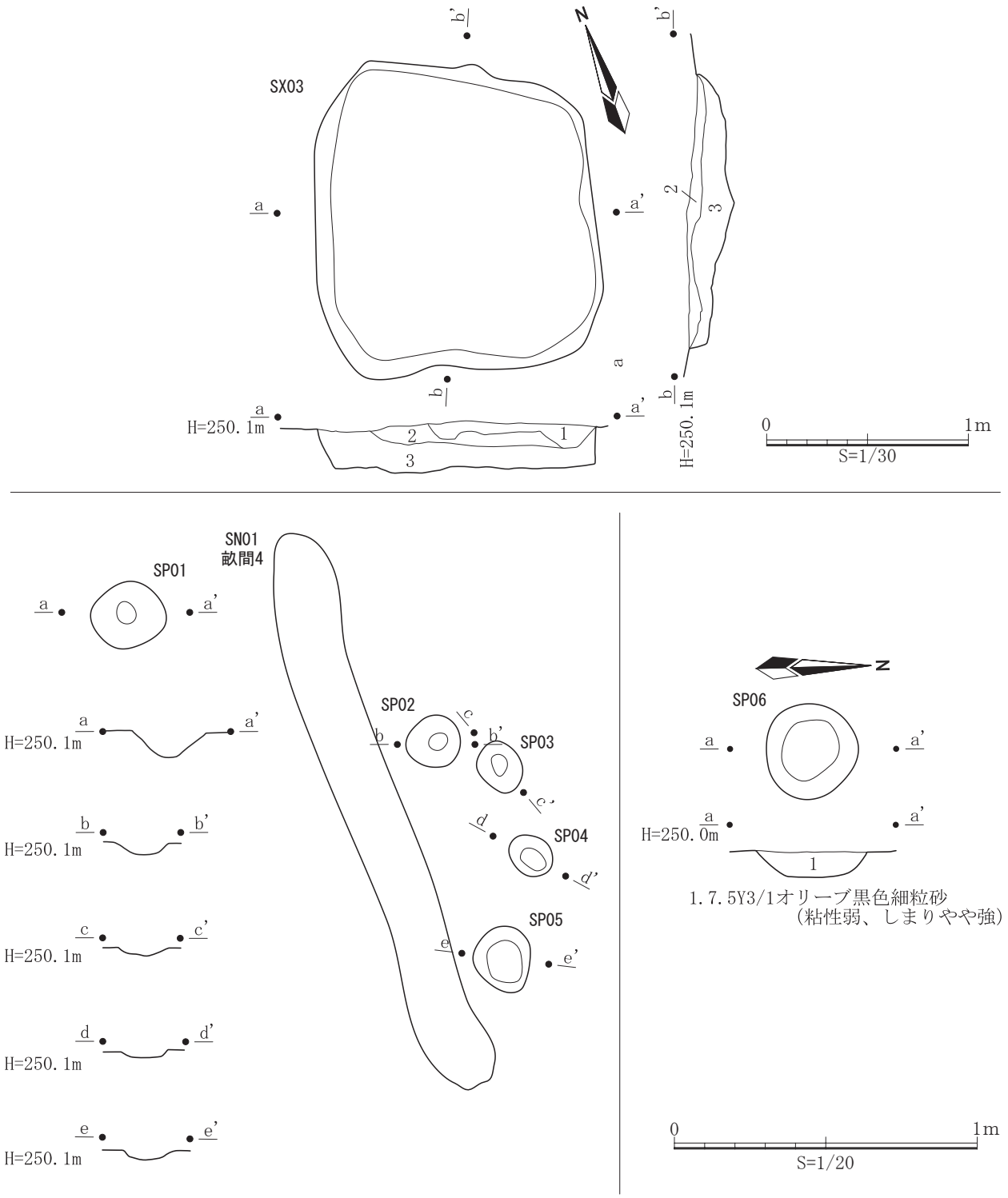
全体図（福部遺跡）



第８図　検出した遺構①（SD03,04,06）（福部遺跡）



第９図　検出した遺構②（SD05,SX01,02）（福部遺跡）



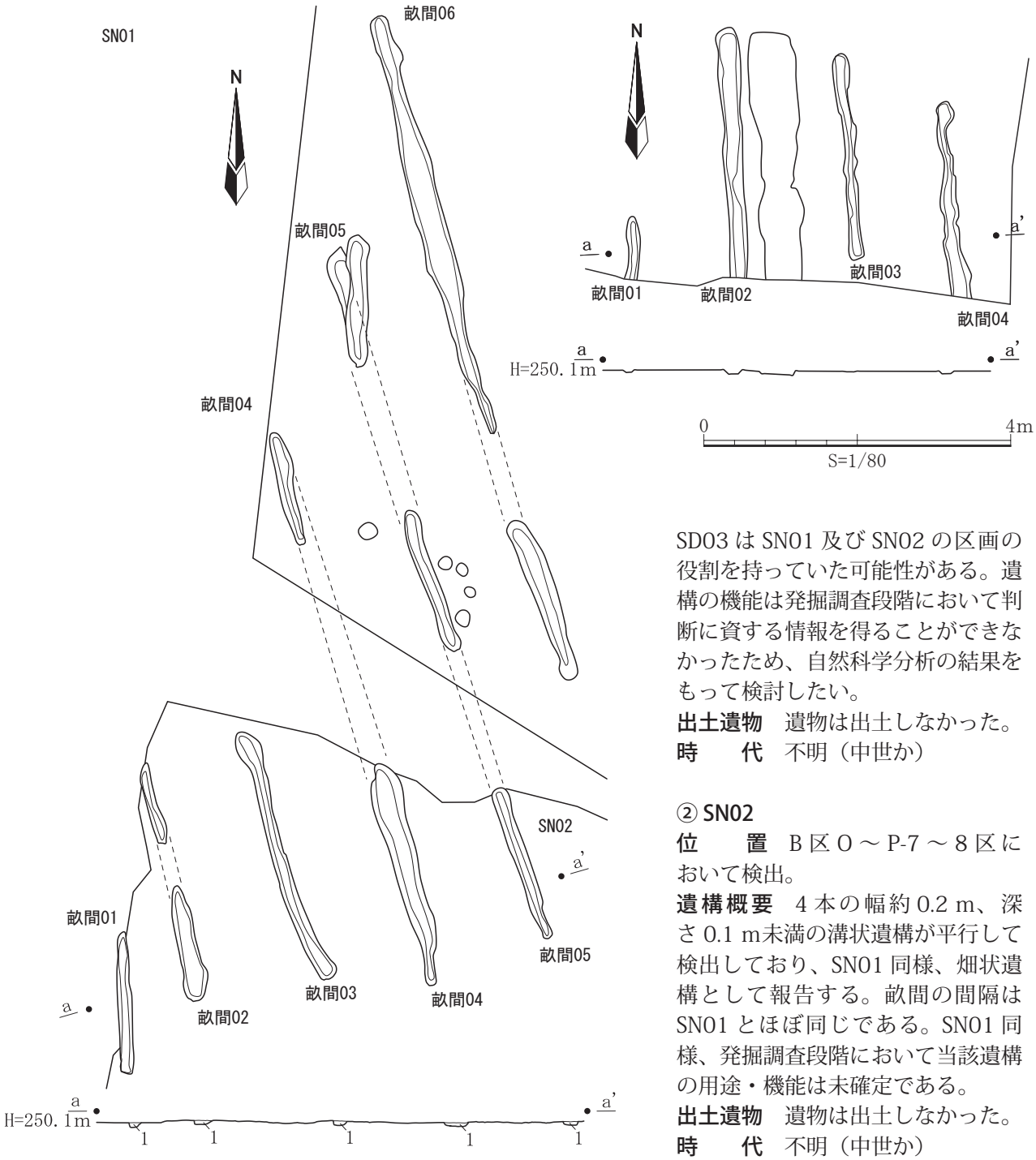
第 10 図　検出した遺構③（SX03,SP01 ～ 06）（福部遺跡）

（4）畑状遺構

① SN01

位　　置　B 区 O ～ P-4 ～ 7 区において検出。

遺構概要　6 本の幅約 0.2 m、深さ 0.1 m未満の溝状遺構が平行して検出したことから一連の遺構であると判断し、畑の畝にしては畝間の感覚が広いことから「畑状遺構」として報告する。検出範囲は SD03 の手前までである。SD03 の南側では後述する SN02 が軸を異にして検出していることから、



第 11 図　検出した遺構④（SN01,02）（福部遺跡）

SD03 は SN01 及び SN02 の区画の役割を持っていた可能性がある。遺構の機能は発掘調査段階において判断に資する情報を得ることができなかったため、自然科学分析の結果をもって検討したい。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　代　不明（中世か）

② SN02

位　　置　B 区 O ～ P-7 ～ 8 区において検出。

遺構概要　4 本の幅約 0.2 m、深さ 0.1 m未満の溝状遺構が平行して検出しており、SN01 同様、畑状遺構として報告する。畝間の間隔は SN01 とほぼ同じである。SN01 同様、発掘調査段階において当該遺構の用途・機能は未確定である。

出土遺物　遺物は出土しなかった。

時　　代　不明（中世か）

第４項　出土した遺物

本発掘調査で出土した遺物には、弥生時代～近世・近代までの土器、陶磁器、金属遺物、木質遺物、石製遺物、古銭があった。出土遺物では残存度50％以上の土器の出土は見られず、小破片の出土のみであった。出土量は、プラスチック箱２箱である。本書では、原則「口径、底径もしくは遺物全形が推定できる遺物」を基準に図化し報告する。なお、出土した青磁は、破片の大小に関わらず全点図化、報告する。

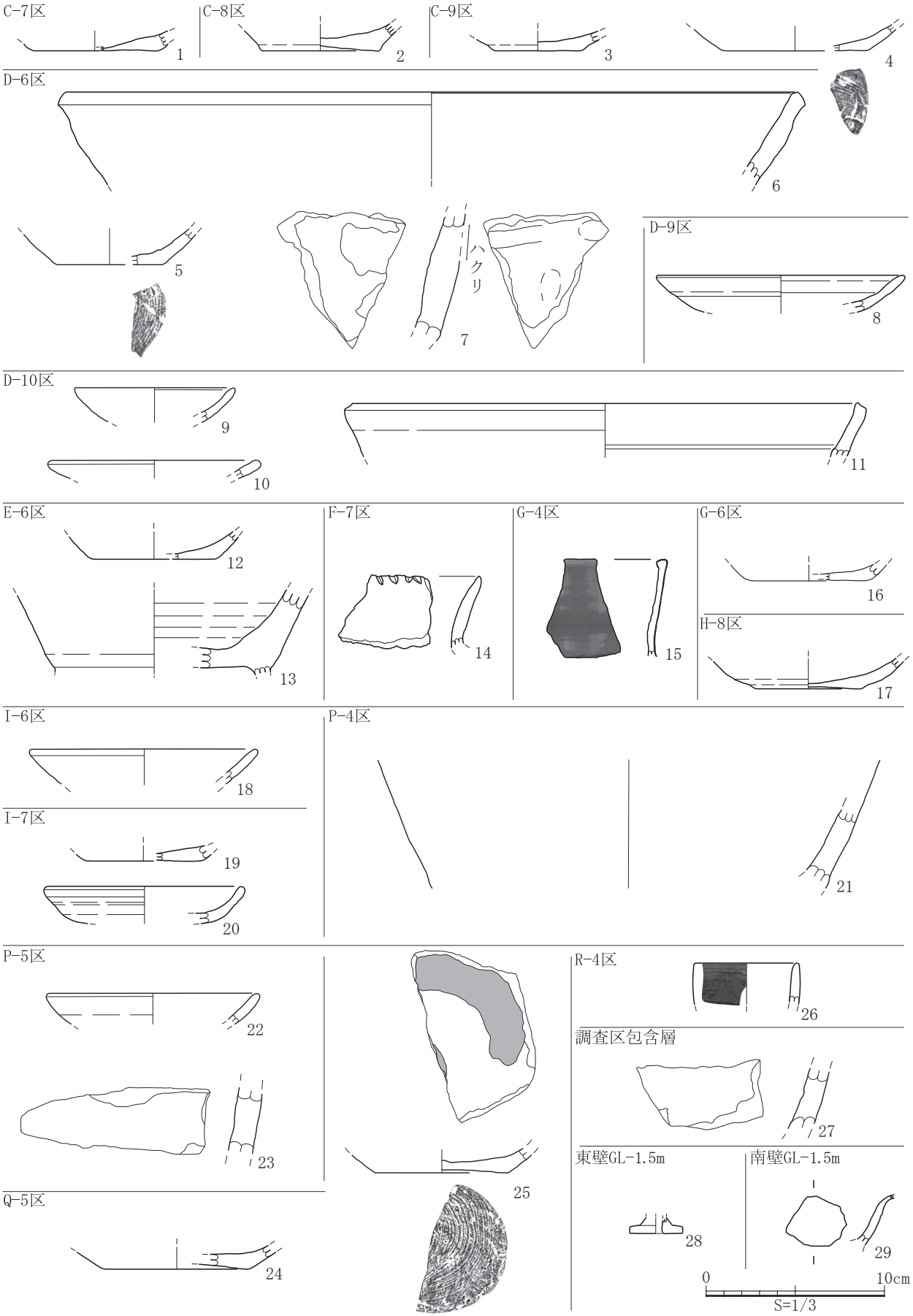
1 ～ 5 は土師質土器皿の底部破片。いずれも見込み中心部の器壁は薄く、内面は弧を描くように成形されるが、底部と体部の境は角張る。底部は回転糸切り痕がみられる。6 は擂鉢（または鉢）の口縁部破片。条痕は認められない。口縁部下部にくびれがある。7 は陶器製の甕類の破片か。外面に剥離がある。8 ～ 10 は土師質土器皿の口縁部破片。体部から口縁部にかけて丸みを帯びた断面形状を呈しており、体部中央部にはくびれがある。9 は土師質土器皿の口縁部破片。他の土師質土器皿に比べて推定口径が小さいものである。端部の立ち上がりがやや立っている。10 は土師質土器皿の口縁部破片。口縁端部が太く丸い。11 は擂鉢（または鉢）の口縁部破片。口縁部形状は四角く、端部は凸上に成形されている。12 は土師質土器皿の底部破片。1 ～ 4 に似た形状を呈する。13 は灰釉陶器の甕類底部破片。灰釉の釉垂れが体部外面に残る。14 は口縁端部に刻みがある土師器壺の破片。弥生時代の所産である。15 は磁器。灰吹の口縁部破片であろう。口縁部は内面方向に膨らむ形状を呈し、内面無釉。16 ～ 20 は土師質土器皿の破片。16 ～ 19 は前述の土師質土器皿と同様の断面形状を呈しているが、20 は底部から体部にかけてやや急に立ち上がる盤状を呈する。21 は土師質の鉢の体部破片。22 は土師質土器皿の口縁部破片。23 は土師質土器の鉢類の破片。内外とも煤で灰色になっている。24、25 は土師質土器皿の底部破片。25 は見込み部の外周と中心部に煤が付いている。26 は陶器製の小坏。体部から口縁部にかけてやや内湾している。27 は土師質土器の擂鉢の体部破片。条痕が認められる。28 は陶器製のたんころの底部。29 は磁器製の端反碗。器高は低い。30 は染付碗の破片。丸形を呈し、口縁端部は極小の玉縁状を呈する。31 は擂鉢の底部破片。32 は天目茶碗の口縁部破片。口縁部下部のくびれは認められない。33 は磁器製の小鉢か。口縁部端反形状を呈する。34、35 は土師器高坏の高台部破片。古墳時代中期頃の所産である。36 は磁器製の碗である。半筒形を呈している。37 は磁器製の碗である。平形を呈する。近代。38 は磁器製の碗。半筒形を呈する。

39 ～ 44 は青磁片。すべて碗の破片と思われる。40、43 の外面には鎬連弁紋がみられる。

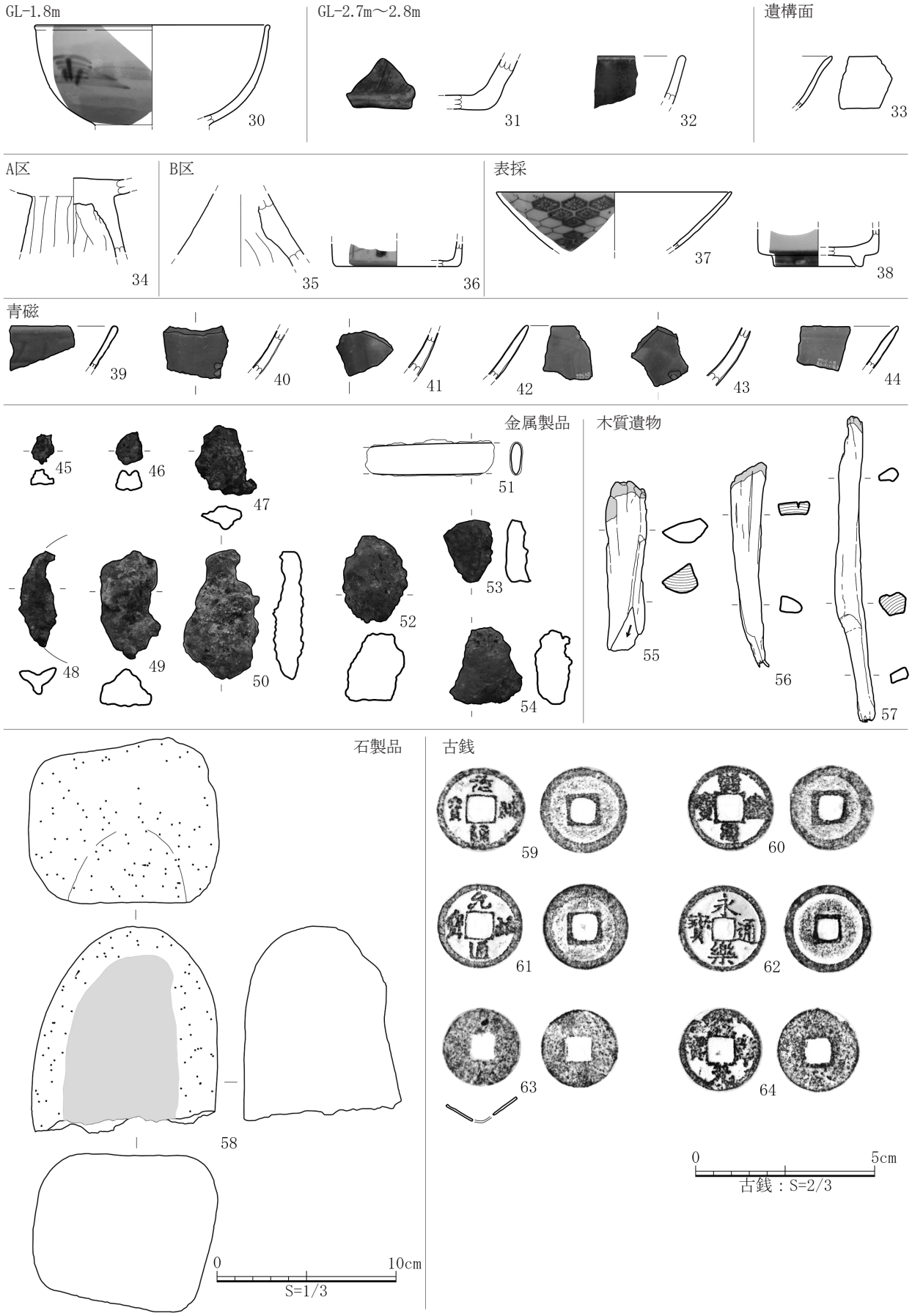
45 ～ 54 は金属質遺物。45 ～ 53 は鍛冶滓破片。48 は椀型滓である。54 は刀子か。板状を呈するが、刃部の特徴は認められない。55 ～ 57 は木質遺物。いずれも燃えさしである。先端が炭化しており、55、57 は炭化していない側の端部が斜交に切断されている。いずれも割材の棒状材を利用している。

58 は石製品。上面及び側面に磨き面がある。安山岩製。

59 ～ 64 は古銭。59 は「元祐通寶」で初鋳年 1086 年。60 は銭種不明。61 は「元祐通寶」。62 は「永楽通宝」で初鋳年 1411 年。63 は銭種不明。中央でくの字状に折れ曲がっている。64 は銭種不明。



第 12 図　出土遺物①　土器



第 13 図　出土遺物②　土器・金属製品・石製品・木製品・古銭

第３表　出土土器観察表

報告番号	図版番号	地区	遺構・層位	分類	器種	寸法（cm）			調整			色調		胎土	焼成	推定年代	備考
						口径	器高	底径	内面	外面	底面	内面	外面				
1	第 12 図	A 区	C-7 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.1)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	密	良好		P-8
2	第 12 図	A 区	C-8 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.5)	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	密、雲母含む	良好		P-7
3	第 12 図	A 区	C-9 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.1)	5.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	密、雲母含む	良好		P-49
4	第 12 図	A 区	C-9 区　包含層			-	(1.4)	8.0				7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	蜜、赤色粒子、金雲母含む	良好		P-50
5	第 12 図	A 区	D-6 区　包含層			-	(2.0)	6.0				7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	蜜、赤色粒子、白色粒子含む	良好		P-66
6	第 12 図	A 区	D-6 区　包含層	土師質土器	擂鉢？	41.0	(4.9)	-	ナデ	ナデ	-	5Y4/1 灰色	5Y4/1 灰色	密	良		P-20,40,78
7	第 12 図	A 区	D-6 区　包含層	陶器	壺・甕？	-	(7.6)	-				10YR7/4 にぶい黄橙色	7.5YR6/3 オリーブ黄色	蜜、白色粒子、黒色粒子含む	良好		P-64
8	第 12 図	A 区	D-9 区　包含層	土師質土器	皿	13.6	(2.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色	密、白色粒子、赤色粒子含む	良好		P-9
9	第 12 図	A 区	D-10 区	土師質土器	皿	12.0	(1.0)	-				7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	蜜、白色粒子含む	良好		
10	第 12 図	A 区	D-10 区	土師質土器	皿	9.0	(1.9)	-				10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	蜜、赤色粒子、白色粒子、金雲母含む	良好		P-10
11	第 12 図	A 区	D-10 区　包含層	土師質土器	鍋	28.4	(3.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	密、雲母含む	良好		P-4
12	第 12 図	A 区	E-6 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.5)	7.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	7.5YR4/1 褐灰色	7.5YR4/1 褐灰色	密	良好		P-67
13	第 12 図	A 区	E-6 区　包含層	陶器	甕	-	(4.7)	13.0	ナデ	ナデ	貼付高台	7.5Y7/1 灰白色、7.5Y 灰オリーブ色灰釉	7.5Y7/1 灰白色、見込み部に自然釉	緻密	良好		P-19
14	第 12 図	A 区	F-7 区　包含層	土師器	壺・甕？	-	(4.0)	-	ナデ、口縁端部に刻み	ナデ	-	5YR6/3 にぶい橙色	5YR6/3 にぶい橙色	密、白色粒子、黒色粒子多く含む、雲母微量含む	良好		P-22
15	第 12 図	A 区	G-4 区　包含層	陶器		-	(5.5)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	5Y7/2 灰白色	5Y6/4 オリーブ黄色	緻密	良好		P-15
16	第 12 図	A 区	G-6 区　包含層	土師質土器	皿	-	(0.9)	6.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	密、白色粒子、赤色粒子含む	良好		P-71
17	第 12 図	A 区	H-8 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.7)	6.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR6/2 灰褐色	密	良好		P-34
18	第 12 図	A 区	I-6 区	土師質土器	皿	12.5	(2.0)	-				10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	蜜、赤白色粒子含む	良好		
19	第 12 図	A 区	I-7 区　包含層	土師質土器	皿	-	(0.9)	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	密	良好		P-12
20	第 12 図	A 区	I-7 区　包含層	土師質土器	皿	11.2	(2.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	密、雲母含む	良好		P-26
21	第 12 図	B 区	P-4 区　包含層	土師質土器	擂鉢？												P-2
22	第 12 図	B 区		土師質土器	皿	12.0	(1.7)	-				10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色	蜜、赤色粒子、金雲母含む	良好		P-5
23	第 12 図	B 区	P-5 区　包含層	土師質土器	鉢	-		-				10YR6/1 褐灰色	10YR7/2 にぶい黄橙色	蜜、赤色粒子、白色粒子含む	良好		P-15
24	第 12 図	B 区	Q-5 区　包含層	土師質土器	皿	-	(1.3)	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	10YR6/2 灰黄色	10YR6/2 灰黄色	密	良好		P-4
25	第 12 図	B 区	Q-5 区　包含層			-	(1.3)	7.6				7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	蜜、赤色粒子、白色粒子含む	良好		P-7
26	第 12 図	B 区	R-4 区	陶器	小杯	5.7	(2.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5YR4/4 褐色	7.5YR4/4 褐色	緻密	良好		
27	第 12 図	B 区	調査区包含層	土師質土器	擂鉢	-	(3.4)	-				2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/3 浅黄色	蜜、赤色粒子、白色粒子含む	良好		
28	第 12 図	A 区	東壁内 GL-1,500mm	土師質土器	仏飯具？	-	(0.8)	3.0	-	ロクロナデ	ヘラ切り？	10YR74 にぶい黄橙色	10YR74 にぶい黄橙色	密、白色粒子含む	良好		
29	第 12 図	A 区	南壁内 GL-1,500mm	磁器	小坏	-	(3.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	緻密	良好		
30	第 13 図	B 区	表土掘削 GL-1,800mm	磁器	碗	12.8	(5.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、染付	-	灰白色		緻密	良好		
31	第 13 図	B 区	表土掘削 GL-2,700 ～2,800mm		擂鉢	-	(2.8)	-	見込み部条痕	ナデ	-	10YR2/1 黒色	10YR6/3 にぶい黄橙色	密	良		
32	第 13 図	B 区	表土掘削 GI-2,700 ～2,800mm	陶器	天目茶碗	-	(2.7)	-				7.5YR4/6 褐色	7.5YR4/6 褐色	蜜、黒色粒子含む	良好		
33	第 13 図	B 区	表土掘削、遺構面	磁器	碗	-	(2.9)	-	ロクロナデ、口縁部無釉	ロクロナデ、施釉	-	2.5GY8/1 灰白色	2.5GY8/1 灰白色	緻密	良好		
34	第 13 図	A 区	表土掘削	土師器	高坏	-	(4.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10YR5/2 灰黄褐色	10YR5/2 灰黄褐色	密、赤色粒子含む	良好		
35	第 13 図	B 区	表土掘削	土師器	高坏	-	(4.0)	-				2.5YR6/8 橙色	2.5YR6/8 橙色	蜜、赤色粒子含む	良好		
36	第 13 図	B 区	表土掘削	磁器	碗	-	(1.4)	6.8	ロクロナデ、見込み部に圏線	ロクロナデ、高台外周に圏線	-	白色	白色	緻密	良好		
37	第 13 図	A 区	表採	磁器	碗	13.0	(3.3)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、亀甲紋	-	白色	白色地に 10YR3/6 暗赤色で施文	緻密	良好		
38	第 13 図	A 区	表採	磁器	碗	-	(2.1)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	高台付	白色	白色地に高台部側面に赤色釉	緻密	良好		
39	第 13 図	A 区	C-8 区　包含層	青磁	碗	-	(2.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ	緻密	良好		P-63
40	第 13 図	A 区	D-6 区　包含層	青磁	碗	-	(2.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	2.5GY6/1 オリーブ灰色	2.5GY6/1 オリーブ灰色	緻密	良好		P-65
41	第 13 図	A 区	E-10 区　包含層	青磁	碗	-	(2.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	10Y6/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰	緻密	良好		
42	第 13 図	A 区	I-8 区　包含層	青磁	碗	-	(3.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ	緻密	良好		P-27
43	第 13 図	A 区	包含層	青磁	碗	-	(3.1)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5GY5/1 緑灰色	7.5GY5/1 緑灰色	緻密	良好		
44	第 13 図	A 区	表土掘削	青磁	碗	-	(2.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ	緻密	良好		

第４表　出土木質遺物観察表

報告番号	図版番号	地区	遺構・層位	分類	器種	寸法（cm）			形状	木取り	備考
						長さ	幅	厚さ			
55	第 13 図	A 区	包含層	雑具	もえさし	17.1	1.5	1.3	棒状	板目材	W-1
56	第 13 図	A 区	包含層	雑具	もえさし	11.4	1.7	0.9	棒状	板目材	
57	第 13 図	A 区	包含層	雑具	もえさし	9.4	2.2	2.1	棒状	ミカン割材	W-2

第５表　出土鉄製品観察表

報告番号	図版番号	地区	遺構・層位	器種	寸法（cm）			重量 (g)	形状	備考
					長さ	幅	厚さ			
45	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	1.7	0.8	0.8	1.12	破片	
46	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	1.8	1.5	1.1	3.89	破片	
47	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	3.9	3.4	1.3	19.83	破片	
48	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	(5.3)	(2.1)	1.5	15.18	碗型滓	
49	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	(6.1)	(3.5)	2.1	35.10	碗型滓	
50	第 13 図	A 区	SX01 炭溜まり	鉄滓	(7.1)	(4.1)	(1.7)	43.11	碗型滓	
51	第 13 図	B 区	P-6 区	刀子？	(7.1)	1.9	0.7		破片	
52	第 13 図	A 区	包含層	鉄滓	4.9	3.6	3.7	87.48	破片	
53	第 13 図	B 区	包含層	鉄滓	4.2	4.1	2.0	11.30	破片	
54	第 13 図	B 区	包含層	鉄滓	(3.5)	(2.7)	(1.4)	45.71	破片	P-11

第６表　出土石製品観察表

報告番号	図版番号	地区	遺構・層位	器種	寸法（cm）			重量 (g)	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
58	第 13 図	B		すり石	11.4 以上	10.5	8.7	1,594	花崗岩	5-1

第７表　出土古銭観察表

報告番号	図版番号	地区	遺構・層位	銭種	寸法（mm）					重量 (g)	備考
					A	B	C	D	E		
59	第 13 図	A 区	H-8 区 10cm 下げ	元祐通宝	24	20	8.5	7	1	2.84	Z-1
60	第 13 図	A 区	I-8 区 10cm 下げ	不明	24	20	9	7	1	2.79	Z-2
61	第 13 図	A 区	I-6 区 GL-2.8m	元祐通宝	25	20	8.5	7	1	2.96	Z-3
62	第 13 図	A 区	包含層	永楽通宝	25	21	6.5	5.5	1.2	3.40	Z-4
63	第 13 図	A 区	H-6 区 包含層	不明	22	18	8	6	0.6	1.34	折れ曲がっている Z-5
64	第 13 図	A 区	G-5 区	不明	23	18	10	7	0.9	2.67	Z-6

第２節　田通遺跡

第１項　調査の方法

発掘調査区とグリッドの設定

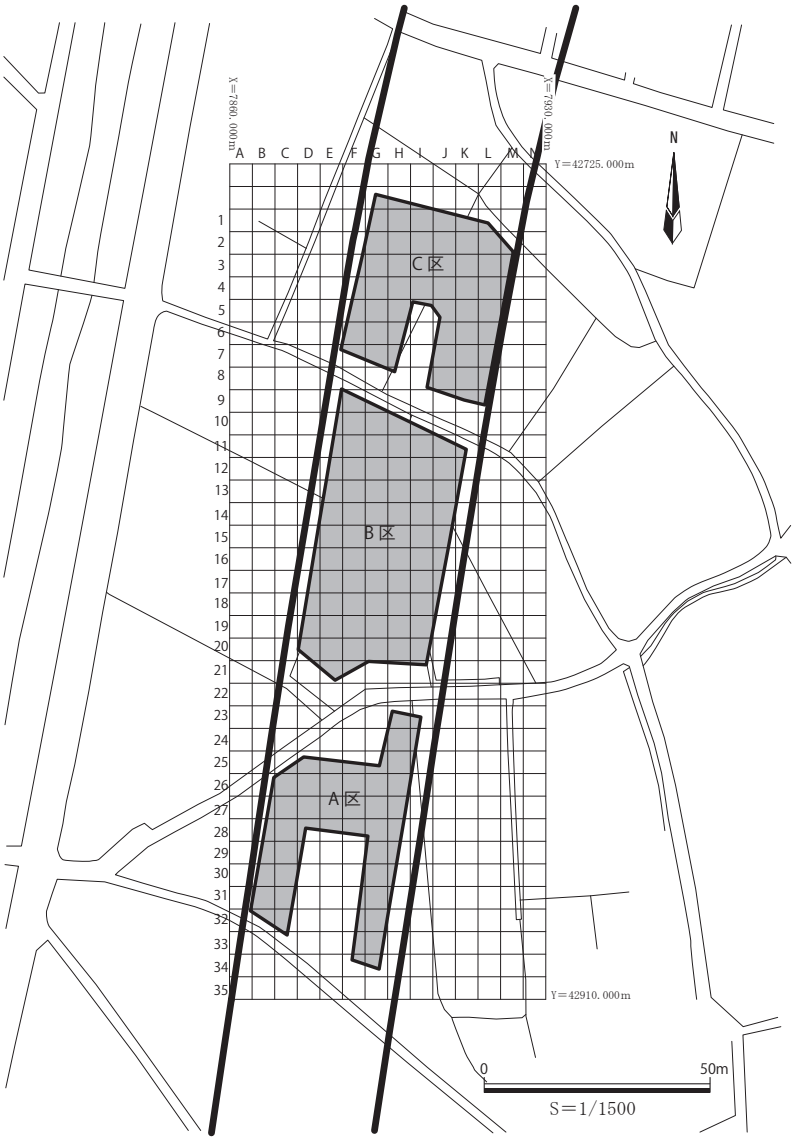
本調査は、試掘調査の結果で得られたデータをもとに表土を遺構確認面（第１面地表下 1.7 m、第２面地表下 2.8 m）まで、0.7㎥クラスのバックホーで掘削した。発掘調査区が東西方向に横切る農道などで分断されてしまうため、調査区を便宜上南から北へＡ区、Ｂ区、Ｃ区と命名し調査を行うこととした。排出土は仮置き場まで通行路を敷き鉄板にて養生しながら 10 ｔクラスのダンプカーやクローラーダンプにて搬出を行った。遺構確認面まで深いことから調査区の法面は 35°未満の勾配を確保し、２面目の調査にはさらに２ｍの平場を設け、法面 35°未満の勾配をつけて調査を実施した。表土の掘削が完了した段階で、調査区内に一辺５ｍ間隔で方眼杭を設置し、グリッドを設定した。グリッドは世界測地系座標に即して設定し、グリッド名は、北西隅を基準として、Ｘ軸（南北方向）にアラビア数字、Ｙ軸（東西方向）にアルファベットを伏した。調査区域の最大範囲を擁するグリッドの座標値はＸ＝7860.000 m（西端）、Ｘ＝ 7930.000 m（東端）で、南北の最大範囲を有するグリッドの座標値はＹ＝ -42725.000 m（北端）、Ｙ＝ -42910.000 m（南端）である。また、遺構や遺物等の測量に使用する基準点は調査区外に６箇所、水準点は調査区内に４箇所、それぞれ各調査区に対応できるよう任意の位置に設定した。

発掘作業

発掘調査は、重機を用いて表土掘削を行い、その後、人力により精査を行い、畝・畦など遺構の確認を行った。確認された遺構は、半截して土層の確認を行い、土層断面の図化及び写真撮影等の記録を行ったのちに完掘した。遺構平面図はトータルステーションを用いた光波測量により行った。出土遺物は、可能な限り光波測量機により三次元位置情報を記録して取り上げ作業を行った。また、原位置を伴わないものや、小破片の遺物はグリッド毎に一括して取り上げた。

空中写真撮影

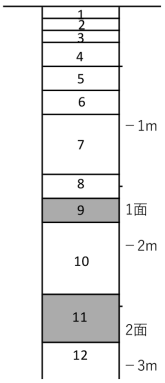
空中写真による全景写真撮影は、遺構がすべて掘り上がった状態で行う事を基本とした。Ａ・Ｂ・Ｃ区毎３回（１面目）、Ｂ・Ｃ区２回（２面目）の合計５回、デジタル図化に対応できるオルソ画像及び計測済み補備測量データからの図面作成に対応できる撮影も同時に行った。そのほか、地理的環境、歴史的景観を踏まえた立地を表現することを目的として、周辺の俯瞰写真撮影も併せて実施している。



第 14 図　発掘調査区の設定（田通遺跡）

第２項　基本層序

基本層序（C 区）

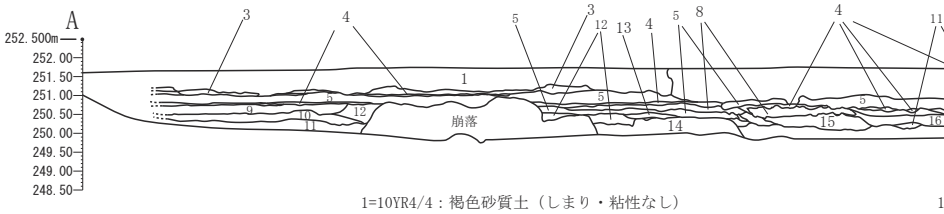


1=10YR3/2　：黒褐色細砂（しまりやや強、白色細砂わずかに含む、粘性弱）
2=2.5Y4/2　：暗灰黄色細砂（しまり強、粘性やや強）
3=10YR4/2　：灰黄褐色シルト（しまり強、白色細砂含む、粘性やや弱）
4=2.5Y5/2　：暗灰黄色シルト（しまりやや強、粘性やや強、白色細砂わずかに含む）
5=10YR383　：暗灰色シルト（しまり弱、粘性やや強、径1～3mmの細礫わずかに含む）
6=2.5Y5/3　：黄褐色細砂（しまりやや弱、粘性やや弱、径3mmの細礫多く含む
7=2.5Y5/4　：黄褐色細砂（しまり強、粘性無し、）河川氾濫
8=　－　　：白色細砂（しまりなし、粘性無し）
9=2.5Y4/1　：黄灰色粘質シルト（しまり弱い、粘性強い、炭化物わずかに含む）水田畦畔
10=2.5Y3/1　：黒褐色砂質土（しまり無し、粘性無し、細砂粒）
11=10YR1.7/1：黒色土（しまり強、粘性やや強、植物遺体多く含み炭化物わずかに含む）水田畦畔
12=10Y6/1　：灰色砂質土（細砂粒、しまり弱い、粘性ややあり、植物遺体多く含む）

各調査区において、Ａ区は東壁、Ｂ区は北壁、Ｃ区は西壁の土層断面を第 15 図で図示しているが、田通遺跡における基本土層を図示する。

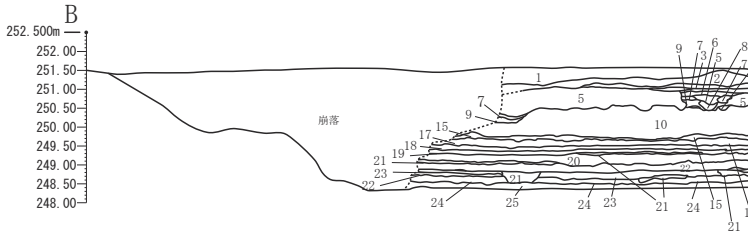
地表面直下から地表面約 1.2 m地点までは、水田耕作土を主体とする（第１～６層）。河川氾濫による粗粒砂層（第７層）。８層は上記の河川氾濫の営力によりかき混ぜられた下層（９層）である。９層は地表面下約 1.7 mに見られる中央に水路を持つ水田畦畔の構築土層である。水田畦畔の基盤は植物遺体を多く含む砂層である（第 10 層）。地表面下約 2.8 m地点には､炭化物が多く混じる黒色土層があり、畦畔と思われる盛り上がりが認められる水田層（第 11 層）。第 11 層以下は、地表面下約 5.2 mまで試掘時に掘削しているが、河川堆積に由来する砂層とやや安定したシルト層の互層になる。

A区　土層断面図



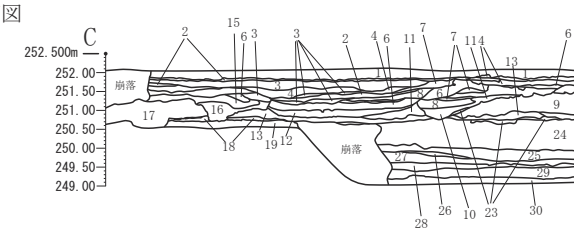
1=10YR4/4：褐色砂質土（しまり・粘性なし）
2＝10YR4/4：褐色砂質土（やや暗く、しまり・粘性なし）
3＝2.5Y4/2：暗灰黄色砂質土（細砂）
4＝10YR7/1：白色砂質土（細砂）
5＝10YR4/3：にぶい黄褐色砂質土
6＝2.5Y7/6：明褐色砂質土（細砂）
7＝2.5Y5/2 黄灰色砂質土（細砂）
8＝2.5Y5/1：黄灰色砂質土（細砂）
9＝10YR7/8：黄橙色砂質土（細砂）
10＝10YR4/3：にぶい黄褐色砂質土（粗砂）

B区　土層断面図

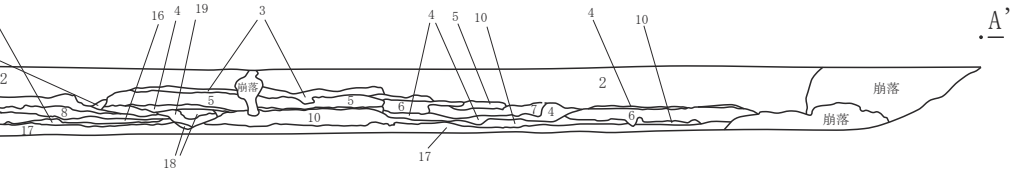


1＝10YR3/2: 黒褐色砂質土（しまりややあり・白色粒子わずかに含む）
2＝10YR4/2: 灰黄褐色シルト（しまり強い・粘性ややあり）
3＝2.5Y5/2: 暗灰黄色シルト（しまり・粘性ややあり、白色粒子わずかに含む）
4＝2.5Y5/1: 暗灰黄色砂質土（細砂）
5＝10YR4/1: 褐灰色砂質土（細砂）
6＝7.5YR6/8: 橙色砂質土（細砂）
7＝10YR3/4：にぶい黄褐色砂質土（細砂）
8＝10YR4/1: 暗灰黄色砂質土
9＝10YR4/4: にぶい黄褐色砂質土
10＝10YR3/1：黒褐色シルト（粘性・しまり強・カーボン含む）
11＝2.5Y4/1: 黄灰色砂質土（細砂）
12＝7.5YR2/8: 明褐色砂質土（細砂）

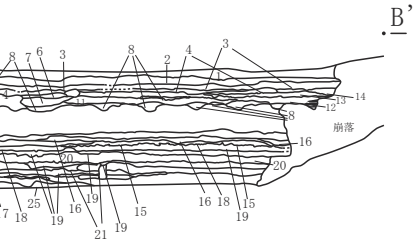
C区　土層断面図



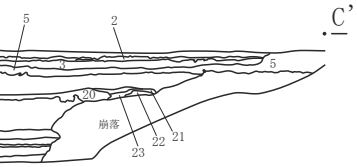
1＝2.5Y3/2: 黒褐色シルト（白色粒子わずかに含む）
2＝10YR7/1: 灰白色砂層
3＝10YR4/4: 褐色砂質土
4＝10YR4/4: 褐色砂質土（粗砂）
5＝2.5Y4/3: オリーブ褐色粘質土（しまり・粘性ややあり）
6＝2.5Y4/1：灰白色砂質土（細砂）
7＝10YR4/1: 褐灰色砂質土（細砂）
8＝2.5Y5/1: 黄灰褐色砂質土
9＝10YR4/4: 褐色砂質土（細砂）
10＝2.5Y6/2: 灰黄褐色砂質土
11＝10YR4/2: 灰黄褐色砂質土
12＝10YR4/3: にぶい黄褐色砂質土
13＝2.5Y5/1: 青灰色砂質土（細砂）
14＝10YR4/4: 褐色砂質土
15＝10YR5/4: にぶい黄褐色砂質土



1＝10YR7/1：白色砂質土（粗砂）
2＝2.5Y4/4：オリーブ褐色シルト
3＝2.5Y5/1：黄灰色砂質土（細砂）
4＝10YR4/3：にぶい黄褐色砂質土（細砂）
5＝7.5Y5/3：黄褐色砂質土（細砂）
6＝2.5Y7/6：明黄褐色砂質土
7＝10YR3/2: 黒褐色シルト（粘性ややあり、しまり強）
8＝2.5Y4/1: 暗黄灰砂質土（細砂）
9＝2.5Y4/1: 暗黄灰色砂質土（やや暗い）



13＝2.5Y4/1: 黄灰色砂質土（細砂）
14＝2.5Y5/1: 暗灰黄色砂質土（細砂）
15＝2.5Y3/3: オリーブ褐色シルト（粘性ややあり、しまり強い）
16＝10YR2/3: 黒褐色砂質土（細砂）
17＝10YR2/2: 黒褐色砂質土（細砂）
18＝10YR3/1: 黒色砂質土
19＝2.5Y2/2: 黒褐色砂質土（細砂）
20＝2.5Y3/1: 黒褐色シルト（しまり・粘性強い）
21＝2.5Y8/1：灰白色砂質土（粗砂）
22＝10YR4/1: 褐灰色砂質土（粗砂）
23＝2.5Y5/6: 明黄褐色シルト（しまりあり、粘性あり）
24＝2.5Y2/1: 黒色シルト（しまり強、粘性強）
25＝2.5Y8/1: 灰白色砂質土（粗砂）



16＝2.5Y6/8: 明黄褐色砂質土（細砂）
17＝10YR4/4: 褐色砂質土（細砂）
18＝2.5YR4/1: 灰白色砂質土（粗砂）
19＝10YR4/2: 灰黄褐色砂質土
20＝10YR7/2: にぶい黄橙色シルト（しまり・粘性ややあり）
21＝10YR4/2: 灰黄褐色砂質土
22＝2.5Y3/2: 黒褐色シルト（粘性強い）
23＝2.5Y3/3: 暗オリーブ褐色シルト
24＝2.5Y5/1: 黄灰色砂層
25＝2.5Y5/1：黄灰色砂層
26＝2.5Y6/8: 明黄褐色砂質土（粗砂）
27＝2.5Y4/4: オリーブ褐色砂質土
28＝2.5Y4/1: 黄灰色砂質土
29＝2.5Y5/1: 黄灰色砂質土
30＝2.5Y3/2: 黒褐色シルト（植物遺体、しまり・粘性強）

0　1/200　10m

第 15 図　A・B・C 区土層断面図

第３項　発見した遺構

以下に、Ａ・Ｂ・Ｃの調査区毎に成果を報告する。

〈Ａ区〉

田通遺跡の南端部にあたり、新環状道路橋脚部分と側道部分について調査を実施した。前述したとおり、壁面の砂層やシルト層、遺構確認面からの出水が激しい。出水により、遺構確認面が沼地化し、遺構精査が十分にできる状況ではなかった。このため、土層断面観察に主体をおき調査を実施した。

地表面直下では耕作土（１～２層）、表土直下から地表面下役 1.7 mまでには、複数の水田耕作土が続く（３～８層）。８層下からは一蓮の河川運搬物（白色粗粒砂）が堆積する。

土層の断面観察では、中世以降の水田や畑などの遺構については、確認できなかった。

出土遺物については、土師質土器や、陶磁器類数点が確認されている。

〈Ｂ区〉

Ａ区同様、道路橋脚部分と側道部分を調査対象地として調査を実施した。Ｂ区は、試掘調査により、地表下約 1.7 m、及び 2.8 m付近の２面から、水田跡と思われる畦畔跡が確認されている。

調査の結果、若干の微高地を利用した地表下 1.7 m付近の１面目から、畝状遺構が検出されている

1 号畝状遺構（第 17 図）

Ｈ 10・11 グリッド、Ｉ 11 グリッド、Ｊ 11 グリッドに位置する。北北西～南南東方向を呈する。11 条が検出され、幅 0.15 ～ 0.30m、長さ 1.0 ～ 1.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mの規模を呈し、0.2 ～ 1.0 m間隔を呈する。

２面の調査においては、１面目の調査終了後、地表下 2.8 mまで掘り下げを行い調査を行った。しかし、１面目より湧水による出水が激しく、遺構確認面が沼地化し、安全管理上、危険を伴うため、作業員の投入をすることができず、壁面の断面観察を行う中で遺構の有無を判断することとなったが、明瞭な遺構の確認はできなかった。

出土遺物については、土師器片や古銭（判読不明）等、遺構に伴うものは確認できなかった。

この畝状遺構については、土壌サンプル（B 区畝間①～⑥）を行っており、自然化学分析を行うことにより畝状遺構の正確の分析を行っている。これについては､第４章の自然化学分析を参照とされたい。

〈Ｃ区〉

田通遺跡調査区の北側、Ａ・Ｂ区同様、道路協約部分と側道部分について調査を実施した。Ｂ区同様地表下 1.7 mと 2.8 m付近において、中世以降の畦畔の痕跡が認められているため、２面の調査を実施することとなった。地表下 1.7 mの１面目において、調査区東側と西側の微高地上に、畝状遺構が２カ所確認されている。

2 号畝状遺構（第 18 図）

調査区西側のＧ２･３グリッド、Ｈ２･３グリッドに位置する。ほぼ東西方向を呈し、幅 0.15 ～ 0.30 m、長さ 1.1 ～ 3.3 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mの規模を呈し、0.2 ～ 1.0 m間隔で９条見られる。

3 号畝状遺構（第 19 図）

調査区東側の調査区東側、Ｋ２グリッド、Ｊ３・Ｋ３・Ｌ３グリッド、Ｊ４・Ｋ４・Ｌ４グリッド、ｊ５・Ｋ５・Ｌ５グリッドに位置する。南南西～北北西方向を呈し、幅 0.3 ～ 0.6 m、長さ 9.0 ～ 10.8 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m、の規模を呈し、間隔がないものから、0.3 m程呈するものが、12 条見られる。

１号畝状遺構同様３号畝状遺構についても、土壌サンプル（C 区東畝 SD2 ～ SD9）を行っている。

２面目について、１面目の調査終了後、地表下 2.8 mまで掘り下げを行い、調査を行った。Ｂ区同様、出水による遺構確認面が沼地化し、危険が伴うため、十分な遺構確認ができる状況ではなく、壁面の土層断面観察による調査を実施した。

第４項　出土した遺物

本発掘調査で出土した遺物は、古墳時代～近世までの土器、陶磁器片、種子、古銭が見られ、出土した土器や陶磁器のそのほとんどが、小破片であった。明瞭な遺構が確認できなかったため、遺構に伴うものはほとんど無く、遺構外（調査区壁面）やトレンチ内からの出土が主である。また、古墳時代や平安時代の遺物も散見できたが、本遺跡の遺構に伴うものでなく、周辺遺跡からの流入物と考えられる。

本書における土器等は、「口径」、「底径」から遺物全形が推定できる出土品を基準に図化したものを掲載している。

以下に、各調査区の図示した出土遺物について報告する。遺物の詳細については【第 20 図　出土遺物】【第８表　遺物観察表】を参考とされたい。

「Ａ区の出土遺物」

１～２が土師質土器皿の口縁部で、１は推定口径が小さく、１・２とも、身部は浅い。３は土師質の壷胴部破片、４は陶器の鉢口縁部破片、５は陶器の鉢・甕類の受け口状を呈す口縁部の破片、６は磁器製の端反碗、７は磁器の碗類。

「Ｂ区の出土遺物」

８は土師質土器皿の口縁部、９は磁器の鉢の口縁部で口縁部分が玉縁状を呈する

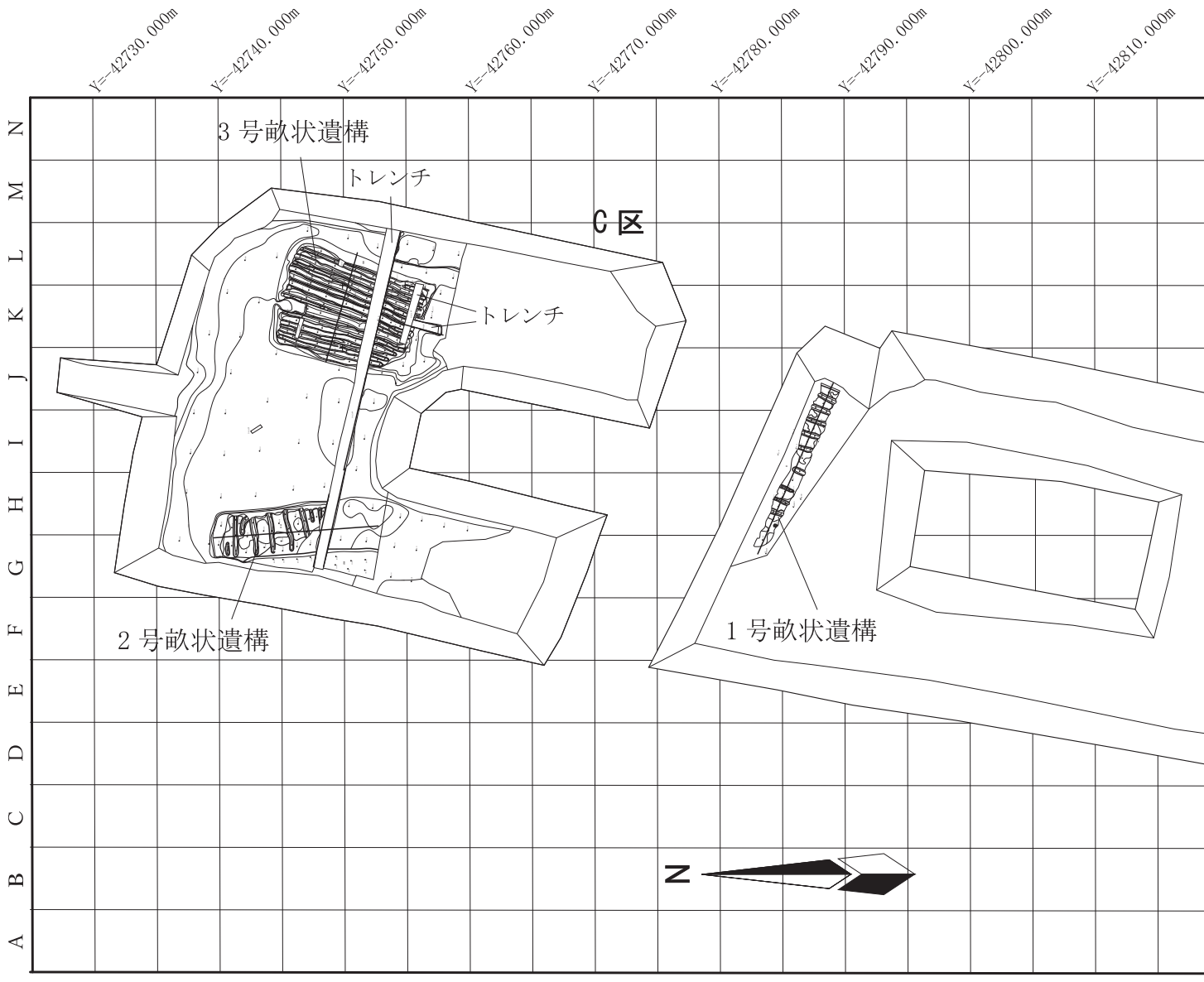
10 は、緑釉陶器の碗の口縁部から胴部破片で、胴部が張り出す形状を呈する。11 は陶器鉢・甕類の胴部下半部で、内面が剥離している。12 は、磁器製の端反碗。

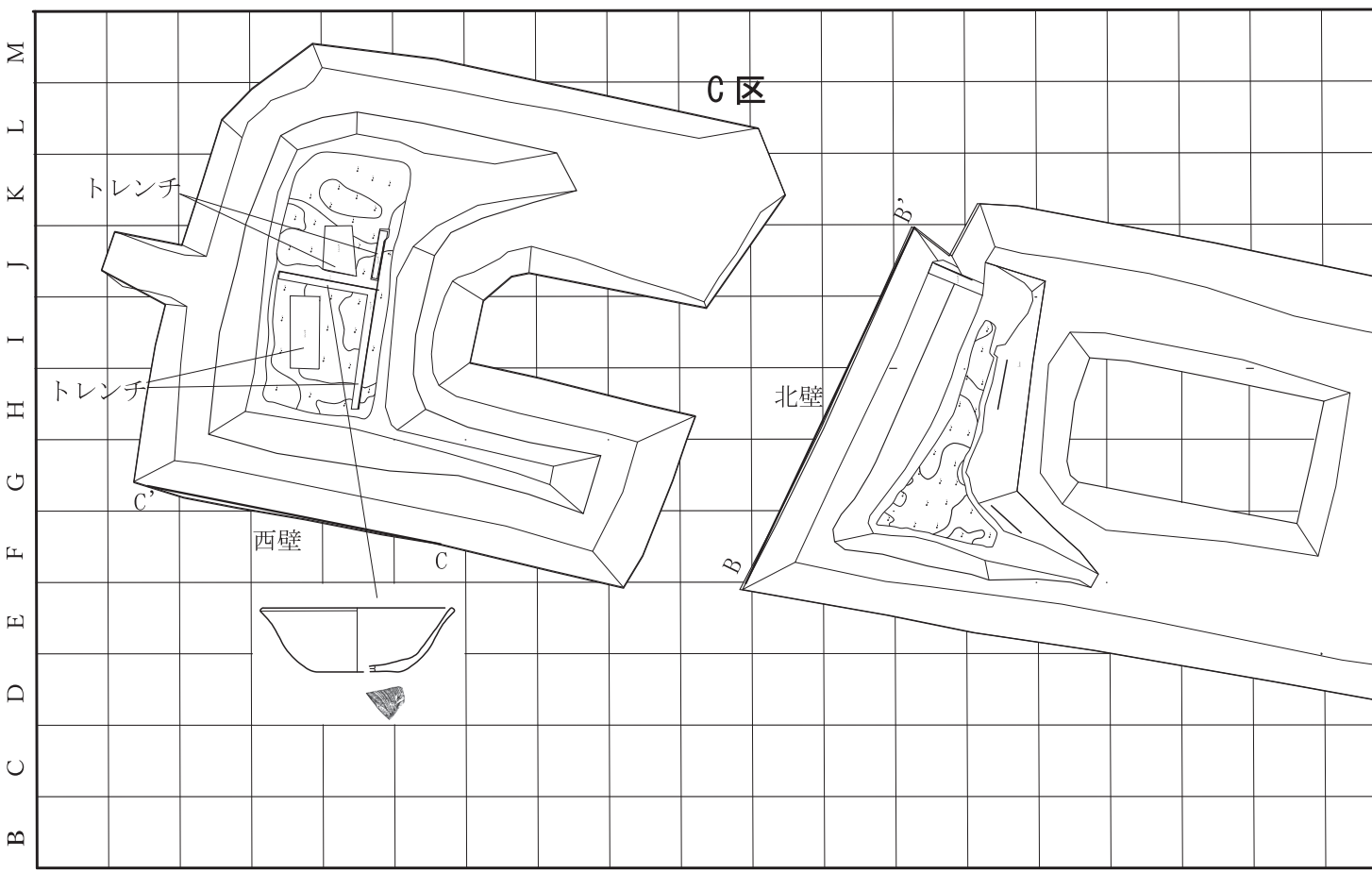
「Ｃ区の出土遺物」

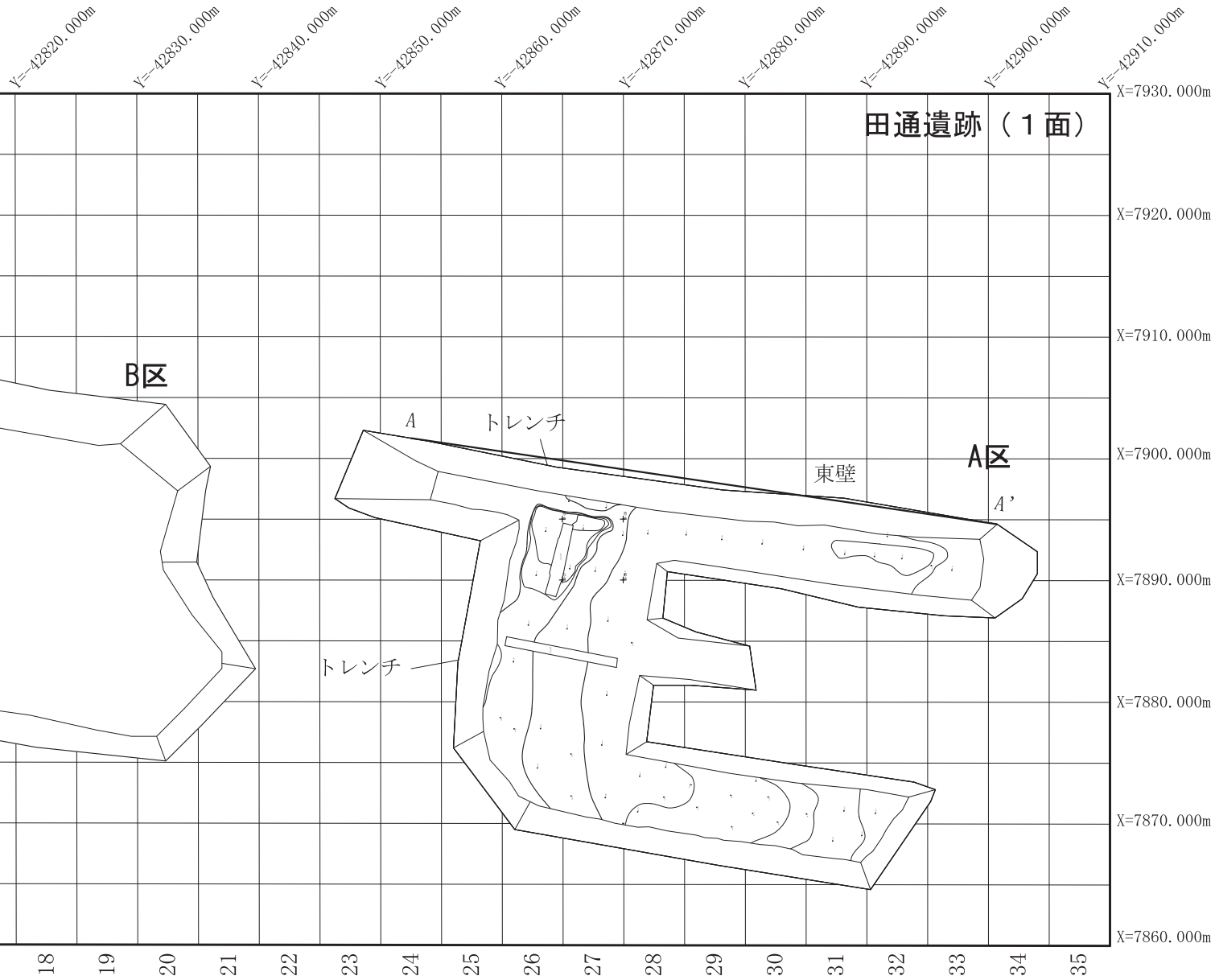
13 は、形状から平安時代 10 世紀後半に比定される土師器の坏。口縁部が僅かに玉縁状を呈する。

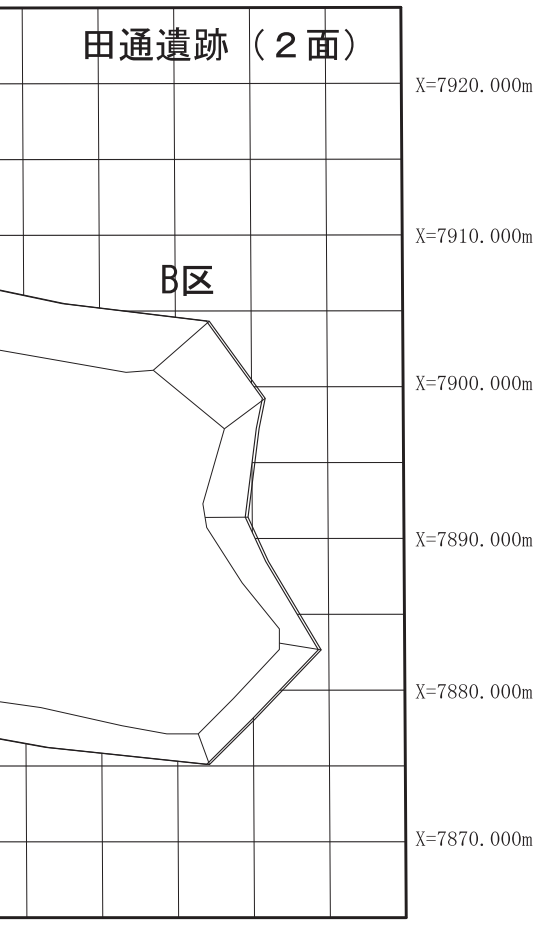
14 は、古墳時代の土師質の甕。口縁部から頸部破片。15・16 は、土師質の甕の口縁部破片。17 は陶器の碗の口縁部破片。18 は削出高台の陶器の底部破片。内面は剥離している。

その他の出土遺物として、19・21 がクルミ、20 はモモの種子。22 は古銭。「○宋通寶」。判読不明。

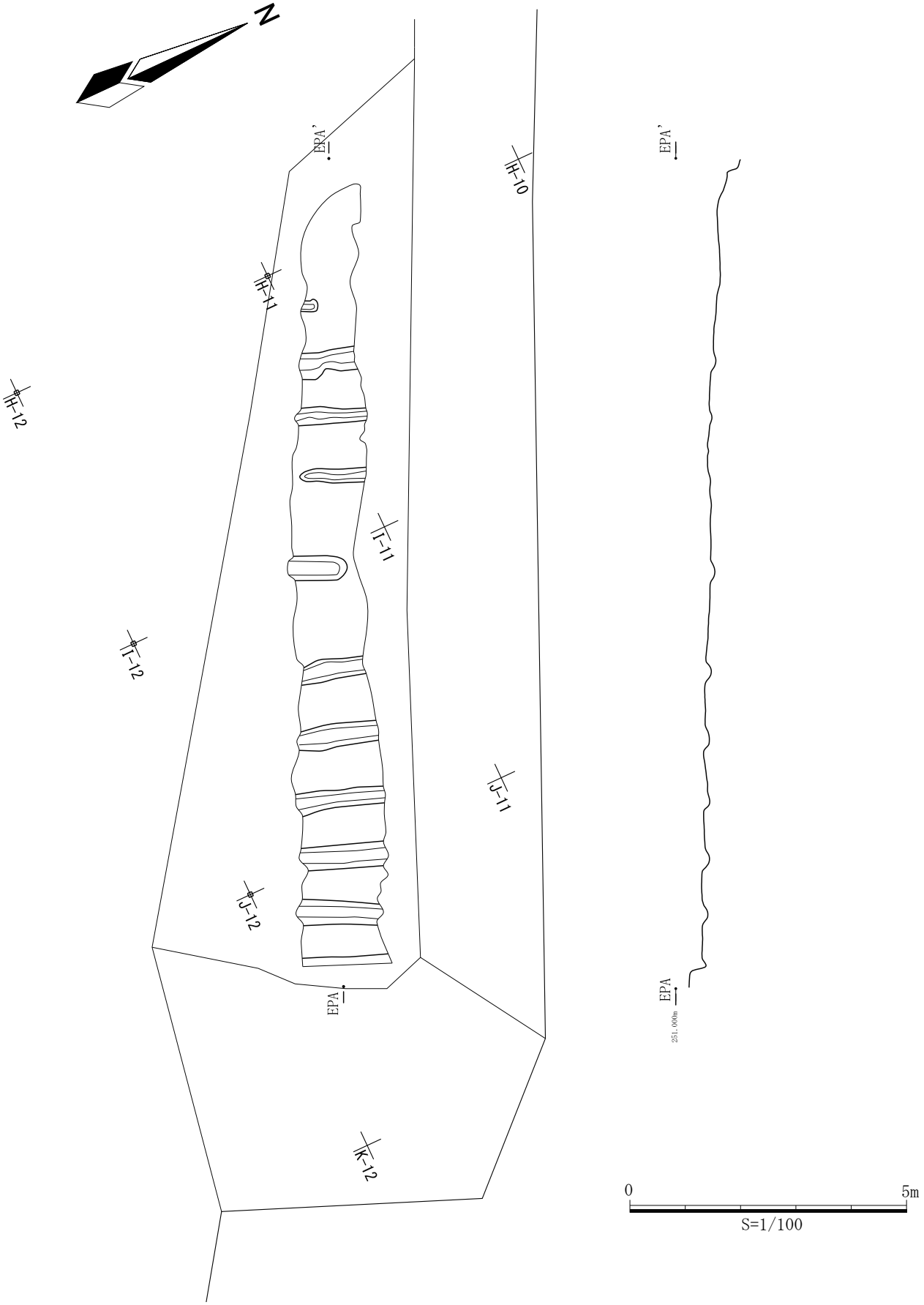

Y=42730.000m
Y=42740.000m
Y=42750.000m
Y=42760.000m
Y=42770.000m
Y=42780.000m
Y=42790.000m
Y=42800.000m
Y=42810.000m
3 号畝状遺構
トレンチ
C 区
トレンチ
2 号畝状遺構
1 号畝状遺構
N
A B C D E F G H I J K L M N
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17


C 区
トレンチ
トレンチ
C'
西壁
C
B'
北壁
B
B C D E F G H I J K L M

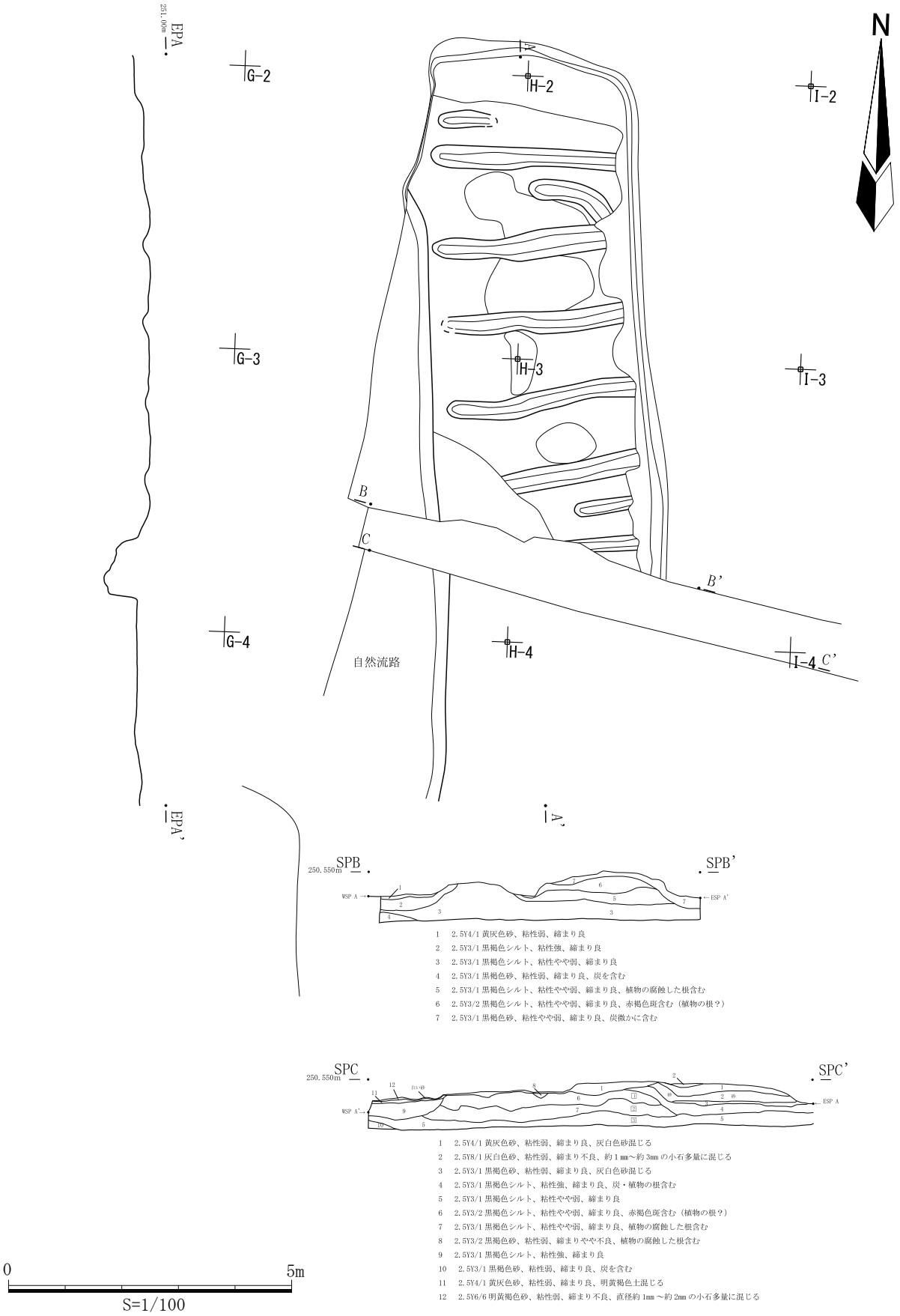




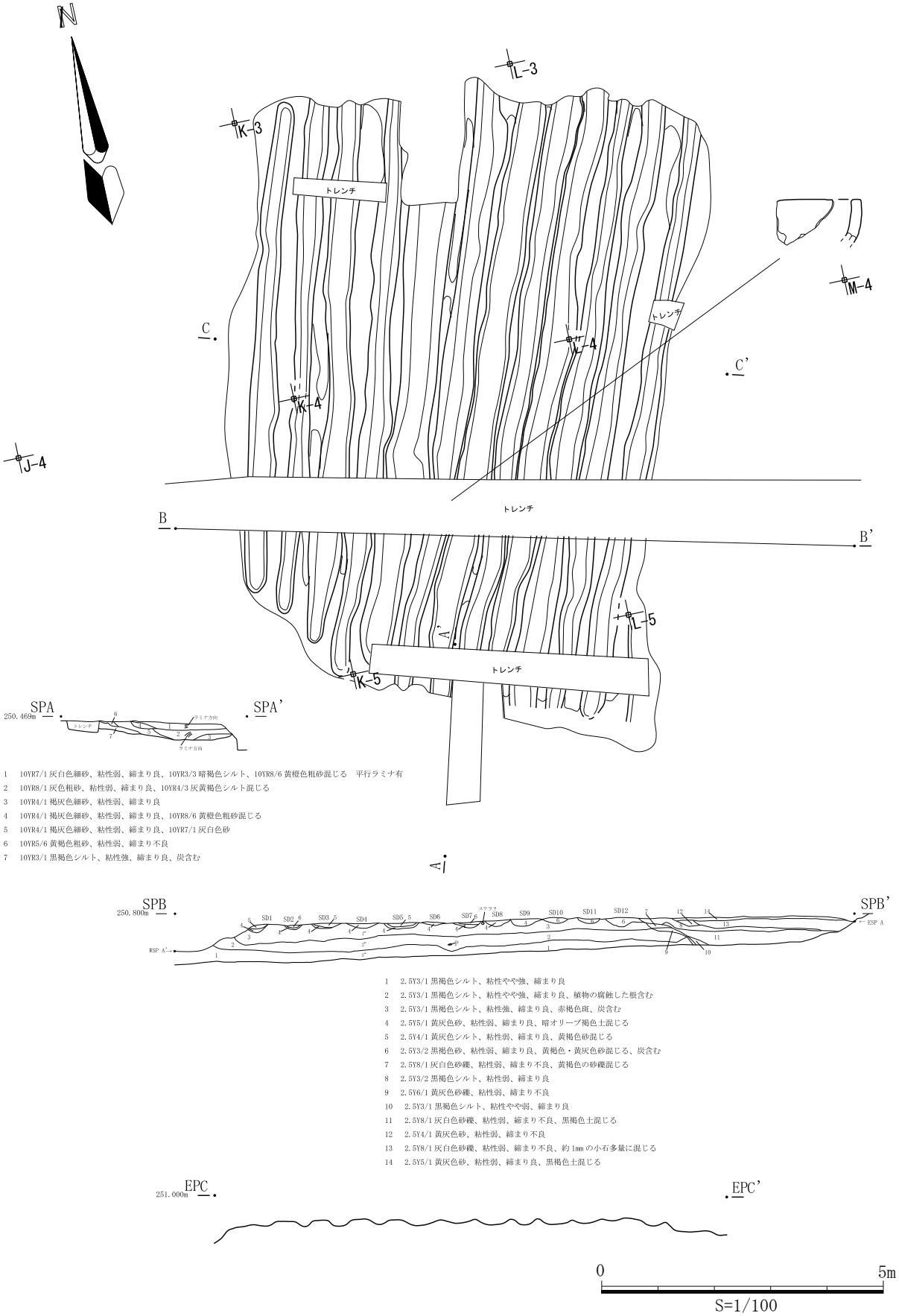
第 16 図　田通遺跡遺構配置図



第 17 図　第 1 号畝状遺構平面図



第18図　第2号畝状遺構平面図

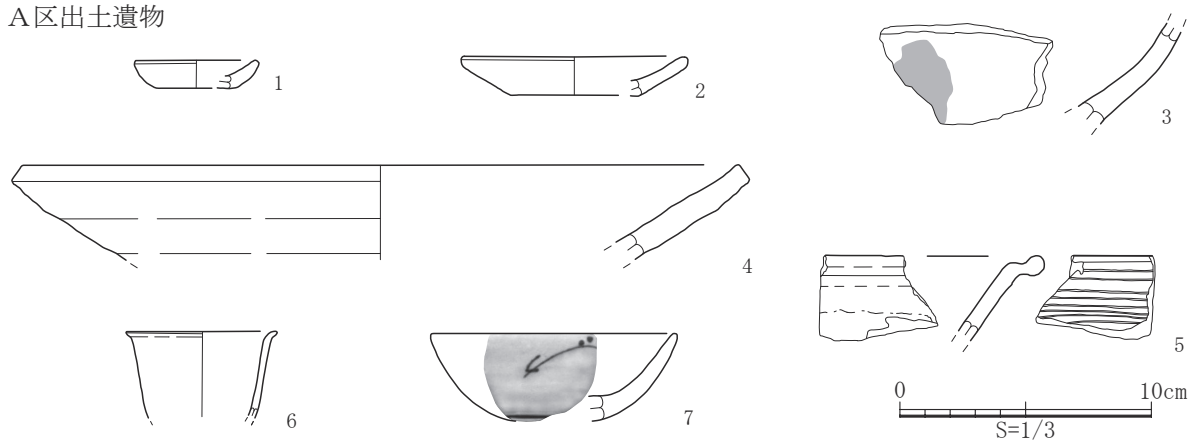


1　10YR7/1 灰白色細砂、粘性弱、締まり良、10YR3/3 暗褐色シルト、10YR8/6 黄橙色粗砂混じる　平行ラミナ有
2　10YR8/1 灰色粗砂、粘性弱、締まり良、10YR4/3 灰黄褐色シルト混じる
3　10YR4/1 褐灰色細砂、粘性弱、締まり良
4　10YR4/1 褐灰色細砂、粘性弱、締まり良、10YR8/6 黄橙色粗砂混じる
5　10YR4/1 褐灰色細砂、粘性弱、締まり良、10YR7/1 灰白色砂
6　10YR5/6 黄褐色粗砂、粘性弱、締まり不良
7　10YR3/1 黒褐色シルト、粘性強、締まり良、炭含む

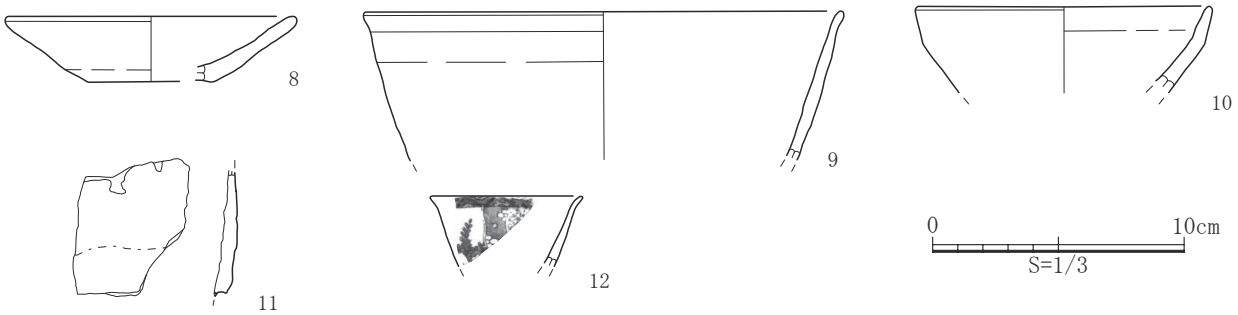
1　2.5Y3/1 黒褐色シルト、粘性やや強、締まり良
2　2.5Y3/1 黒褐色シルト、粘性やや強、締まり良、植物の腐蝕した根含む
3　2.5Y3/1 黒褐色シルト、粘性強、締まり良、赤褐色斑、炭含む
4　2.5Y5/1 黄灰色砂、粘性弱、締まり良、暗オリーブ褐色土混じる
5　2.5Y4/1 黄灰色シルト、粘性弱、締まり良、黄褐色砂混じる
6　2.5Y3/2 黒褐色砂、粘性弱、締まり良、黄褐色・黄灰色砂混じる、炭含む
7　2.5Y8/1 灰白色砂礫、粘性弱、締まり不良、黄褐色の砂礫混じる
8　2.5Y3/2 黒褐色シルト、粘性弱、締まり良
9　2.5Y6/1 黄灰色砂礫、粘性弱、締まり不良
10　2.5Y3/1 黒褐色シルト、粘性やや弱、締まり良
11　2.5Y8/1 灰白色砂礫、粘性弱、締まり不良、黒褐色土混じる
12　2.5Y4/1 黄灰色砂、粘性弱、締まり不良
13　2.5Y8/1 灰白色砂礫、粘性弱、締まり不良、約 1mm の小石多量に混じる
14　2.5Y5/1 黄灰色砂、粘性弱、締まり良、黒褐色土混じる

第 19 図　第 3 号畝状遺構平面図

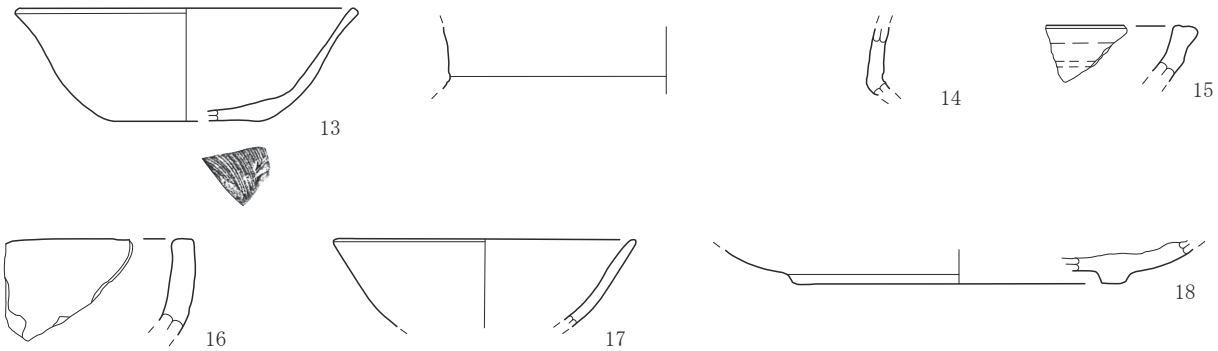
A区出土遺物



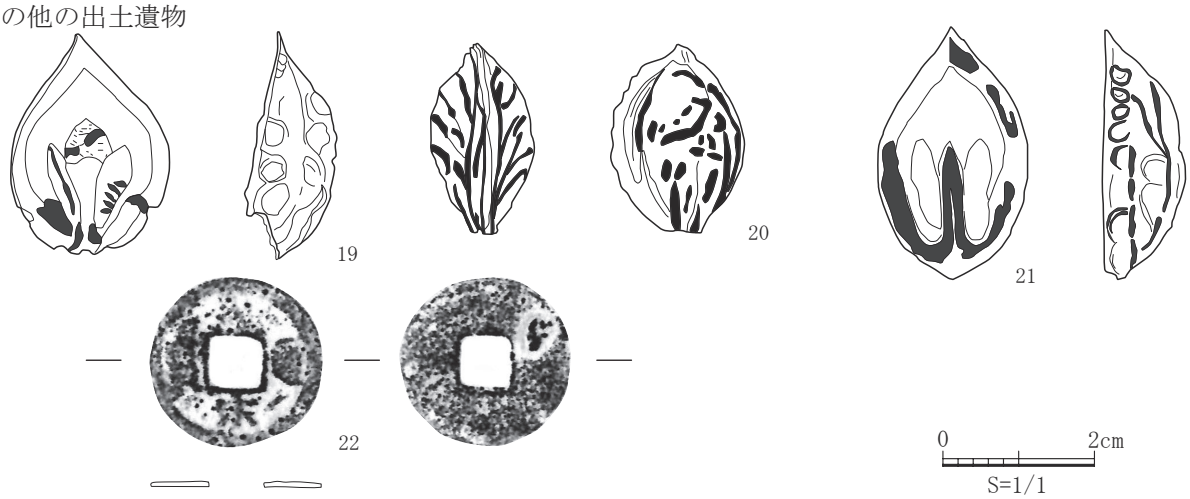
B区出土遺物



C区出土遺物



その他の出土遺物



第20図　出土遺物（田通遺跡）

報告番号	図版番号	出土地点	時代・時期	種別	器種	形状	法量（cm）			色調	胎土	焼成	備考
							口径	低径	器高				
1	21	A 区東壁表採	中・近世	土師質土器	皿		(5.0)	(3.2)	(1.1)	5YR6/6 橙色	蜜　黒・白色粒子	良好	
2	〃	A 区東側排水溝	〃	土師質土器	皿		(8.8)	(5.0)	(2.1)	7.5YR6/4 にぶい橙色	蜜　雲母	良好	
3	〃	A区東側トレンチ	〃	土師質土器	壺		―	―	(3.1)	10YR6/2 灰黄褐色	蜜　白色粒子	良好	外面一部黒変　内面ヘラナデ
4	〃	A 区東側トレンチ	〃	陶器	鉢		(28.4)	―	(3.7)	5Y4/1 灰色	蜜	良好	
5	〃	A 区ジャリ層	〃	陶器	鉢甕		―	―	(3.4)	10Y8/1 灰白色・4/1 灰色・7/1 灰白色	蜜	良好	
6	〃	A 区ジャリ層	〃	磁器	碗	端反形	(6.0)	―	(3.4)	N8/ 灰白色	蜜	良好	
7	〃	A 区表採	〃	磁器	碗類		(9.8)	―	(4.5)	7.5Y7/1 灰白色	蜜	良好	
8	〃	B 区 P-1	〃	土師質土器	皿		(11.2)	(5.0)	2.6	7.5YR7/4 にぶい橙色	蜜　黒・赤色砂粒	良好	
9	〃	B 区サブトレ	〃	磁器	鉢		(18.8)	―	(5.9)	7.5Y6/1 灰色	緻密　白・黒砂粒	良好	
10	〃	B 区 P-2	〃	緑釉陶器	中碗		(11.5)	―	(3.4)	2.5YR7/3 浅黄色	蜜　白・黒色砂粒	良好	内外面施釉
11	〃	B 調査区表採	〃	陶器	鉢		―	―	(5.0)	2.5Y7/4 浅黄色	蜜　白色砂礫	良好	施釉
12	〃	B 区 1 面 P-11	〃	磁器	碗	端反形	(6.0)	―	(2.8)	N8/ 灰白色	緻蜜	良好	銅板転写
13	〃	C 区 2 面南北サブトレ	平安時代後半		坏		(13.2)	(6.0)	4.5	5YR5/6 明赤褐色	蜜　白・赤色粒子	良好	ロクロナデ　回転糸切り痕
14	〃	C 区表採	古墳時代	土師質	甕		―	―	(2.7)	10YR6/3 にぶい黄橙色	蜜　白・黒色粒子	良好	
15	〃	C 区畦 11	中・近世	土師質	甕		―	―	(2.2)	7.5YR5/2 灰褐色	蜜	良好	
16	〃	C 区東畦 1 トレ	〃	土師質	甕		―	―	(3.8)	10YR2/1 黒色	蜜　白色粒子	良好	外面煤付着　ヘラナデ
17	〃	C 区東畦 1 トレ	〃	陶器	碗		(12.0)	―	(3.5)	7.5Y8/2 灰白色	蜜	良好	施釉　貫入
18		C 区 1 トレ	〃	陶器	碗		―	(12.8)	(1.4)	2.5Y8/3 淡黄色	蜜　赤色粒子少量	良好	

報告番号	図版番号	出土地点	種別	法量（cm）			色調	備考
				最長	最幅	最厚		
19	21	A 区東側トレンチ	種子	3.0	2.1	(1.1)	10YR3/1 黒褐色	
20	〃	A 区 1 面ジャリ層	種子	2.5	1.7	1.3	10YR5/2 灰黄褐色	
21	〃	C 区東畦　畝 NO9	種子	3.4	2.0	(1.1)	10YR5/3 灰黄褐色	

報告番号	図版番号	出土地点	種別	銭種	寸法（cm）					重量（ｇ）	備考
					A	B	C	D	E		
22	21	B 区	銭	○宋通寶	2.1	1.8	0.7	0.6	0.8	1.6	判読不明

第 8 表　遺物観察表（田通遺跡）

第４章　田通遺跡及び福部遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福部遺跡及び田通遺跡は、山梨県甲府市落合町に所在し、濁川と笛吹川が合流する付近の濁川右岸に広がる氾濫平野に立地する。福部遺跡では、A 区、B 区で発掘調査を実施した結果、中世の遺構面からは畑跡と考えられる畝間が確認されている。一方、田通遺跡では、A 区、B 区、C 区で発掘調査を実施した結果、B 区と C 区から中世と推定される畝状遺構が確認されている。

本報告では、福部遺跡及び田通遺跡の畝、畝間、溝、基本土層などから採取された土壌を対象として、古環境や栽培植物などに関する情報を得ることを目的として、花粉分析、珪藻分析を実施する。

1. 試料

福部遺跡からは、A 区北壁より 5 試料 (12 層、13 層上層、13 層下層、14 層 -2、14 層 -1)、B 区 SN01 より 4 試料（畝②～畝⑤）が分析に供されている。この 9 試料について花粉分析を、A 区北壁の 4 試料（12 層、13 層上層、13 層下層、14 層 -2）について珪藻分析を実施する。

田通遺跡からは、B 区 1 面の畝間より 6 試料（畝間①～畝間⑥）、C 区東畝の SD-2、SD-4、SD-8、SD-9 より各 2 点（いずれも中層、下層）の 8 試料が分析に供されている。この 14 試料について花粉分析を実施する。

2. 分析方法

⑴花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が 100 個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

⑵珪藻分析

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を 4 ～ 5 回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定･計数する（化石の少ない場合は、この限りではない）。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200 個体が検出できた後は、示準種などの重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot（1985-1991）、Desikachiary（1987）、Lange-Bertalot（2000）などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の 3 適応性についても生態分類し表に示す。

3. 結果

⑴花粉分析

福部遺跡の結果を表 1、図 1 に、田通遺跡の結果を表 2、図 2 に示す。以下、遺跡ごとに述べる。

・福部遺跡

A 区北壁をみると、12 層では花粉化石が豊富に産出したが、13 層上層、13 層下層、14 層 -2、14 層 -1 からは産出状況が悪い。保存状態も 12 層はやや悪い程度だが、他の 4 試料は悪い傾向にある。また､シダ類胞子も全体的に多い。

12 層の花粉化石群集をみると、木本花粉ではツガ属、マツ属、カバノキ属、ハンノキ属が多く、モミ属、サワグルミ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多く、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などを伴う。また、ガマ属、オモダカ属、ゴキヅル属などの水湿地生植物も確認された。

13 層上層～ 14 層 -1 で確認された種類は、木本花粉のモミ属、ツガ属、マツ属、カバノキ属、ハンノキ属など、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、タンポポ亜科などである。13 層上層からはソバ属も、わずかではあるが確認された。

B 区 SN01 の畝②～畝⑤では、全体的に花粉化石の産出状況が悪く、かろうじて定量解析が行えるだけの個体数が得られたのは畝②のみであった。花

表 1.　福部遺跡の花粉分析結果

種　類	A 区北壁					B 区 SN01			
	12 層	13 層上層	13 層下層	14 層 -2	14 層 -1	畝②	畝③	畝④	畝⑤
木本花粉									
モミ属	10	3	-	-	-	8	2	-	3
ツガ属	50	5	-	-	-	35	3	-	6
トウヒ属	3	-	-	-	-	4	-	-	-
マツ属複維管束亜属	19	1	-	-	-	25	-	-	1
マツ属（不明）	37	3	-	-	-	20	2	1	4
スギ属	3	-	-	-	-	2	1	-	1
ヤマモモ属	4	-	-	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	9	1	-	-	-	1	-	-	-
クマシデ属―アサダ属	5	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属	25	3	2	-	-	2	1	-	-
ハンノキ属	30	2	1	1	-	3	1	-	-
ブナ属	3	-	1	-	-	-	2	-	-
コナラ属コナラ亜属	8	1	-	1	2	7	4	-	-
コナラ属アカガシ亜属	1	-	-	-	-	5	-	-	-
クリ属	5	1	-	-	1	1	-	-	-
シイ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ニレ属―ケヤキ属	5	1	-	-	-	3	-	-	-
モチノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	2	-	1	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	2	2	2	-	3	3	1	-	-
ツツジ科	2	-	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉									
ガマ属	3	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	36	4	-	-	-	147	8	2	78
カヤツリグサ科	27	7	6	4	1	42	18	-	13
クワ科	-	-	-	-	1	1	-	-	-
サナエタデ節―ウナギツカミ節	5	-	-	-	-	-	-	-	-
タデ属	3	-	-	-	-	3	-	-	-
ソバ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	1	-	-	1	1	3	1	-	2
ナデシコ科	-	-	-	-	7	8	-	-	-
カラマツソウ属	3	1	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	-	1	1	-	-	-
バラ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ゴキヅル属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	15	-	1	1	1	2	12	-	4
キク亜科	10	-	1	1	3	7	4	-	2
タンポポ亜科	10	9	2	8	26	44	7	-	32
不明花粉									
不明花粉	18	1	-	-	-	10	3	-	-
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	2	1	-	-	1	-	-	-	-
イノモトソウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-
他のシダ類胞子	308	192	136	5	21	51	53	-	35
合　計									
木本花粉	224	23	7	2	6	120	18	1	15
草本花粉	118	22	10	15	41	260	51	2	131
不明花粉	18	1	0	0	0	10	3	0	0
シダ類胞子	310	193	136	5	23	51	53	0	35
合計（不明を除く）	652	238	153	22	70	431	122	3	181

粉化石の保存状態も全体的に悪い。

畝②から検出された種類をみると、木本花粉ではツガ属、マツ属が多く認められ、モミ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属も比較的多く認められる。その他ではナデシコ科、キク亜科などを伴う。産出個体数が少ない他の３試料でも、モミ属、ツガ属、マツ属、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが認められる。

・田通遺跡

B 区 1 面の畝間①～畝間⑥では、全体的に花粉化石の産出状況が悪く、かろうじて定量解析が行えるだけの個体数が得られたのは畝間③のみであった。花粉化石の保存状態も全体的に悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。

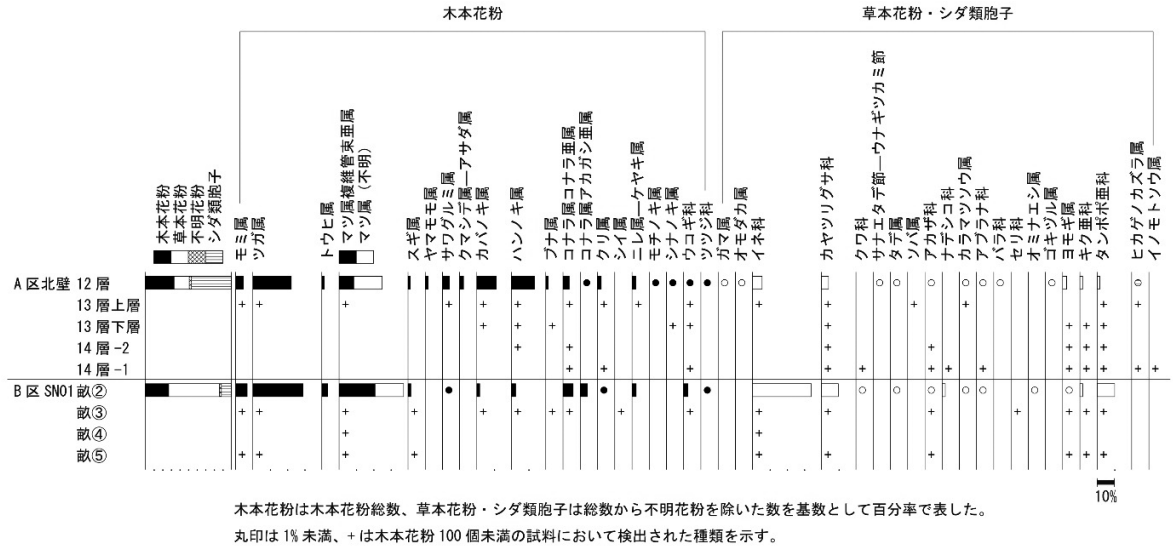
畝間③から検出された種類をみると、木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属が多く認められ、スギ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、タンポポ亜科が多く、カヤツリグ

表 2.　田通遺跡の花粉分析結果

種　　類	B 区 1 面						C 区東畝							
	畝間①	畝間②	畝間③	畝間④	畝間⑤	畝間⑥	SD-2 中層	SD-2 下層	SD-4 中層	SD-4 下層	SD-8 中層	SD-8 下層	SD-9 中層	SD-9 下層
木本花粉														
モミ属	-	-	22	-	-	-	15	11	25	22	16	10	-	10
ツガ属	2	-	33	-	-	-	40	24	67	40	25	10	-	33
トウヒ属	-	1	2	-	-	-	3	3	3	5	3	3	-	3
マツ属複維管束亜属	-	-	4	-	1	-	1	6	18	15	4	1	-	21
マツ属（不明）	2	2	21	1	1	1	31	42	38	27	39	18	1	19
スギ属	-	-	6	-	-	-	1	1	2	6	10	2	-	1
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	7	1	2	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
クマシデ属―アサダ属	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	3
カバノキ属	-	-	5	-	1	-	4	1	4	4	-	-	-	3
ハンノキ属	-	1	1	-	-	-	4	3	2	8	6	1	-	6
ブナ属	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	3	-	-	-	1	3	6	7	4	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	2	-	-	-	1	3	-	3	1	-	-	1
クリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ニレ属―ケヤキ属	-	-	1	-	-	-	1	5	4	3	3	-	-	-
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1	-	-	-	3
草本花粉														
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	7	8	-	-	-	3
イネ科	1	6	33	1	-	-	150	28	285	100	126	23	3	18
カヤツリグサ科	-	-	6	-	1	-	9	10	14	13	6	3	-	49
クワ科	-	1	3	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-
サナエタデ節―ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	4	-	3	-	1	-	-	-
タデ属	-	-	-	-	-	-	10	-	2	-	1	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	18	-	2	-	-	-	-	-
アカザ科	-	-	3	-	-	-	1	-	3	1	-	1	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	2	3	3	1	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	3	-	-	-
バラ科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-	-
オミナエシ属	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	4	-	-	-	16	7	18	10	15	-	-	6
ベニバナ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-
キク亜科	-	1	2	-	-	-	3	3	8	6	3	1	-	4
タンポポ亜科	2	3	26	2	1	-	9	24	12	36	43	17	4	6
不明花粉														
不明花粉	-	-	5	-	-	-	13	5	6	6	6	1	1	3
シダ類胞子														
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
デンジソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イノモトソウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ミズニラ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	-	13	106	2	2	2	97	175	148	165	79	68	22	139
合　計														
木本花粉	4	4	102	1	3	1	104	106	179	150	113	48	1	104
草本花粉	3	11	79	3	2	0	223	75	360	181	203	46	7	86
不明花粉	0	0	5	0	0	0	13	5	6	6	6	1	1	3
シダ類胞子	0	13	106	2	2	2	97	177	149	168	79	68	22	139
合計（不明を除く）	7	28	287	6	7	3	424	358	688	499	395	162	30	329
その他														
クンショウモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
回虫卵	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
鞭虫卵	-	-	3	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-

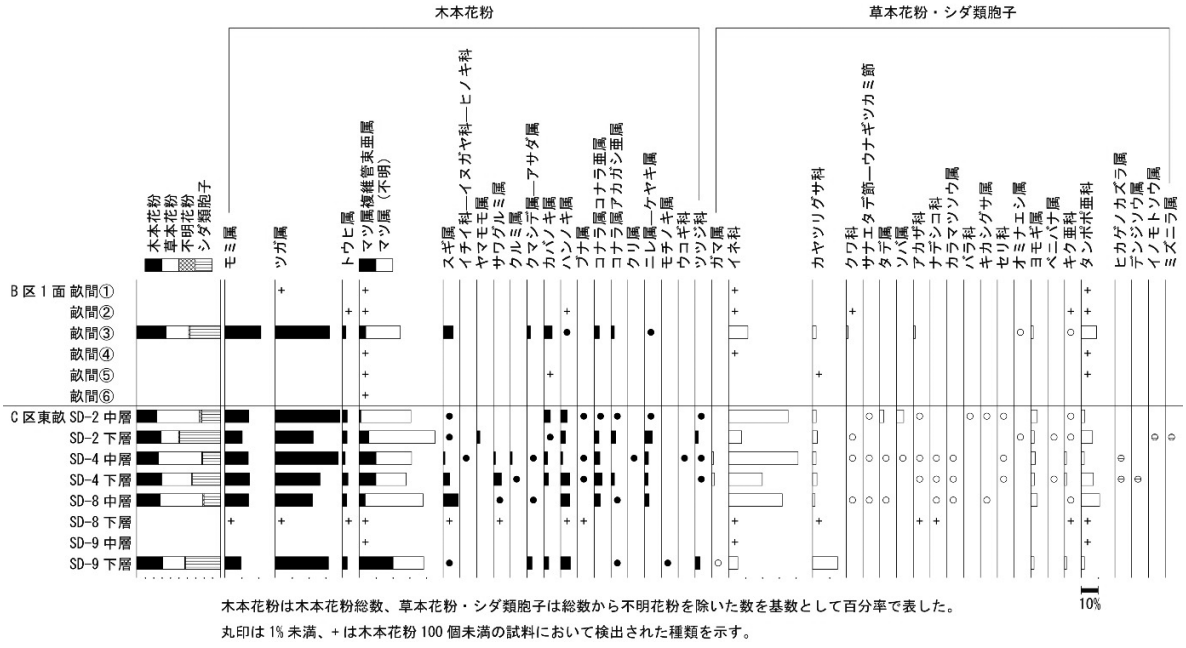
サ科、ヨモギ属などを伴う。産出個体数が少ない他の５試料でも、ツガ属、マツ属、イネ科、タンポポ亜科など、畝間③で多く認められたものが産出する傾向にある。

Ｃ区東畝の８試料は、SD-8 下層、SD-9 上層を除く６試料から、定量解析が行えるだけの個体数が得られた。保存状態は全体的に悪く、シダ類胞子が多産する傾向にある。検出された花粉化石は、いずれも類似した群集組成を示し、モミ属、ツガ属、マツ属が多産し、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属―ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、タンポポ亜科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。わずかではあるが、ガマ属、デンジソウ属、ミズニラ属などの水湿地生植物に由来する花粉、胞子も確認された。なお、中層、下層で比較すると、SD-2、SD-4、SD-8 の３地点では、上位の中層のほうがイネ科の割合が高い傾向にある。また、SD-2 中層、SD-4 中層から、栽培の可能性があるソバ属の花粉も確認された。



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
丸印は 1% 未満、＋は木本花粉 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

図 1. 福部遺跡における花粉化石群集



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。
丸印は 1% 未満、＋は木本花粉 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

図 2. 田通遺跡における花粉化石群集

⑵珪藻分析

結果を表３に示す。福部遺跡のＡ区北壁から採取された４試料では、産出する珪藻化石数がいずれも非常に少なかった。保存状態は、壊れた殻が多く、一部の殻に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。

12 層からは 15 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の Cymbella turgidula、流水不明種の Pinnularia spp. 等である。

13 層上層からは、4 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。

表 3. 福部遺跡の珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境	A 区北壁			
	塩分	pH	流水	指標種	12 層	13 層上層	13 層下層	14 層 -2
Rhopalodia gibberula (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	-	2	-
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	1	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	4	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	-
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	1	2	1	1
Frustulia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1	-
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	1	-	1
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	-	-
Neidium iridis (Ehr.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	1	-	-	-
Nitzschia sinuata (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	-	-	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	-	-
Rhopalodia gibba (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	-	-	-
海水生種					0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	2	0
淡水生種					15	4	2	3
珪藻化石総数					15	4	4	3

凡例

塩分 : 塩分濃度に対する適応性
- Euh : 海水生種
- Euh-Meh : 海水生種 - 汽水生種
- Meh : 汽水生種
- Ogh-Meh : 淡水生種 - 汽水生種
- Ogh-hil : 貧塩好塩性種
- Ogh-ind : 貧塩不定性種
- Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk : 貧塩不明種

pH: 水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi : 真アルカリ性種
- al-il : 好アルカリ性種
- ind : pH 不定性種
- ac-il : 好酸性種
- ac-bi : 真酸性種
- unk : pH 不明種

流水 : 流水に対する適応性
- l-bi : 真止水性種
- l-ph : 好止水性種
- ind : 流水不定性種
- r-ph : 好流水性種
- r-bi : 真流水性種
- unk : 流水不明種

環境指標種

A: 外洋指標種　B: 内湾指標種　C1: 海水藻場指標種　C2: 汽水藻場指標種
D1: 海水砂質干潟指標種　D2: 汽水砂質干潟指標種
E1: 海水泥質干潟指標種　E2: 汽水泥質干潟指標種　F: 淡水底生種群 (以上は小杉 ,1988)
G: 淡水浮遊生種群　H: 河口浮遊性種群　J: 上流性河川指標種　K: 中～下流性河川指標種
L: 最下流性河川指標種群　M: 湖沼浮遊性種　N: 湖沼沼沢湿地指標種　O: 沼沢湿地付着生種
P: 高層湿原指標種群　Q: 陸域指標種群 (以上は安藤 ,1990)
S: 好汚濁性種　U: 広適応性種　T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe,1995)
R: 陸生珪藻 (RA:A 群，RB:B 群，RI: 未区分、伊藤・堀内 ,1991)

13 層下層からは、4 個体産出した。産出した分類群は、淡水生種および淡水～汽水生で構成される。

14 層 -2 からは、3 個体産出した。

4. 考察

(1) 福部遺跡

Ａ区北壁各層の堆積環境を検討するために珪藻分析を実施したが、珪藻化石自体の産出率が低いことから、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。少ないながら認められた珪藻殻は、壊れているものが多いだけでなく、溶解の痕跡が認められるという、かなり分解が進んだ状態の個体が認められた。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。また、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている (千木良 ,1995)。以上のことから、Ａ区北壁の 14 層 -2、13 層下層、13 層上層の各層に取り込まれた珪藻化石は、堆積後に分解が進んで消失した可能性が高い。

12 層も 14 層 -2 ～ 13 層上層と同様に珪藻化石の産出状況・保存状態が悪い。わずかに産出した種は、淡水生種で流水性種の Cymbella turgidula、流水不明種の Pinnularia spp. 等である。産出した種の生態性について述べると、流水性種の Cymbella turgidula は中～下流性河川指標種群 (安藤 ,1990) と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。Pinnularia spp. は、数種類で構成されるが、本属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

12 層も産出数が少なかったため、直接的な堆積環境の推定は困難であるが、若干の考察を行うと次のように考えられる。本試料からは、流水不定性種が多いものの、止水性種、流水不明種および陸生珪藻を伴うほか、流水性種も認められ、分類群の生態性にはばらつきがある、いわゆる「混合群集」の傾向が認められる。淡水生種群の混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、また、検出種数が多い群集とされ (堆積物中からの産出率は低い割に構成種数は多い)、流れ込み等による二次化石種群を多く含む群集とされる（堀内ほか ,1996）。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められる場合が多いが、この場合は検出率が低い傾向 (堆積物中の絶対量が少ない) にある。他方、一過性ではなく定常的に堆積物が供給されるような場所の場合、例えば河口付近や低地部の湿地等において同様な環境が長期間続いた場合も混合群集が認められるが、この場合は長い間に徐々に堆積して行く中で珪藻の生産が繰り返し行われること、堆積物の表層部付近での自然の撹乱が行われること、多少の流れ込みもあることなどから検出率はやや高い傾向にある。本試料の場合は、堆積物中の絶対量自体が少ないことから、低地部における氾濫堆積物などの一過性の堆積物で認められるタイプである。遺跡が濁川や笛吹川による氾濫平野に立地する点とも調和的である。

以上のことから、14 層 -2 ～ 12 層が堆積した当時は基本的には地下水位が低く、乾燥した状態であったが、しばしば氾濫などにより土砂が供給され、乾湿を繰り返すような環境であった可能性が考えられる。

一方、花粉分析の結果では、A 区北壁の 12 層から花粉化石が豊富に産出したが、14 層 -2 ～ 13 層上層では産出状況が悪い。保存状態や珪藻分析の結果も考慮すると、14 層 -2 ～ 13 層上層では取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したと推測される。

12 層もの花粉化石群集をみると、ツガ属、マツ属などの針葉樹、カバノキ属、ハンノキ属などの落葉広葉樹が多く認められた。その他に認められた種類も考慮すると、ツガ属などの針葉樹、カバノキ属、

コナラ亜属などの落葉広葉樹が周辺の森林を構成し、二次林などとしてマツ属も分布していたと推測される。また、周囲の沢沿いにはスギ属、サワグルミ属、クマシデ属―アサダ属などが、濁川などの河川沿いにはハンノキ属、ニレ属―ケヤキ属、シナノキ属などが生育していたと考えられる。また、草本類でもガマ属、オモダカ属、ゴキヅル属などの水湿地生草本が確認されており、周辺の河川沿いなどに由来する可能性が高い。

その他の草本類は、イネ科、カヤツリグサ科が多く、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科など草地植生に由来するものが多く認められる。よってこれらが、調査区周辺の草地や林縁などに由来すると考えられる。

中世の畑跡と想定される B 区 SN01 では、定量解析が行えたのは畝②のみであった。木本類はツガ属、マツ属が多く認められ、モミ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などを伴う。草本類はイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴う。よって、A 区北壁と同様の森林植生、草本植生を反映していると考えられる。なお、本地点は草本類の割合が高く、イネ科が多産する傾向が認められる。多産するイネ科にイネ属が含まれているなら、調査地付近で稲作が行われていた可能性もある。

⑵田通遺跡

中世とされる B 区 1 面の畝間⑥～畝間①では花粉化石の産状が悪く、畝間③以外では古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村 ,1967; 徳永・山内 ,1971; 三宅・中越 ,1998 など）。畝状遺構が畑作にともなうものであるなら、好気的環境であった可能

性が高い。よって、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。かろうじて定量解析が行えた畝間③でも、花粉化石の保存状態は悪い。得られた群集も、比較的酸化に対する抵抗性が高い針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の割合が高い。このことから、得られた花粉化石群集は経年変化による分解・消失の影響を受けており、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。そのことを考慮した上で、古植生の検討を行う。

畝間③から検出された種類をみると、木本類ではモミ属、ツガ属、マツ属などの針葉樹が多く認められ、スギ属などの針葉樹、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹を伴う。マツ属は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、崩落地など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能であるほか、極端な陽樹であることから二次林の代表的な種類でもある。ツガ属などの針葉樹とコナラ亜属などの落葉樹が、遺跡周辺に分布し、部分的に二次林などとしてのマツ属が生育していた可能性がある。

草本類ではイネ科、タンポポ亜科が多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められた。いずれも開けた明るい場所に生育する種類であることから、畝周辺などの草地に由来する可能性がある。

同じく中世とされるC区東畝では、B区1面と比較すると花粉化石が多く産出するが、保存状態は全体的に悪く、シダ類胞子が多産する傾向にある。よって、B区1面と同様に分解の影響を受けていると推測される。周辺植生を反映する木本類は、モミ属、ツガ属、マツ属が多産し、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属―ケヤキ属などを伴う。基本的にはB区1面と同様の植生が想定される。ただし、スギ属は沢筋などに、ハンノキ属、ニレ属―ケヤキ属などは河畔や低湿地などに生育することから、濁川や笛吹川などの周辺河川沿いに生育する植生も反映していると考えられる。

草本類も、イネ科、タンポポ亜科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などを伴うことから、調査区内の草地などに由来すると思われる。わずかではあるが、ガマ属などの水湿地生草本、デンジソウ属、ミズニラ属などの水生シダ類が確認されたことから、B区1面と比較すると水の影響を強く受けていた可能性が指摘される。

なお、多産するイネ科に着目すると、SD-2、SD-4、SD-8の3地点では、下層よりも中層のほうがイネ科の割合が高い傾向にある。イネ科花粉に栽培種のイネ属に由来するものが含まれていたとしたら、この変化は周辺での稲作を反映している可能性がある。この点については植物珪酸体分析を実施して検証することが望まれる。また、SD-2中層、SD-4中層から、栽培の可能性があるソバ属が確認されたことから、当時の栽培・利用の可能性も指摘される。

引用文献

安藤一男 ,1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 . 東北地理 ,42,73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,35 ― 47.

千木良雅弘 ,1995, 風化と崩壊 . 近未来社 ,204p.

Desikachiary, T. V.,1987,Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps and Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 401-621.

藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫 ,1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－ . 日本文化財科学会　第 13 回大会研究発表要旨集 ,62-63.

Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1,920p.

Hustedt, F.,1937-1938,Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ . Arch. Hydrobiol. Suppl.,15,131-809,1-155,274-349.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2,845p.

Hustedt, F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3,816p.

伊藤良永・堀内誠示 ,1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 日本珪藻学誌 ,6,23-44.

小杉正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 ,27,1-20.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1985,Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica,9,250p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991,Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Lange-Bertalot, H.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA: Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925p.

三宅　尚・中越信和 ,1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.

三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.

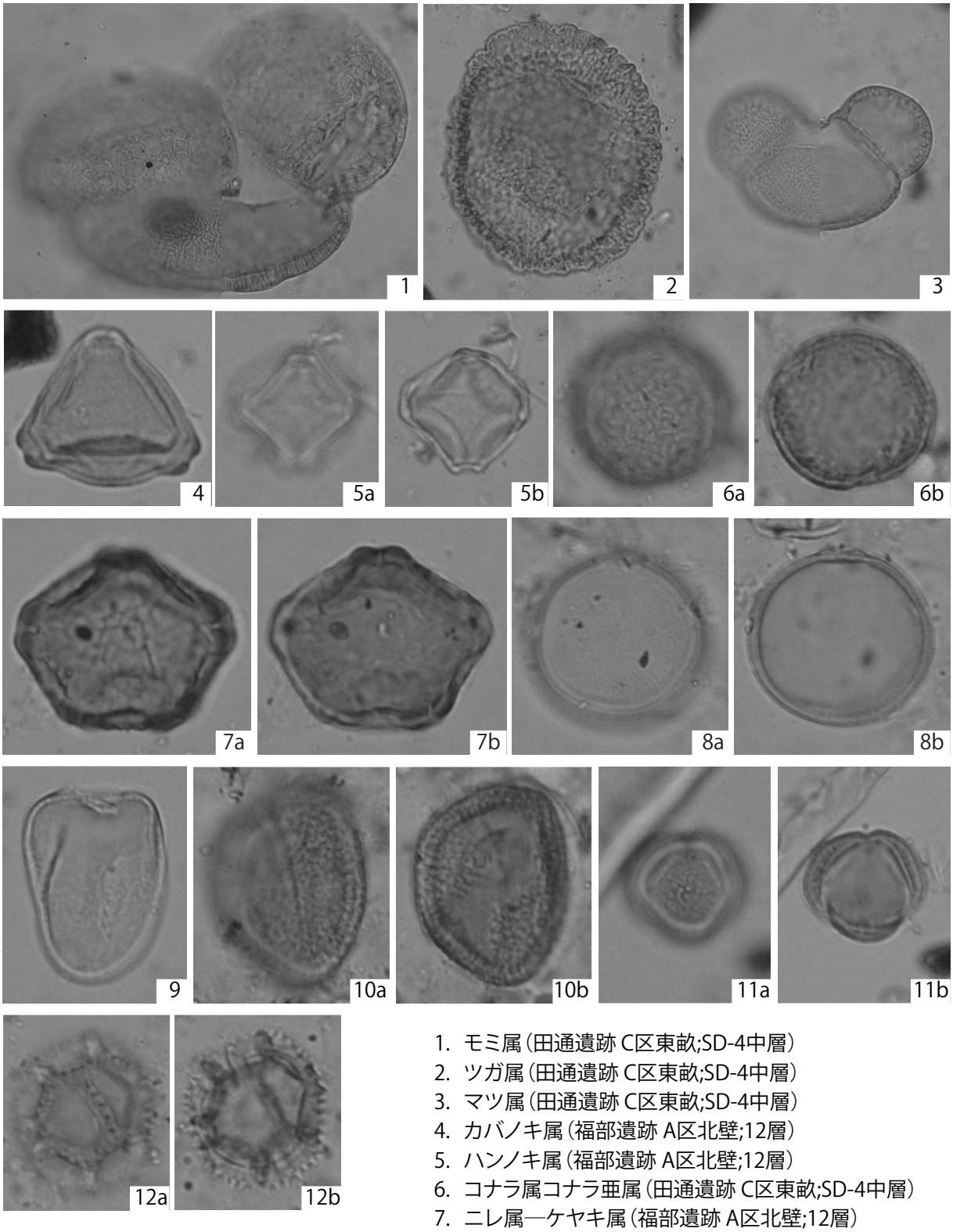
中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

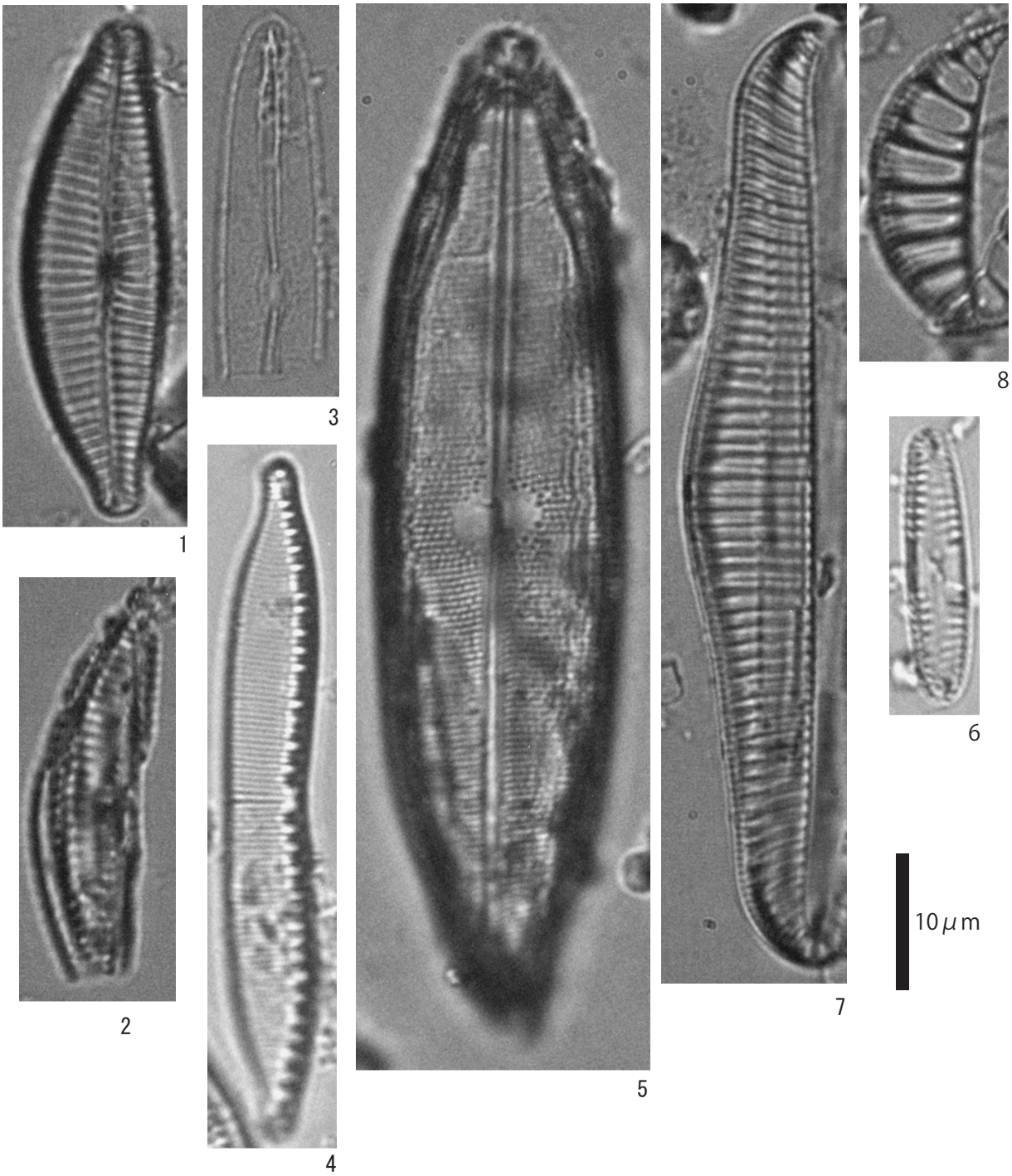
徳永重元・山内輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.

図版1　花粉化石



1. モミ属（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
2. ツガ属（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
3. マツ属（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
4. カバノキ属（福部遺跡 A区北壁;12層）
5. ハンノキ属（福部遺跡 A区北壁;12層）
6. コナラ属コナラ亜属（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
7. ニレ属―ケヤキ属（福部遺跡 A区北壁;12層）
8. イネ科（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
9. カヤツリグサ科（福部遺跡 A区北壁;12層）
10. ソバ属（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）
11. ヨモギ属（福部遺跡 A区北壁;12層）
12. タンポポ亜科（田通遺跡 C区東畝;SD-4中層）

図版2　珪藻化石



1. *Cymbella turgidula* Grunow（福部遺跡 A 区北壁 ;14 層 -2）
2. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann（福部遺跡 A 区北壁 ;12 層）
3. *Frustulia vulgaris* (Thwaites) De Toni（福部遺跡 A 区北壁 ;13 層 下層）
4. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow（福部遺跡 A 区北壁 ;11 層）
5. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer（福部遺跡 A 区北壁 ;12 層）
6. *Pinnularia subcapitata* Gregory（福部遺跡 A 区北壁 ;12 層）
7. *Rhopalodia gibba* (Ehr.) Mueller（福部遺跡 A 区北壁 ;12 層）
8. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller（福部遺跡 A 区北壁 ;13 層 下層）

第５章　総括

福部遺跡及び田通遺跡の発掘調査では、中世後半頃と思われる畑跡、炭溜まり遺構などの痕跡が見つかった。遺構や遺物の密度が希薄ながらも、周辺に点在する中世土豪屋敷との位置関係の中で人の活動痕跡を発見したこと自体に当遺跡の意義を見出すことができると考えられる。特に、福部遺跡で出土した青磁片 (39 ～ 44) は中世土豪のような支配者層の存在、関わりを窺わせる象徴的な遺物であり、土豪屋敷をはじめ、この地域の村落展開及びその周辺に広がる経済基盤となる生産域の存在が想定される。今回の調査が、今後、周辺に存在する未発見の遺跡の存在を捕捉するための布石となるだろうと期待している。

従来、甲府盆地南部の低地地域には遺跡の分布が希薄な地域として認識されていることが多い。しかし、今回の発掘調査を通じて明確な人の活動痕跡が認められ、当該地域を含む低地部における遺跡分布を見直す、さらには未発見の遺跡をどのように捕捉するのかという問題を提起させられた。ここでは、福部遺跡及び田通遺跡のような深深度に埋没している遺跡を安全かつ適切に把握するために行った取り組みを紹介したい。

第１章でも記述している通り、当遺跡は本事業に伴う試掘調査の結果により初めて発見した遺跡である。当該事業に係る埋蔵文化財保護を推進するに当たっては、前年度に実施した北畑南遺跡（福部遺跡及び田通遺跡の近接地点）の発掘調査において地表面下約５m地点に遺跡が良好な形で埋没している事例がある一方、安全な掘削深度（職員がトレンチ内に立ち、堆積土層等の観察が適切に行えるための環境整備）を保持しなければならないため、従来通りの筋掘りでは対応できないような技術的な掘削限界となる可能性も視野に調査計画を策定する必要があった。そこで、試掘トレンチを掘削する前段階までに堆積環境を大まかに把握することを目的として、ボーリング調査の成果を援用することとした。このボーリング調査は、事業者が設計前に行っていることが多くそのコアが保管されていることがある。本事業においても、試掘調査前にボーリング調査を実施しており、事前にコアの実見を経て大体の堆積環境をつかむことができた。今回の場合、基本的な水成堆積（洪水・河川由来の砂層、礫層）が主となっており、砂礫層の堆積により地盤が高くなって離水した時期に土壌化する時期が来るというプロセスを繰り返す地形であることを事前に察知することができた。この土層中に人の痕跡がある可能性を推定し、事業用地の広さを踏まえて約５m地点に見られる土壌化層を最終目標に試掘調査を実施する調査計画を策定した。さらに、出水層（深さ）及び出水量のある程度の想定が可能であり、試掘調査に当たって必要な排水機材等の準備にも寄与することができる。合わせて、従来通りに試掘調査地点に関わる古文書、地誌類、日記等の文字資料、現地踏査による石造物等歴史的な記念物の分布の有無及び詳細な地形観察等を行った。以上を踏まえて、試掘トレンチを掘削する前に調査の精度を上げる努力を極力実施した。これにより、結果的に遺物、遺構の密度が低い遺跡であったが、これまで遺跡が希薄であった地域において、地下深くに埋没しているだけで「遺跡はある」という、地域の歴史構築に欠かせない事実が明らかになった点は大きく評価できる。最後に、深深度に埋没した埋蔵文化財の捕捉についてボーリング調査の活用を提起したが、これは事前の地形、地質環境等を踏まえて必要性を検討の上で参考にされたい。

＜参考文献＞

宮里学・御山亮済 2020「甲府盆地における埋蔵文化財包蔵地の捕捉に関する試論 - 峡東地域における土地履歴の追跡 -」『研究紀要 36』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター P.85 ～ 92

福部遺跡調査区垂直写真（写真上が北）

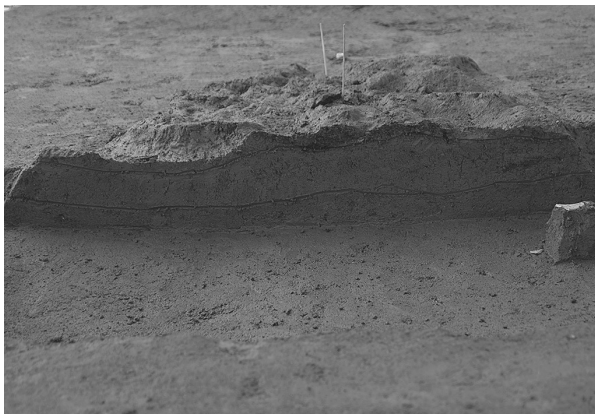
福部写真図版２

SN01, SN02,SD03,SD05、完掘状況

SD06　完掘状況

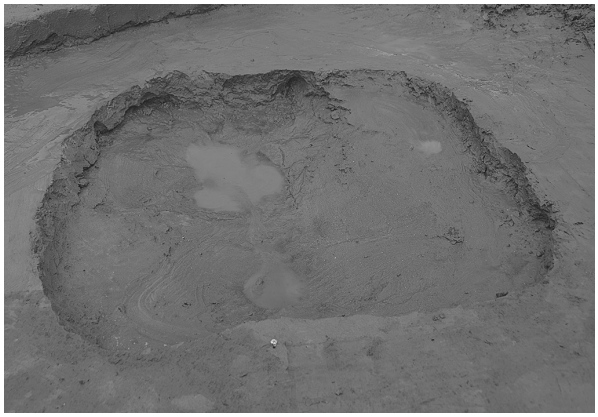
SD06　土層断面

SX01　検出状況



SX01　土層断面

SX02　完掘状況



SX03　完掘状況

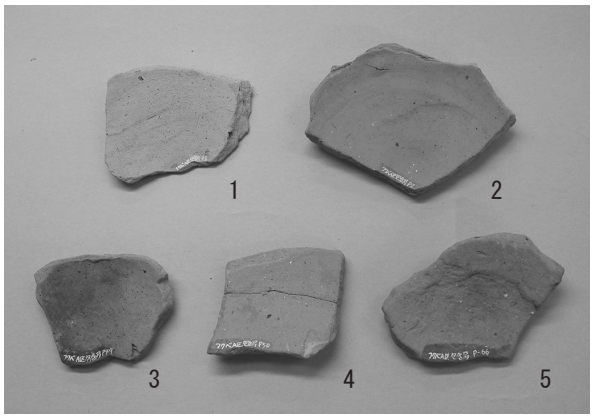
SN01　調査状況

Ａ区 南壁土層堆積状況

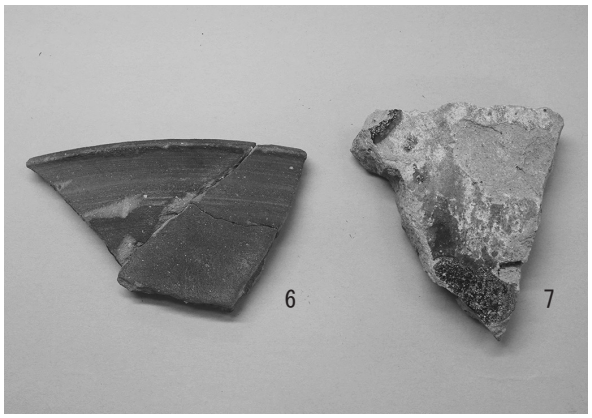
Ａ区 東壁土層堆積状況

遺構精査作業

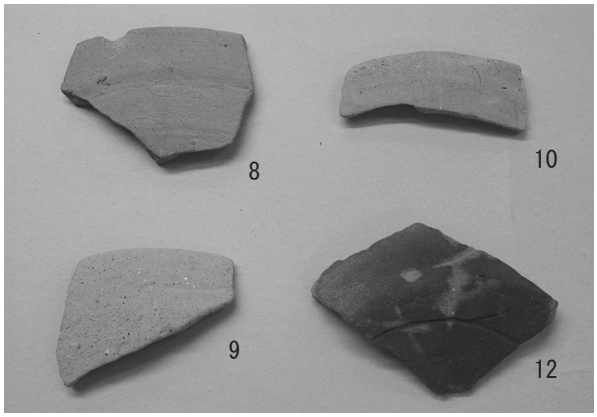
埋め戻しのようす



出土遺物①



出土遺物②

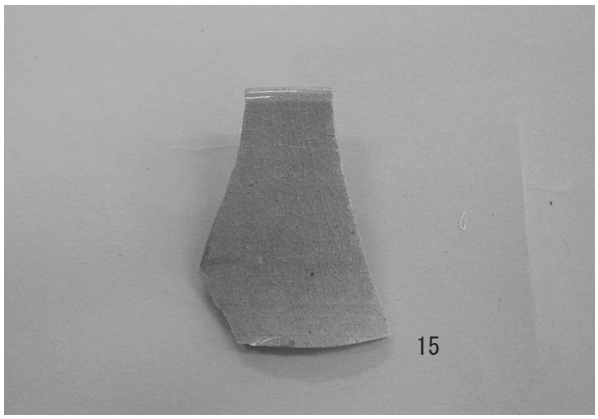


出土遺物③

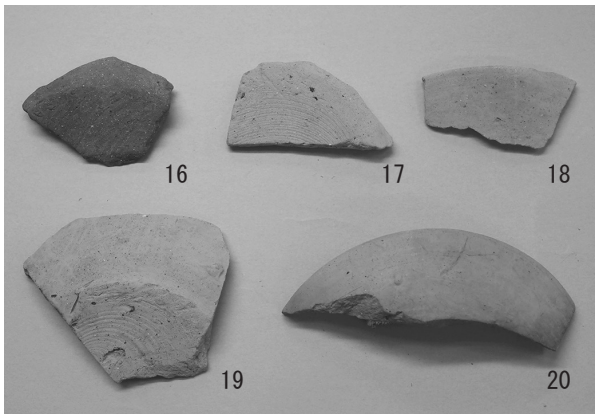
出土遺物④

福部写真図版４

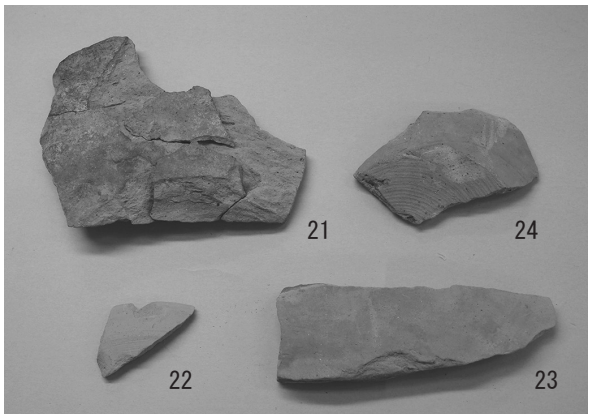
出土遺物⑤



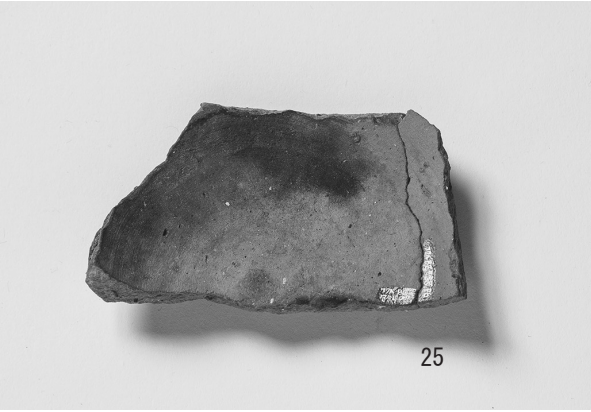
出土遺物⑥



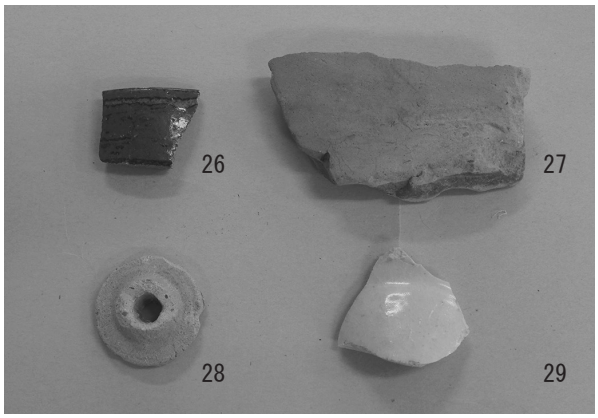
出土遺物⑦



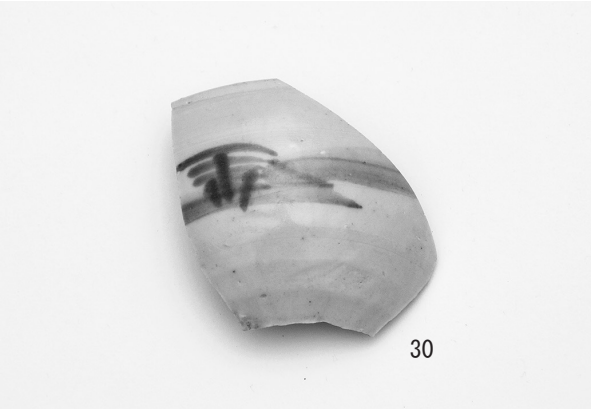
出土遺物⑧



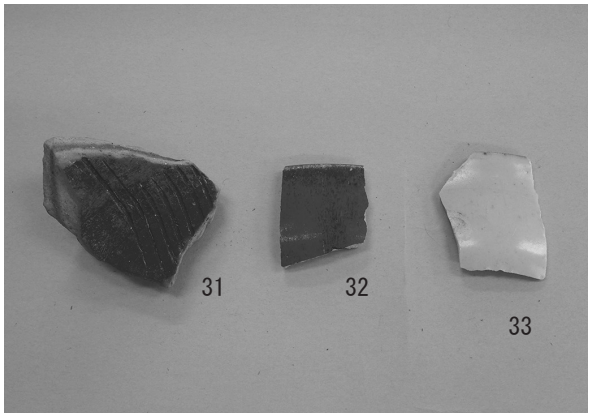
出土遺物⑨



出土遺物⑩

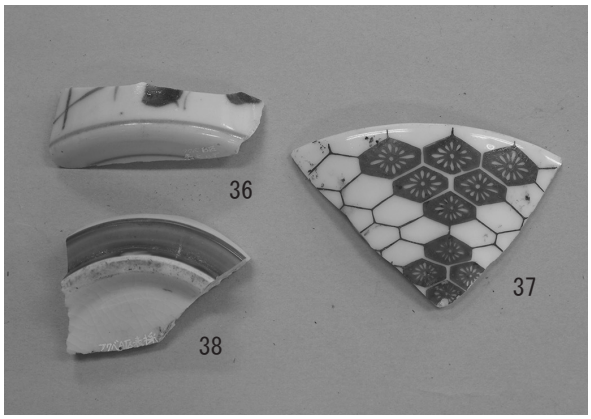


出土遺物⑪

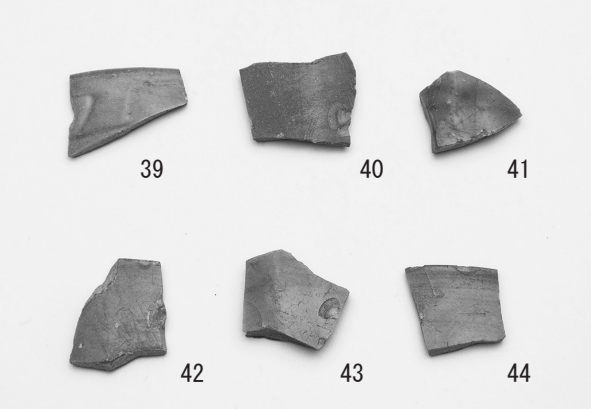


出土遺物⑫

出土遺物⑬



出土遺物⑭



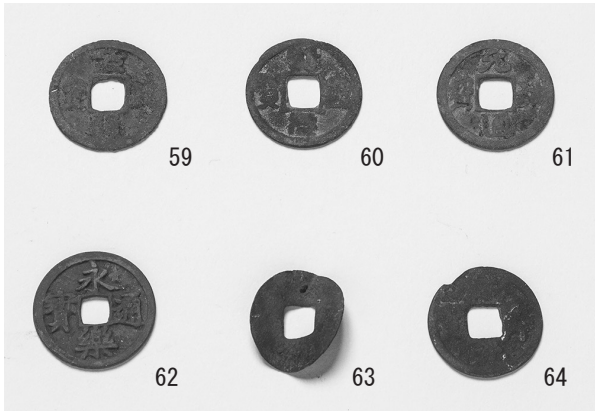
出土遺物⑮

出土遺物⑯

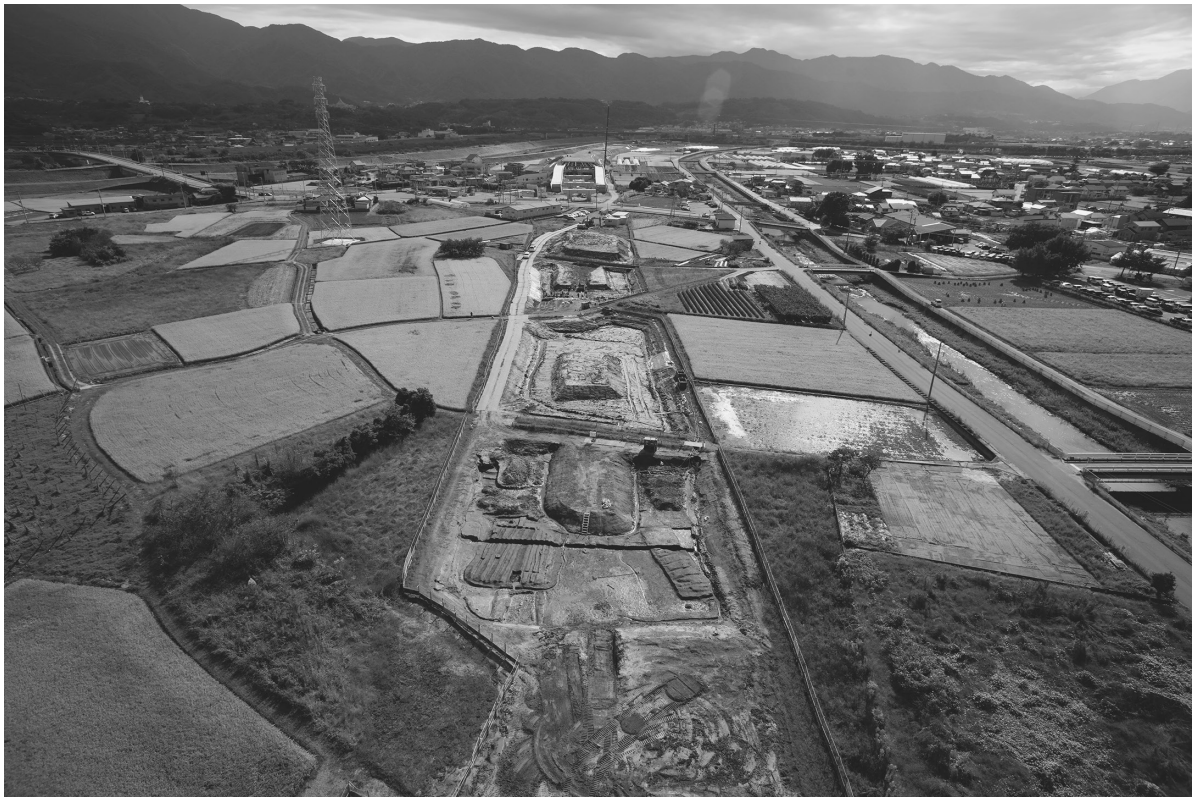
出土遺物⑰

出土遺物⑱

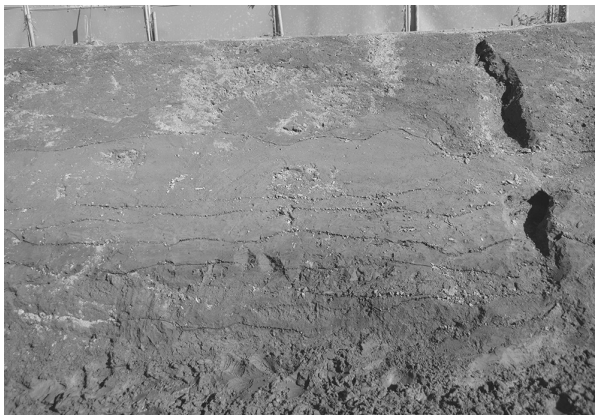
出土遺物⑲



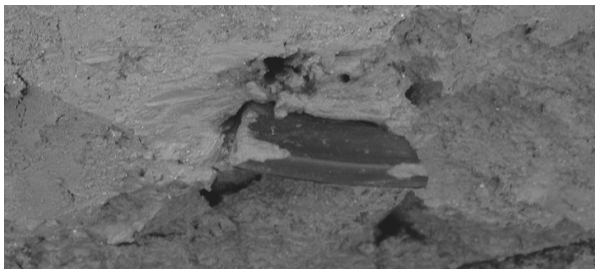
出土遺物⑳



田通遺跡上空北側から（事業地周辺を望む）



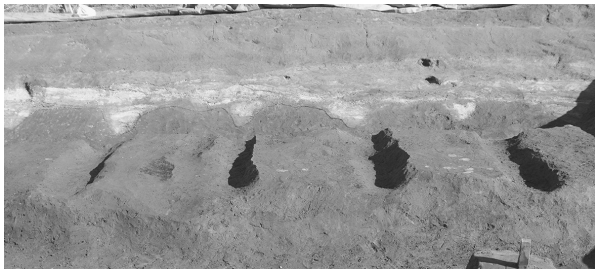
Ａ区東壁土層堆積状況



Ａ区遺物出土状況

Ｃ区遺物出土状況

Ｃ区東壁土層堆積状況



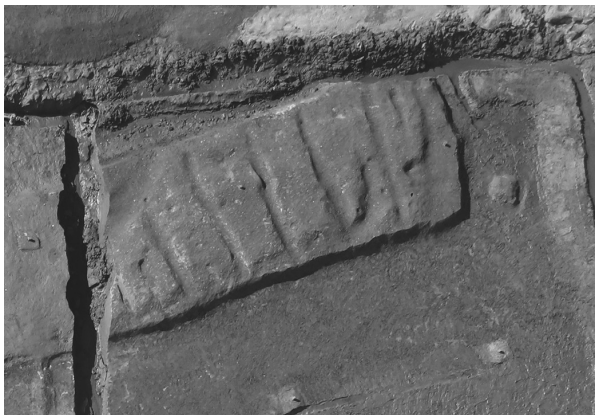
Ｂ区北壁土層堆積状況

遺構精査作業

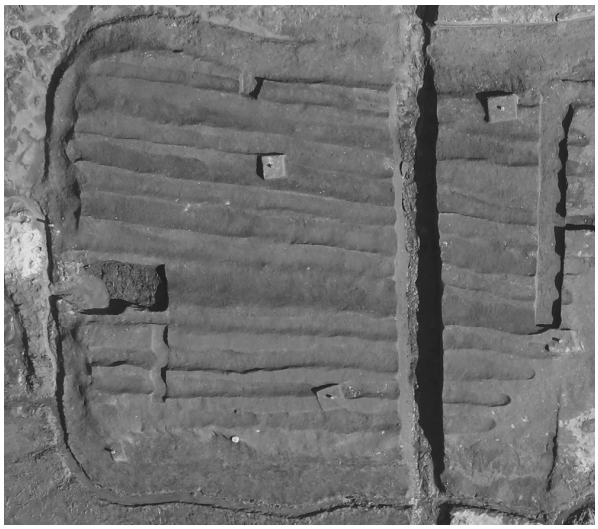
１号畝状遺構完堀状況

田通写真図版３

作業風景



２号畝状遺構完堀状況



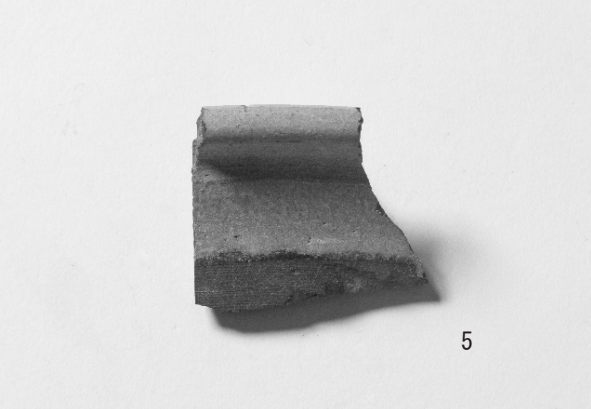
３号畝状遺構完堀状況

記録作業風景（空中写真撮影・オルソ画像等）

埋め戻し状況

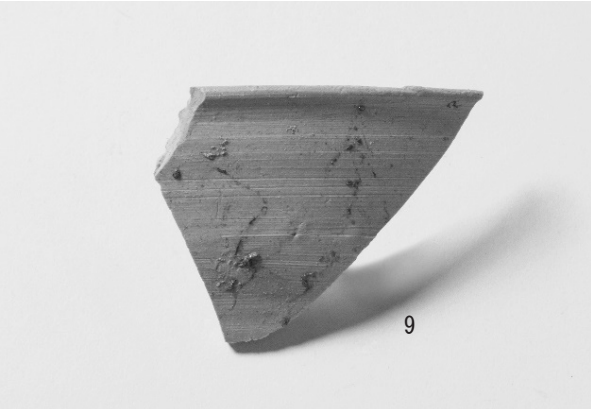
出土遺物①

出土遺物②



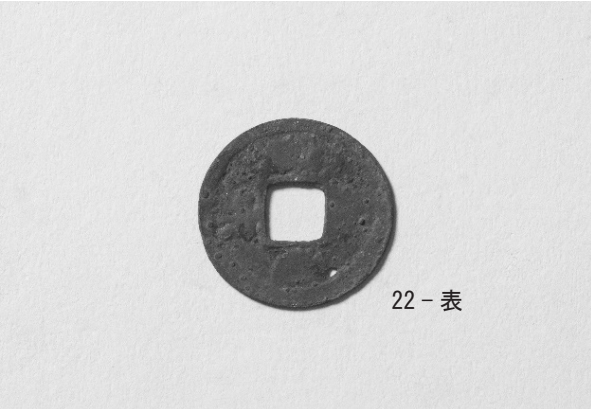
出土遺物③

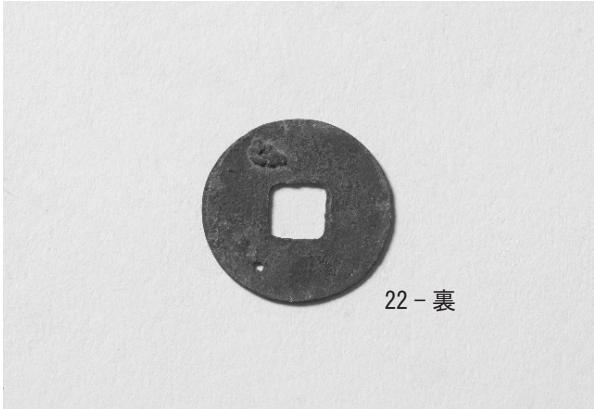
出土遺物④



出土遺物⑤

出土遺物⑥





出土遺物⑦

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ふくべいせき・たどおしいせき
書　　名	福部遺跡・田通遺跡
副　　題	新山梨環状道路東部区間Ⅱ期建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シ　リ　ー　ズ　名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第 335 集
著　　者　　名	高野玄明・御山亮済・桐部夏帆・（株）パリノ・サーヴェイ
発　　行　　者	山梨県
編　　集　　機　　関	山梨県埋蔵文化財センター
所　在　地　・　電　話	〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923　TEL:055-266-3016
発　行　年　月　日	2022 年 3 月 15 日

ふ　り　が　な	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所　収　遺　跡	所在地		市町村	遺跡 No.	（新）	（新）		㎡	
ふくべいせき 福　部　遺　跡	やまなしけんこうふし おちあいちょう 山梨県甲府市落合町				35° 37' 06"	138° 35' 30"	2020.8.6 ～ 2020.12.4	1,050	新山梨環状 道路東部区 間Ⅱ期工事
所　収　遺　跡　名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
福　部　遺　跡	田畑	中世	畑状遺構 溝状遺構		土師質土器、陶磁器、木質遺物、石製品、古銭		炭溜から鉄滓が多数出土。 遺物包含層から青磁 6 点出土。		
要　　約	地表面下約 3 m地点において 15 世紀頃の文化層を検出した。河川氾濫により遺構の残存度は不良であったが、畑の畝状の遺構や溝状遺構を検出した。出土遺物は破片資料のみであったが、周辺にある中世土豪屋敷の存在や青磁片の出土から、土豪支配の縁辺部にある生産領域の可能性を示唆した。								

ふ　り　が　な	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所　収　遺　跡	所在地		市町村	遺跡 No.	（新）	（新）		㎡	
たどおしいせき 田　通　遺　跡	やまなしけんこうふし おちあいちょう 山梨県甲府市落合町				35° 36' 50"	138° 35' 13"	2020.8.17 ～ 2020.12.2	3,150	新山梨環状 道路東部区 間Ⅱ期工事
所　収　遺　跡　名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
田　通　遺　跡	田畑	中近世	畝状遺構		土師質土器、陶磁器、古銭				
要　　約	地表下約 2m 付近において、中近世の文化層を検出。河川氾濫原による遺構の残存状況は不良であったが、畑の畝状遺構が検出された。出土遺物は、土師質土器や陶磁器の破片資料や古銭のみであったが、周辺部に存在する中世土豪屋敷の存在を裏付ける生活環境の一部を窺うことができた。								

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 335 集

福部遺跡・田通遺跡

― 新山梨環状道路東部区間Ⅱ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

印刷日　2022 年 3 月 7 日
発行日　2022 年 3 月15日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923
TEL 055-266-3016
FAX 055-266-3882
発　行　山　梨　県
印　刷　株式会社　峡南堂印刷所